

主は我が牧者

(鈴木一幹兄召天記念誌)

鈴木一幹兄召天記念誌

目次

一 記念誌発刊に当たって	榎本和義牧師	1
二 陸軍召集までの略歴		2
三 軍隊時代(遺稿「我が思い出」から)		
(一) 召集令状		4
(二) 満州へ		6
(三) 九 満州関東軍での思い出		11
(十) 十二 移動編		61
(十三) 十四 台湾編		95
四 復員後のあゆみ		116
五 思い出(投稿)		
(一) 父	福原はつえ(長女)	121
(二) 父の思い出	奥 ひろみ(次女)	122
(三) お父さんへ	大庭 えみ(三女)	122
(四) 一幹兄の思い出	金生一郎(伝道師)	123
(五) 神と人々に愛されし一幹兄	正野 眞宏(友人)	125
六 編集後記		129



記念誌発刊に当たって

榎本 和義 牧師

「よく聞いておくがよい。だれでも幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこに入ることは決してできない」。

(ルカによる福音書十八章十七節)

二代目のクリスチャンは軟弱で、信仰が生ぬるいとよく言われます。ましてや、鈴木兄のように三代目になるとますます立場は悪くなるでしょう。確かに、初代クリスチャンは他宗教から転向したわけですから、その信仰たるや、明快堅固、何ものにも揺るがない強さがあります。しかし、二代目、三代目などになると、初代にない信仰の麗しさを体現するようになります。

鈴木兄はまさにその典型ではないでしょうか。クリスチャン家庭に生まれ、幼少の頃から信仰に触れながら成長しました。何の疑いもなく素直に神様を信じ、イエス様を愛する者となっていたのです。難しい神学的議論や懐疑には縁がなく、幼な子のような単純で素朴な信仰を持ち続けてこられました。といって、ひ弱な心もとない信仰ではありません。柔らかい物腰、有通無碍な態度の奥に神様を信頼する確固たる信仰が

彼の人生を支えてきました。どのような事態・状況にあっても、みことばを頼り、祈りによって平安、慰め、勇氣、望みを得ておられたのです。

彼の戦争体験を書いた記事を読むと、時間のフィルターを通して淡々とした語り口で軍隊生活を語っています。そこには激しい感情や情感はありません。しかし、ただ単なる懐古趣味的な昔話ではなく、自分の体験を神様のドラマとして捕らえ、摂理のなかで生かされた自分を見る確かな信仰のあかしとなっています。

平和運動家や歴史家が語るような「戦争」への直接的批判はありません。しかし、彼は決して先の戦争を肯定しているわけではなく、軍隊の持つ非人間性、暴力などを幾分滑稽な描写を通して明らかにしつつ、反戦の意思を明確にしていると言えます。そこに静かな三代目クリスチャンとしての真骨頂があります。

また、克明に記述された軍隊生活は当時の日本軍がどのような内実を伴ったものであるかを明らかにする資料でもあります。戦争を知らない世代が多くなった時代ですから、このような体験談は貴重なものと言えます。

読まれる方々に神様の思いが届くようにと祈ります。

二 陸軍召集までの略歴

遺稿となった「わが思い出」に入る前に、一幹兄の略歴に触れたいと思う。

一幹兄は大正十四年（一九二五年）五月七日に父荒木築蔵、母美保の一人息子として、福岡県京都郡行橋町（現在は市）行事で生まれた。父築蔵は久留米出身で、明治専門学校（現九州工大）卒業後、電力会社に勤めた。

父は、一幹兄が生まれて百日ぐらいの時、二八歳で亡くなり、爾来、実家に帰った母と祖父父母の下で、愛情を注がれて育てられた。兄の生涯変わらぬ親孝行の思いは、幼児期の愛情と母の苦勞を目の当たりにしていたからであろう。

祖父鈴木千尋は明治元年大分県中津市に生まれ、家が豊前中津藩の武士だったことから福沢諭吉との親交があり、そのため十六歳の頃、諭吉を頼って上京し、その門下生となった。祖父が残した日記には、福沢諭吉の名前が出てくるとの事である。そういう事から諭吉が設立した慶応義塾に入った。そこで西洋の知識に接したことが影響したと思われるが、キリスト教の信仰に導かれ、当時多くの外国人がいて、日本でも最初の教会ではないかと思われる横浜の教会で受洗している。

慶応義塾は病気のために中退、その後、東京工大へ進み、当時の鉄道省の技術者として就職した。そして仕事の関係で勤務地が全国各地を回るように変わって行ったが、退職後は妻の実家が行橋の豪商であったため、そこに家を建てて住むようになった。随分大きな家で、門から家まで行くのにかなりあつたとの事である。

母美保は、横浜のフェリス女学院を卒業した根からのお嬢さん育ちで、夫の死後は無料で和裁は教えたが、外で働くということがはなかった。しかし、祖父の信仰はしっかり受け継がれた。兄は祖父母と母親の賛美歌を聞きつつ育ち、行橋教会の日曜学校にも行き、三代目のクリスチャンとなる。



母美保と共に

兄の後の釣り好きは、右の写真の幼少時代から祖父に連れ

られて釣りに行っていたことに始まる。

昭和七年から十三年まで行橋国民学校、昭和十三年から十八年まで豊津中学校に行き、成績は優秀だったと聞く。卒業後は小倉陸軍造兵廠の事務員として就職する。



豊津中学校入学記念

この時の一年十ヶ月の経験が、後の軍隊で生かされることになる。神様の不思議な導きを感じるのである。

そしていよいよ、昭和十八年の陸軍召集を迎える。満十八歳の時である。



小倉陸軍造兵廠の頃(母、祖父母と共に)

三 軍隊時代「我が思い出」(遺稿)

(八幡前田教会誌「ぶどうの木」から)

〈註：挿絵は一幹兄の直筆である〉

(一) 召集令状

昭和十八年十月三日のことでした。予期していた召集令状が、遂に来ました。

- 令状に書いてあった内容は次のとおり、
- 一 入隊先 久留米市「西部第五一部隊(野砲隊)」
 - 二 入隊日 昭和十八年十月十日 午前九時
 - 三 携行品 ①奉公袋 ②洗面用具一式

③下着一式 ④所持金五円以内
右以外は一切、所持を禁止する。

※ 入隊時に、本状を門衛に提出すること。
以上が、葉書に印刷してあったと記憶している。

母は以前から、「あなたがいよいよ入隊するときには、聖書と讚美歌を必ず持って行って！」と言っていました。私が返事をしなかったので、令状到着と同時にさらに厳しく持参を迫

りました。「必ず持って行きなさい。きっと神様が守って下さるから」と。

丁度その頃は第二次世界大戦の真つ只中、しかもレイテ作戦を始めとした南方戦線の戦果も思わしくなく、米英を相手に生きるが死ぬかの激烈な戦いの最中で、軍隊に行くのに、いくらキリスト教信者としても、聖書・讚美歌を持ち込むことは、果たして許されるだろうかとの不安もあり、躊躇していたわけです。

私は、祖父を始めクリスチャン一家に生まれました。家の近くにあったメソジスト行橋教会に、家中の者が毎日曜日には日曜学校に通い、中学生からは礼拝に出席し、湯浅牧師のお話を聞き、信仰を持っているつもりでしたが、いざ入隊を前にして持って行くべきか否かについて毎日苦しみました。

これは丁度、江戸時代にキシタンの弾圧の際に行われた踏絵を踏まされる時の心境ではないかと思いました。

いよいよ出発二日前になり、意を決して、母の前で荷物をまとめることにし、奉公袋に洗面具と下着一式と財布(小銭で五円)と、最後に聖書と讚美歌を入れました。

今にして思えば、これは信仰があつたから持参を決意したのか、あるいはいはずれ戦死する身なら、母の願いをせめて最後に叶えて上げようとの考えからか、今でも明らかではありません。

ません。横で見ていた母は、満足そうに喜んでいました。

出発は入隊日の前の日で、行橋駅頭には町長さんを始め沢山の人が、日の丸の旗を持って見送って下さいました。

私のほかにも一人の方が同時に同じ隊に入るとのことで、駅で初めて紹介されました。(その方は後で隊の移動中、戦死されました。)

久留米の叔父の家に一夜を世話になり、翌朝、叔父、叔母と母とが部隊の営門まで見送ってくれました。門前で別れる時の母の寂しげな顔が、その後もずっと脳裏に焼き付いていました。

営庭に集まった入隊者は、約四百人余りでした。しばらくして、我々の所に下士官が八人出てきて、その内の一人が前に進み、「只今から服と靴と帽子を支給する。前方の被服庫前にそれぞれ山積みしてあるから、自分に合った物を選んで着るように」、「用意、始め!」と号令がかかりました。

四百人が一斉に、服や靴の山を目指して走りました。服や靴を自分の体に合わせるのは大変でしたが、どうにか合わせることができました。中には靴の右足分を左足に履いていた者もいました。他の下士官が、「次は今から貴様達を野砲と山砲とに分けるので、四列縦隊に並べ!」との号令で、一同は百人

の四列に、縦に並びました。

すると、「左側の百人は山砲、右側は野砲である」と、私は幸いにも右側に居たので、野砲となった。なぜ幸いかと言うと、山砲は主として山岳戦に使用するため、運搬に砲を分解して運搬することが多く、馬や人の背に乗せ、担ぐことが責であるから、力仕事をしてこなかった私には、到底耐え得るものではないと思っていたからです。

それから、五十人ずつ八班の編成となり、下士官(班長)の引率で各部屋に収容された。私は二班で、班長は徳田伍長でした。また二班には、教育掛の上等兵一人と一等兵四人が居て、寝台(五尺のわら布団)の割当て、整理棚の配布、毛布敷布の配布が行われました。私は早速、整理棚の上段に聖書と讚美歌を入れ、下段に洗面具、下着、空の奉公袋を入れました。夕食前に、班長や古兵が全員の整頓状況を見て回られましたが、何も言われず、ひとまずホツとしました。

食事の世話も全部、古兵殿だけでやってくれますので、これでよいのだろうかかと心配でした。夕食後、班長より「貴様達とは本日より一週間、当隊が大切に預かるお客様である。一週間後には当隊を出て、某所の部隊に補充されることになっている。行先は極秘であるので言えない」との説明があった。

一番気にしていた所持品検査もありません、一日を終えよう

としていた。その時、上等兵が来て、「鈴木二等兵はおるか。班長殿がお呼びであるので、班長室にすぐ行くように」との事で、何事だろうと気にしながら班長室をノックした。

「鈴木二等兵、参りました」。「入れ」の声で入室すると、徳田班長は笑顔で待っていて、「固くならんでもよい。その椅子に掛けなさい。ところで、君はおれを知らないか?」「知りません」と答えると、「おれは行橋だ。父が町長、母が婦人会長をしとる。君の爺さんが、父の所によく遊びに来とった。

皆さん、ご家族はお元気か?おれは豊津中学卒で、君より五期先輩や。名簿を見て懐かしく、会ってみたいと思っていた。君達は満州の牡丹江省にある関東軍に配属されることになっている。君の家族には、手紙で知らせておくから安心しなさい。これからの満州は厳しい寒さとなるので、病気になるぬよう気をつけなさい。また関東軍は内地と違って、毎日の訓練が厳しいと聞いているので、これに耐えて頑張るようにな」とのお言葉をいただき、感激に涙が止まりませんでした。

それから出発までの一週間、毎夜消灯後、ベッドにアンパンを差し入れてくれました。これらの事は、とても偶然とは思えません。「神の御業」だったと思っています。

(一九九三年「ぶどうの木」第十九号)

(二) 満州へ

満州への出発二日前から、出発準備のため班内が急にあわただしくなりました。我々初年兵は全員、胸部X線検査等の身体検査を受け、次に三種混合(コレラ・チフス・赤痢)の予防注射がありました。注射器を持った衛生兵が数人並んでおり、各自それぞれ一列に並んで注射を受けます。

「鈴木二等兵」。

「はい」。

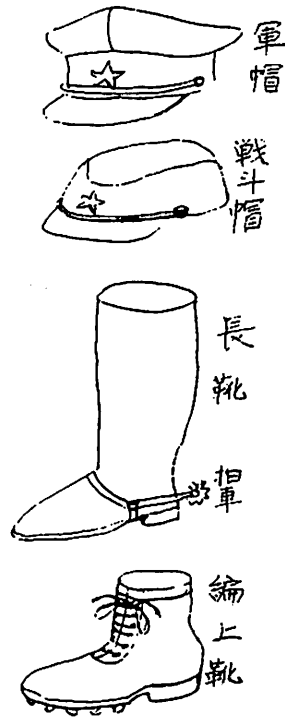
「一歩前に出て胸を出せ」。

「はい」

と言って胸を突き出しました。注射器は静脈用の大型で、一人当たり一CC位で、次から次と針をアルコールを含ませた綿花で拭き、一本で二十人くらい行なっていたようです。胸に上から注射するので驚きましたが、腕にするより痛みはありませんでした。

それから満州行の服に着替えるため、全員が被服庫に集められ、今まで被っていた丸型の軍帽を戦闘帽に、下着から上衣、下衣(ズボン)など全部冬服の新品に交換され、靴も編上の短靴から新品の「靴の踵(くびす)に拍車(乗馬時に馬の腹部を蹴って走らせる時に使う歯車)の着いた靴」にそれぞれ交換

しました。今まで来ていた継ぎはぎだらけのボロ服から、ピカピカの服装となり、我ながら「カッコイイ」姿になりました。荷物の整理や班内の清掃、食事の後片付けなどは初年兵で行ないますが、三度の食事の運搬や配膳は上等兵殿や一等兵殿が用意してくれるので、班内の初年兵はまるで学生が修学旅行にでも行くようなはしやぎようでした。



夕食後、人員点呼(班内の人員を調べ、顔色を見、服装を調べたりする)の後、自分の所持品を整理していると、隣の席の戦友の後藤守二等兵が、「鈴木さん、僕は今日の身体検査で胸部に異常があるとのこと、明朝除隊させられることになっ

た。先程、徳田班長殿に呼ばれ、班長室で言い渡された。本当に残念だが、明朝失礼するよ。君の家は行橋町とのことで、住所も見当がついているので、椎田町への帰りに行橋駅で途中下車し、お宅に立ち寄り、お母さんにお目にかかり、君が元気で満州に行くことを伝えましょう。何かの縁で君とは図らずも戦友となり、幸せだったと思う。君が班長殿より毎晩差し入れを受けたアンパンの味は一生忘れないよ。本当にありがとう。どうか元気でな」と話した。

私も、「君とは何かの縁で戦友となり、一緒に満州に行けると心強く思っていたが、残念だなあ。帰ったら、病院で精密検査を受けて養生し、また教壇に立つてほしい。軍人でもなくても、国へのご奉公は別にできるではないか」と言って励まし、互いに固い握手を交わして眠りについた。

翌朝の朝食後、後藤君は班内一同に挨拶をし、寂しそうな笑顔を見せて立ち去った。

(終戦、復員後、椎田町に彼を尋ねたが、彼は除隊帰郷の翌年の秋に、肺結核で亡くなっていた。両親が仏壇の前で涙ながらに話をされ、「久留米の連隊で戦友になったあなたの話をよくしていました」とのことに、感無量で返す言葉もありませんでした。)

午後一時となり、出発式のため、初年兵全員が営庭に集められ、久留米連隊長の中村大佐より次の挨拶があった。

「いよいよ諸君は本日〇時、当隊を出発し、満州国の関東軍に赴任することになった。部隊に到着配属後は軍務に精励し、国に忠節を尽して欲しい(以下略)」。

次に、関東軍から引率のために着任された輸送指揮官の村上大尉殿、山崎曹長殿ほか各班長になる下士官八名の紹介があり、村上大尉殿より次の挨拶があった、「本官は満州第二二部隊第二隊長の村上である。今回、部隊長の命により、貴様達の輸送指揮官として着任した。満州の我が隊まで貴様達を運ぶので、各自は只今から担当班長の命に従うように」。

以上で式は終わり、各班ごとに新任班長の引率で、それぞれの内務班室に帰りました。我が班の班長は、やかましそうな山崎曹長でした。

夕食後、山崎班長殿より次の通り出発に関しての諸注意があった、「本隊の満州までの移動は、機密保持のため主として夜間を利用することになっている。輸送中は指示ある以外は、勝手な行動や私語は一切禁止する。質問や用件がある者は、山崎に申し出て指示を受けるように。万一これに反した者には規律違反として、容赦なくこれで叩き切るから、そのつもりでおけ」と、腰に吊っていた軍刀を握った。

「次に、今貴様らが着ている服や帽子、長靴は貴様達に支給したのではない。赴任する部隊のものだ。内地から満州の部隊に運搬する手間を省くため、着せて運ぶのであるから、現地到着まで大切に取り扱い汚さぬように」との注意の後、引き続き第二二二部隊の概略の説明があった。

「我が部隊は牡丹江省の東寧県大城子と言う所で、満州の最北端に位置し、その北側は黒竜江(現アムール川)が流れている。幅は約一キロメートルあり、その北側の岸から向こうはソ連領である。すぐ対岸にソ連軍の戦車隊が布陣しているから、万一の場合は、我が砲兵隊は敵の戦車と戦うことになる。この事を今から肝に銘じて置くように。現地の部隊まで、釜山から列車で二日から三日位かかると思う。」

今度貴様達が到着した時は、部隊は丁度冬期演習でほとんど出払っているので、空になっていると思う。これからは冬に向かい次第に寒くなり、毎年の最低気温は零下四十度位までに下がる。初年兵の中にはよく凍傷に罹る者が出るが、十分注意するように。冬の過ごし方などは、到着後に教えることにする。我が関東軍は日本一強い軍隊である。いや世界一強いと言ってもおかしくない。従って、貴様らがその部隊の一員となるためには、関東軍方式で徹底的に鍛え、可愛がってやるので、今から覚悟しておけ」。

一同、シーンとして聞いていた。

九時の消灯三十分前となり、全員携行品の再点検をし、私は次の順序で雑糞(ざつもの)に詰め込んだ。まず母から貰った聖書と讚美歌を一番重いので底に入れ、千人針は腹に巻き、次に軍人勅諭に戦陣訓、便箋封筒、万年筆、五円が入っている財布、下着に洗面具、タオル、それに母が用意してくれた救急用小袋、これは中にメンソレータム、正露丸、包帯等が入っているもので、これらをやっと詰め込んだ。少々重いのが我慢することになりました。救急袋を母が作ってくれたのは、私が今まで毎冬、手足にしもやげができることと、腹を壊すことが多かったため、持つて行くようにと作ってくれたものでした。

消灯ランプが鳴り、寝台にもぐったが、零時までには数時間しかないことと、これで故郷や日本ともおさらばか、そんなことを思うと、いつまでも眼が冴え、母をはじめ祖父達の笑顔が浮かび、行橋駅頭まで見送ってくれた親類の方や友人達の顔が次々に現れて、いつしか涙が顔を伝い、全く眠れませんでした。

零時となり、「起床！」の号令で飛び起き、急ぎ軍装を整えて、営庭に各班毎に整列しました。

点呼の後、村上大尉殿の「各班毎に出発」の号令で、第一班

から八班まで順々に出発した。営門には左右に久留米連隊の兵隊が整列し、見送りを受けたが、その中に、短期間ではあったが、お世話になった徳田班長殿をはじめ、世話を戴いた古兵殿の顔も見えた。「元気で頑張れよ！」「風邪に気をつけろ！」の声を背に聞きながら、各班毎に敬礼、「頭右！」「直れ！」をして営門を後にした。

昼間とは違って、どの家も寝静まった久留米の町を、靴音だけがバリツ、バリツと響き、久留米駅目指して黙々と進みました。その内、入営前日に一泊した叔父の家の前を通つたが、勿論寝静まっていた。「叔父さん、叔母さん、どうかいつまでもお達者で」と、心で祈りました。

久留米から乗り込んだ列車は客車でしたが、窓は鎧戸が下ろされ、開けてはならぬとの命令でした。

下関からは連絡船で向い、釜山からは列車で行くことになっていましたが、釜山駅ホームには未だ客車が到着していませんでした。反対のホームに貨物列車が八両着いているのみでした。

その内、村上大尉殿より各班長に指示があり、山崎班長殿より、「我々は今から、反対のホームに着いている貨物列車に乗車するので付いて来い」との事で、驚きながら付いて行きました。まるで荷物扱いでした。貨物車両の床には藁筵が敷き

詰められ、ドアを開けると真つ暗で、天井中央に十ワットの電球が一個ぶら下がっているのみでした。トイレ代わりにドラム缶の二つ切りが車両の隅に一個用意され、この一車両に五十人ずつがすし詰めとなりました。全員があぐらをかいて座ると、全く身動きできず、雑糞は肩から外して各自膝の上を抱く始末でした。

やがて夜になり、列車はガチャンと大きく数回揺れて動き出しました。コトン、コトンとゆっくりした車両の音で、速度は遅く感じました。駅と思しき所に停車してもドアは開けられず、私語も禁止されているので、どこの駅かも分からず、三時間くらい走ってやっと停車し、ドアを開けられても、そこは人家の全くない草原地帯で、しかも約五分間の停車時間で出発の汽笛がなるので、この僅かな時間内に全員が蟻の這い出るように列車から飛び降りて、大小の用足しをし、タバコを吸い終わらねばならぬ有様でした。

また三度の食事は、人家のない所に、事前にトラックで運ばれた場所に列車が停車し、弁当を貰い、車内で食事をするわけですが、お茶の持込ができないので、車外でお茶だけ飲み、弁当を食べる時はお茶なしでした。朝夕がそれぞれ麦飯のおにぎり二個にタクワン少々と梅干、夕食のみおかず付の

弁当でした。

睡眠も横にはなれぬので、座ったままのウトウト眠りで、頭もぼんやり、おまけに尻も痛み、一同クタクタの内に三日目の夕方(午後五時頃だったと思ふ)、終点の東寧駅に到着しました。

東寧駅には馬を携えた兵隊達が、十数人で迎えに出ていました。持参していた馬は、引率者の村上大尉殿や班長殿の乗馬でした。一同駅舎に整列し、ホツとする間もなく、部隊を直指して出発しました。東寧駅から大城子の部隊営門まで約五里(二十キロ)あるとのことでした。

道路の沿線には所々に土で造られた満人の家が見え、家からは煙が上がっていて、夕食の用意をしているのだろうと思いましたが、人影は見えませんでした。十月の半ばを過ぎ、満州では草も枯れて茶色一色となり、無舗装の道路は北風に舞い上がる黄砂が横断し、眼が開けられぬ状態でした。

引率の山崎班長殿は部下が提供した馬に乗り、馬上から「早く歩け、このような歩き方では、部隊に着くのが朝になってしまふぞ」と命じるので、皆は馬の速さに遅れまいと懸命に歩きますが、長靴を履いているので思うように足が上がらず、そのうち腹は減るし、喉は渴いて、生きた心地はない有様でした。

久留米の隊で戦友だった後藤君の代わりに戦友になった川上二等兵が隣に並んで歩いてしたが、月明かりのせい、顔色が非常に悪く見えた。「おい川上、大丈夫か」と言ったとたん、「鈴木さん、おれはもう歩けそうにない。先に行ってくれ」と、あえぎながら言った。「おい、もう少し頑張れ。もうかれこれ四時間位は歩いているので、五里は進んだと思う。隊ももうすぐだと思うので、おれの肩を握って歩け」と言うと、すまんなあ」と言つて手を出してきたので、肩を掴まらせ、片方の手を引つ張るようにして歩きました。

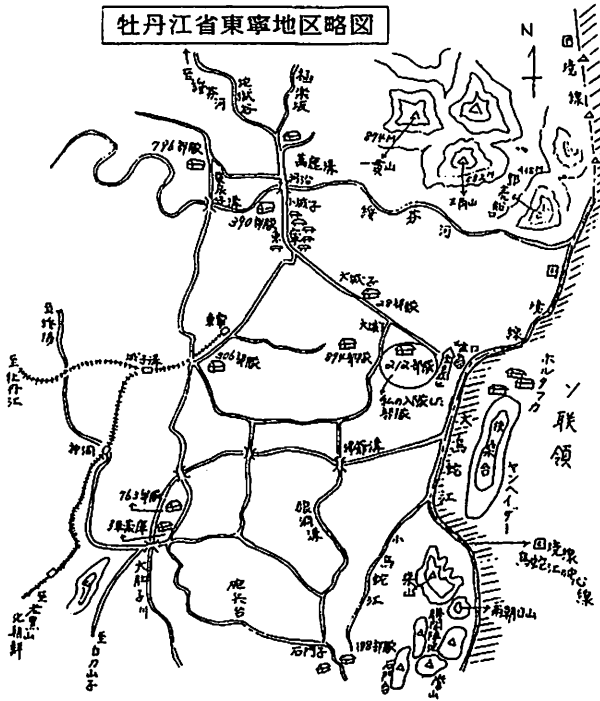
雑囊の重みが肩に食い込み、疲れが絶頂に達した頃、山崎班長が馬上から、「前方五百米先に明かりが見えるのが当隊だ。あと一息だ、頑張れ」と号令した。午後九時過ぎ、やっと営門に到着した。班長殿の「歩調を取れ」の号令で、皆は疲れた足ではあるが、歩調を揃え、門内に入った。後で約十数名が途中で倒れたとの事を聞きました。

その夜から、満州関東軍での生活が始まりました。

(一九九三年「ぶどうの木」第二十号)

(三) 満州関東軍での思い出

満州関東軍での思い出を語る前に、当時、私の所属した部隊と現地の気候風土などについて、あらかじめご紹介するこ



一 第一師団について

当時、福岡県久留米市に本拠を置く第十二師団が、東満州国境の牡丹江地区に派遣されたのは、昭和十一年（一九三六年）と聞いている。それ以来、終戦間際まで、主としてこの東満辺地区の治安維持とソ満国境の警備に当たっていた。

この地に送り込まれる兵隊は、主として福岡、佐賀、長崎の三県出身の現役兵であった。

我々が入隊した頃の第十二師団の駐屯地は、牡丹江省東寧県（略図参照）で、城子溝に師団司令部があり、同じく城子溝に歩兵第四八連隊、通称満州第三〇六部隊（久留米）、大城子に歩兵第二四連隊、通称満州第八九四部隊（福岡市）と野砲兵第二四連隊、通称満州第二一二部隊（久留米）、石門子に歩兵第四六連隊、通称満州第一〇八部隊（大村）、大肚子川に輜重兵第十八連隊、通称満州第七九六部隊（久留米）が配属されていた。その他、大肚子川に騎兵第十二連隊、大城子付近に工兵第十八連隊があった。

この第十二師団への指揮命令は、牡丹江にあった第三司令部が行なっていた。当時の第三軍司令部は陸軍中将川辺正三閣下で、第十二師団長は陸軍中将笠原幸雄閣下（後の関東総参謀長）であったと記憶している。

我が第十二師団の駐屯した東寧地区は、綏芬河の支流、大

鳥蛇江を境としてソ連の陣地と対峙しており、このソ連陣地のある正面の大地を、我々は日本名で扶桑台と呼んでいた。またその北側には、ソ連の国境の町ポルタフの白壁の家を遠望することができた。

いずれ日ソ開戦の暁には、この敵陣地を一気に撃破し、ウラジオストクの後方を遮断し、沿海州を制することが作戦のねらいのようであった。

我が砲兵隊の毎日の演習で、砲撃の方向指示を受けた目標は、北方では険しい山容を見せる郭亮船口（四一五の山）、南方は石門子、東方では永久陣地（勝関陣地）のある南朝日山・柴山等があった。

この間に展開した岳陵地帯の曠野の窪地に師団所属の前記各部隊が分散配置されていた。

我々が演習で曠野を駆け、問道を行軍し、また馬の運動で隊外に出て通過した地名に、狼洞溝、佛爺溝、城子溝、大城子溝、萬籠溝など「溝」と言う字のついた地名が多いのは、こういった地形から名付けられたものと思われる。

東寧の町は、兵隊目当ての飲食店や慰安所のほか、バラック建の映画館があったが、国境の町らしく何の潤いもない殺風景な町でした。しかし休日になると、他に行く所のない兵隊達は酒や女を求めて街に溢れていた。

因みに、前述の勝鬨陣地は昭和二十年八月、ソ連軍が怒涛のように満州領内に侵攻を開始した後も、地下陣地に立てこもって一步も引かず、八月二八日、関東軍の特使の命によって降伏するまで徹底抗戦を続け、ソ連軍を悩ませたとの事であった。この陣地を死守した部隊は、歩兵第七八三大隊の將兵約千名であったとの事である。

二 満州の氣候と初年兵

初年兵の苦勞は、兵種(歩兵とは砲兵、工兵等の別)により差はあるが、特に幹部候補生有資格者に対しては、「関東軍の軍人精神を叩き込んでやる」との美名の下に、古年兵のひがみ(來年の今頃、將校になれば、捧げ銃をしなければならぬので、今の内に殴っておけ等)からくる陰湿な私的制裁は酷かった。初年兵は同班内の古年兵の洗濯や靴磨きのほか、身の回りの世話、馬の世話までやらねばならず、野砲隊や輜重(しゆちよう)隊では初年兵は馬からも苛められて、辛い日々が続いたものだった。

寒風吹きすさぶ国境の冬は、十月を過ぎると毎日温度が下がり、十一月頃からは零下となり、十二月から翌年三月ごろまで酷寒となり、零下四十度位まで下がる。毎朝當庭のポールに三角の赤旗が何枚上がっているか、一枚が十度で、三枚

上がってれば零下三十度ということだった。これを見て、服装を整えていた(例えば今朝は零下十度であるから、防寒帽の垂を下に降ろしてかぶるなど)。

高原だから空気までが凍って、固体化するような感覚である。積雪は深く二十センチ位までで、風で吹き飛ばされ、降った雪もすぐ凍り付いていた。室内ではペーチカのお陰で二十度以上の暖かさで、部屋の内と外との温度差は実に六十度近くあり、外から急に部屋に入ると、一瞬息が止まる感じ、しばらくは眼鏡を拭いても曇ってよく見えず、ウロウロしていると動作が遅いと言って、ビンタの種になった。風呂からの帰り道、外に出てタオルを一振りしただけでピンとなり、放尿すれば、外の方から見ている間に凍ってゆき、大便の時はよく下を見てからしやがまないと、尖ったもので刺されるといふほど、寒気は厳しいものでした。

東満の春は非常に遅く、五月頃やっと雪が解け始める。

ほとんど未舗装の道路は、至る所ドロドロのぬかるみとなり、歩行は大変であった。六月になると、曠野一度に花園と化し、芍薬、百合、あやめ、菖蒲、鈴蘭、迎春花などが咲き乱れる。それは延々と野の果てまでも埋め尽くし、一望千里の花のカーペットである。

さて、以上で概略のご紹介は終わり、いよいよ私の初年兵

生活に戻ることにはしたい。

三 赤飯に尾頭つき

営門を通った初年兵四百人は、連隊本部前の営庭に各班毎に整列し、輸送指揮官村上大尉殿による人員点呼の後、各中队に分散引率された。

引率の山崎曹長より、「当中隊は満州二二部隊所属の第四中队である。中隊長は前田克衛中尉殿で、只今は冬季演習に出ておられる。ほとんどの兵も留守であるが、明日午後には帰隊の予定である。当中隊の内務班は、一班から四班まで四つある。今から各班の引率者が来ているので、名前を呼ばれたら、呼んだ引率者の方に来るように」と説明の後、それぞれ班毎に分けられた。中隊の初年兵は約五十人で、第四班は十二名でした。私の第四班は第四中隊の建物の一番禺の部屋で、その先は洗面所と厠(便所)になっていました。

戦友の川上二等兵も同じ班で、お互いホツとしました。

ガランとした班室には、留守を預かる中村源治兵長殿と上等兵の幹部候補生殿の二人のみで、我々十二名を迎えてくれ、部屋中央の長机(食卓)には、既に夕食が用意してありました。

口髭を生やし、見るからに荒武者の風貌をした中村兵長殿は、「やあ、貴様達ご苦労であった。皆の来るのを首を長うし

て待つちよつた。今日は歓迎のため、特に夕食は赤飯と鯛の尾頭付き、隊の味噌汁等お祝いのご馳走である。今から食べながら、おれの話聞いてくれ」。

一同腹ペコになっていたので、一斉に食事を始めた。実にくまなく。やっと人間らしくなった感じだが、久留米を出てから四日間、ゆっくり食事もできず、また風呂にも入っていないので体が汗臭く、あちこちが痒い。

しかし、今夜の食事は、確かに内地ではなかなか食べられないと思った。鯛等は どうして調達したのだろうか、この満州の奥地に良くぞ運搬できたものだと、不思議に思うばかりでした。

中村兵長殿の話によると、明日午後から中隊長殿や第四班班長殿よりそれぞれ歓迎の挨拶があるとのこと。それから現役で入隊して以来五年になり、この間一度も内地には帰ったことがないこと、昨年は同年兵の大部分が満期となり、除隊となつて内地に帰つたが、自分と第一班の成瀬兵長と第三班の花田上等兵の三人だけが残された。もうすぐ来年になるが、そうすると六年兵になる。俺は五年間、日本人の女性を見たことがないとぼやいていた。

食事の後、食器の後片付けをした後、寝台の割当が行なわれた。廊下から一番目は野中二等兵、前原出身でお寺の長男、

二番目は緒方君で、建築会社のトビ職をしていた由、三番目が戦友の川上君で長崎出身、長崎高商を卒業後、三菱造船所經理課にいたとのこと、四番目が私、五番目が八木君で、香椎出身で船員をしていたとのこと、六番目は山崎君、田川出身で小学校の教員だったとのことでした。他の六人は食卓を挟んで向かいの寝台になっていました。

毛布、敷布、枕等の支給を受け、寝台の上を整理し、寝台の奥の整理戸棚に持参した雑糞から所持品を出して移し入れました。その中には軍人勅諭、戦陣訓のほかに讚美歌と聖書も納め、蓋をし、やっとホッとしました。その夜は特に十時の消灯まで、古兵殿三人を交え、初年兵十二名と楽しく話に花が咲きました。特に中村兵長殿が、「貴様達は今夜から南京子さんや白井イカ子ちゃんが可愛がってくれるので、覚悟しておけ」と言われ、初年兵一同何の事だか分からず、顔を合わせました。

四 馬糞街道

朝六時の起床ラッパ、「起きろよ、起きろ、起きないと古兵さんに叱られる」で飛び起き、点呼の後、真つ暗の中全員駆足で、中隊から約五百米離れた第四中隊の馬舎に引率された。そこで馬舎週番上等兵殿から、初めて馬の取り扱い方を習つ

た。習ったと言っても、馬舎の馬房に繋がれている馬を一頭ずつ引き出して、水飲場に連れて行き、丁度ソーメン流しのように設けられた木製の水槽に馬の口を引っ張って行き、馬が飲み始めると、馬の喉に手を当てて飲み込む回数を数え、飲み止んだら元の馬房に引き入れる。その際、馬舎の入口にいる週番上等兵殿に、「久緑(馬の名前)四六回であります」と回数を報告すると、週番上等兵殿は「久緑四六回、よし」と答え、ノートに記していました。これは二十回以下の馬には馬糧は与えないことになっており、馬の病気の詮痛(糞づまり)防止のためだとのことでした。ほとんどの初年兵が馬を扱うのは初めてで、恐れもあったが、軍馬は調教してあるためか、比較的小となしく従順でした。

次の作業は、馬舎の外に山積された馬糞の入ったカマス(重量約六十キロ)を、一人一俵担いで馬舎から約三百米の裏門を通り、さらに約百米先の大鳥蛇江の川土手まで運び捨てる作業でした。門を出てからの百米は川土手に登る坂道でした。馬舎当番の一等兵殿が二人がかりで馬糞カマスを持ち上げ、「誰からでもよいから、肩を持って来い」と怒鳴り、初年兵は我先に腰をかがめて肩を出した。カマスの数が約三十位あるので、遅れた者は三回運ばされることになるからである。

朝飯前の作業であるので、走り出しても力が入らず、フラ

フラしながら宮門にたどり着き、衛兵に「第四中隊第四班鈴木二等兵、馬糞を捨てに来ました」と大声で叫ぶと、「よし、通れ」で、やっと門外に出ると、今度はかなりの坂道で、皆ヨチヨチ歩きで、どうにか土手の頂上に到達すると、土手上は六米の道路があり、この道路を横断した先が川に向つて斜面になり、あたり一面馬糞の海でした。カマスから馬糞を捨てて休む間もなく、次を運ぶために急いで帰らなければならず、一同小走りで馬舎を目指した。

二回目を終えて到着すると、馬舎当番の一等兵殿が、「お前達が一番遅かったので、残った二俵はお前達が持つて行け」と、私と私の後になつていた戦友の川上君に命じました。二人とも他の者より体力もなく、入隊前には米俵一つも担いだことがない私共は、再びフラフラしながら裏門に近づいた時、後についてきていた川上君が「アッ、しまった」と大声を上げ、肩からカマスを落としているではないか。「鈴木君、どうしようか」と今にも泣き出しそうな声で私の方を見ていた。六十キロのカマスを一人で持ち上げ、担ぐことは到底無理なことだ。私も止まっているので、肩はしびれ今にも落としそうになつた。私はとつさに、「川上君、半分捨てて軽くしたら上がるだろう」と言った。川上君は半分以上をカマスから馬糞を道路上に出し、やっと肩に乗せて歩き出した。

捨て終えて馬舎に戻ったら、他の初年兵は竹箒で馬舎の周りを掃いていた。我々二人が帰つたのを見た週番上等兵は、「初年兵集まれ、横一列に並べ。今の馬糞捨て作業中、誰か道路に馬糞を捨てた者がおる。後片付けは当番兵にさせるが、今後絶対にこぼすな。誰がこぼしたは詮索しないが、第四班初年兵全員の連帯責任である。今から皆に関東軍の軍人精神を叩き込むためにカツパをくれてやる。眼鏡を外せ。歯を食いしばつて足を開け！」と言つて、一番右端にいた川上君から順に入隊初のカツパ（鉄拳）を受けた。この時初めて、馬糞の嫌な臭いが頬から鼻に伝わつた。初年兵の中には鼻血を出す者、唇から血が出ている者もいた。

一人の失策が皆に迷惑をかけるなあと思ひ、また私のアドバイスも責任だなあと思ひ胸が痛んだが、しかしあの時は、それ以外によりよい方法は見当たらなかつたと思つた。内務班に帰つて川上君が初年兵の皆に、「今日は自分の失策で、皆に迷惑をかけてすまなかつた。許してくれ」と詫び、皆も「仕方がないよ。我々でもあることだからな。心配するなよ」と、彼を慰めた。この馬糞捨て作業は、これから毎朝の少年兵の日課になつていくので、余程の体力がないと、到底ついて行けないと思つた。

午後、冬季演習から帰隊した兵隊で、班内は一度に活気づ

いた。当四班の人員は、十二名の初年兵を含めて約五十名になった。

中隊長の前田中尉殿より初年兵全員に対して歓迎の挨拶があり、中隊付の教官大神大尉殿、同じく石井見習士官殿より歓迎の挨拶と班内の中村兵長殿を始め古兵殿の紹介があった。

午後三時頃、第四中隊の初年兵一同は、大神少尉殿の引率で初めて第四中隊の砲廠(ほうしょう)や弾薬庫を見学し、営外に出て、ソ連との国境線やソ連側の陣地を見分することにまりました。

砲廠の建物は白煉瓦造りで、出入口の扉のみが木製で、施錠がしてありました。建物前に整列すると、砲廠衛兵が駆け足で大神少尉殿の前に駆け寄り、捧げ銃をし、「砲廠衛兵勤務中異状ありません」と報告すると、大神大尉は「ご苦労、今から初年兵に砲を見せるから、扉を開けよ」と命じました。

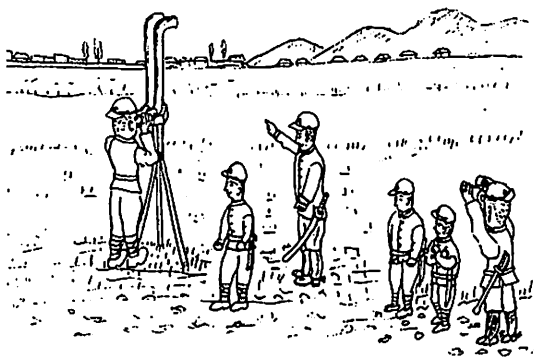
砲廠内に入り、一同は初めて見る大砲の数々に緊張し、目を輝かせて説明に聞き入りました。砲はその口径と砲身の長さで種類が分かれ、我が野砲隊の砲は口径十センチ以下とのことで、十センチ以上の砲は野戦銃砲隊に属すること。

当連帯の砲には十センチ榴弾砲、八・五センチの改造式野砲及び山砲の三種類で、当中隊は改造三八式野砲でした。

次に弾薬庫を見学し、弾体、薬きょう、信管等の説明を受

けた。さらに一同は裏門から外に出て、馬糞捨て場前の道路を北進すること約一キロで停止、ここで大神少尉殿より次のとおりソ連国境線と周辺の状況の説明があった。「前の川は綏芬河の支流の大烏蛇江という川で、川幅は約六百米、水が流れている部分は約四百米である。川の中央が国境線になっている。川向こうの小高い山は扶桑台と呼んでいる。この山の北側にソ連軍の陣地があり、ソ連の戦車隊が駐屯している。

この川は十一月頃から来年三月頃まで凍結するので、川は歩いて渡れることになる。万一日ソ戦になれば、あの戦車隊と戦うことになる。観測用の大型双眼鏡(ほうたい鏡)を用意したので、一人ずつ覗き、ソ連の陣地と戦車をよく見ておくように」と言われた。肉眼では見えなかつ



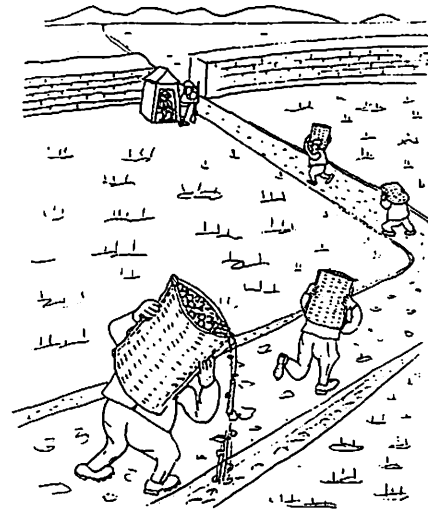
だが、双眼鏡を覗くと赤レンガ塀越しに大型戦車が並んでいるのが手に取るようによく見え、近くに歩哨と思われるソ連兵数人の動くのが目に焼きついた。緊張の一瞬でした。

帰隊して中隊前で解散し、それぞれの内務班に戻った。班内の古兵達は演習の疲れか、夕食が終わり、点呼後は早々と就寝してしまった。我々初年兵の寝台の上の段(二階)には、中村兵長殿や上等兵殿の寝台があった。私は九時の消灯ランプ「新兵さんはかわいやな、また寝て泣くのかよ」が鳴って就寝しましたが、今朝の馬糞運びが思い出され、明朝からどうしたものかと不安になり、苦しい時の神頼みの言葉のとおり、入隊以来祈った事がなかったお祈りをしました。

「天の父よ、どうか私に力を与えてください。私を守り、私に勇気を与えてください。また戦友が共にあなたに守られ、無事に任務を果たすことができますように……」。

毛布を被ってここまで祈った時、私の真上に寝ていた陣内上等兵殿が階段を下りてきて、「おい、何をブツブツ言ってる。お前ら二人起きて、おれに付いて来い」と促され、私と川上二等兵とが後に従いました。行く先は厠で、並んで立小便をしながら私達に話してくれました。

「お前ら、今朝馬糞担ぎをやらされ、誰かがカマスを落と



して全員カッパをやられたろう。あの馬舎週番上等兵はな、武田と言う俺と同年兵で、いい奴だ。演習から帰り、馬を馬舎に入れた行った時、武田上等兵からお前らの事は聞いていた。俺も三年前に入隊して馬糞捨てをやらされ、落として酷い目に会った。その時、古兵殿に教えてもらった。従って、困っているお前達に申し送る。お前達は俺と同じで要領が悪い。あの道は我々の間では馬糞街道と言うてな、各中隊の馬舎から出る馬糞は、皆あの道を通って捨てられるのや。六十キロもあるカマスを一回運ぶのに四百米、往復で八百米、二回行けば千六百米になる。お前らのモヤシみたいな体では到

底無理だ。体が先に参つてしまふ。「一つ、軍人は要領を本分とすべし」じゃ。そこで明日からは、馬糞を担いだら、カマスの口は開いているから歩きながら少量ずつこぼして歩くことだ。半分くらい撒けば大部軽くなるだろう。道路の両端は素掘りの溝になつていたので、これにこぼせ。馬舎からは週番上等兵がお前達の運ぶのを見ているが、道路の右側に寄つて歩き、右側の溝に少しずつこぼして行けば、見ている方からは死角になつて見えぬので、その方法でやってみよ。良いな」と教えてくれた。

翌朝、馬舎で早速馬糞捨て作業が始まり、二人は昨夜陣内上等兵殿から教えてもらつて方法を実行し、軽くして運んだ結果、昨日はビリになつた二人が、何と三番、四番で到着し、二回の運搬で終わり、これなら馬糞街道の運搬も何とか続けられると思つた。

(一九九四年「ぶどうの木」第二一号)

(四) 満州関東軍での思い出Ⅱ

当時、私の所属した満州二二二部隊(野砲第二四連隊)での日課は、夏季と冬季では差があるが、十月では朝六時起床(夏季は五時)、六時半点呼(人員点検)、引き続き馬舎行「水飼・飼付(馬に水を飲ませ、餌を与える)」、七時半朝食、八時から十二時まで午前の訓練、その間十時頃十分間の休憩が一回あるのみ、十二時に昼食休憩、十三時から十七時まで午後の訓練、午前中と同じく十五時頃十分間の休憩が一回、十七時から再び馬舎行(水飼・飼付)、十八時夕食、夕食後は二一時の消灯までは内務班教育及び自由時間となつていた。

二一時は消灯ラップを合図に常夜灯以外は全て消され、就寝することになる。従つて、衣類の整理や縫い物あるいは手紙を書き読書する者は、下士官室の隣の予備室を利用できることになっており、この部屋だけは一晚中電灯がついていた。勿論ペチカも焚かれ、室内は暖かくなつていた。

以上の時間割で毎日が繰り返されたが、初年兵には到底消灯前には自分の時間は得られるよしもなかった。

一 向こう向け

起床ラップで飛び起き、服装を整え、枕・敷布・毛布等を

たたみ、寝台の奥に重ね、次は古兵殿の寝台に行き、同じく毛布等全てをたたみ、すばやく整頓し、六時三十分の点呼に間に合うよう洗面し、厠も済ませねばならない。当四班の古兵殿は約六十名、初年兵十二名で、初年兵一人当たり五人の古兵殿の世話をする必要があるわけで、さらに古兵殿の中には、「俺のフンドシを洗っとけ」、「下着を頼んだぞ」などと、沢山の洗濯物まで引き受けさせられ、これらの整理に追われ、点呼時間前に便所に行けば洗面ができず、洗面に行けば便所行きの時間がなくなる。モタモタした者は両方でできずに、やっと点呼に間に合う始末である。

以前から朝型であった私は、洗面より先に便所へ行ったが、士官・下士官用を除き兵用の便所は十カ所で、その各扉の前にはすでにそれぞれ数人ずつの兵達が並んでいた。

待つこと久しくして、やっと中に入って驚いた。入口の扉はあったが、中の間仕切りがない。ないと言うより、あった間仕切りを最近のこぎりで切り取った様子である。取り急ぎズボンを下げてしゃがみこみ、ひよいと顔を上げると、何と前にかめしい髭面がこちらを睨み付けているではないか。襟章は三つ星の上等兵殿でした。「おい、貴様は向こうを向け」と怒鳴られ、「はあー」と私は立ち上がり、やっと後ろ向きになつてしゃがんだ途端、今度は二つ星の一等兵殿がこちらを

睨み付けていました。そして今度は「貴様は下を向いとけ」と怒鳴られました。さすがの私も出かけたものが引つ込んでしまい、便所をするどころではありません。顔面冷や汗をかき、そのうち外から扉を叩かれ、「おい、まだか」と怒鳴られ、ついに命からがら諦めて、外に出ました。

それにしても、どうして間仕切りを外してあるのか、不思議に思いました。またこの時、自分の朝型を夜型に変えなくてはと思い、消灯後であれば朝のような事はないだろうと思つた。

朝食後に、こつそり陣内上等兵殿に便所の仕切りについて尋ねると、小声で「それはな、昨年入隊した初年兵が、毎日の訓練に耐えかねて、便所で首吊り自殺しよつたからじゃ。それで間仕切りを取り除き、どこからでも一目で見えるようにしたのや。お陰でみんな迷惑しとるのや。また夜間に逃亡した奴もいたが、朝点呼で大騒ぎになり、皆で手分けして探したところ、



雪の中に倒れ、凍死しとった。決して死ぬなど、つまらぬ事を考えるなよ」との話であった。それは内務班における初年兵教育という美名のもとで行われる毎日の古兵からの陰湿な制裁に耐えかね、逃亡し、または死を選んだのだろう。これからの毎日、どんな制裁を受けるのだろうか、どのようにしてこれに耐えろというのか、非常に不気味な予感を感じた。

二 五臓六腑の苦しみ

今朝は気温も零下五度とのもので、いよいよ本格的な冬の到来である。朝食頃から外は吹雪となり、窓ガラスの枠には雪が付着して来た。第四班の初年兵十二名が集められ、佐藤班長殿よりそれぞれに担当兵科の発表があった。

まず砲手班に、私と戦友の川上君(長崎の三菱造船勤務)、それに山崎君(小学校教員)、野中君(前原町のお寺の住職)の四名、次の御車班(馬を扱う)に緒方君、八木君等四名、通信班に三名、観測班に一名が割り当てられた。

教育担当の班長(下士官で伍長)の紹介があった。これから訓練は各兵科の班毎に行なわれるとのことであった。

我等砲手班の教育担当は、たまたま私の班の佐藤班長殿が兼ねていました。勿論、第四中隊の初年兵五十名は、それぞれ砲手班二十名、御車班十六名、通信班八名、観測班六名に

分けられていた。

初年兵中、幹部候補生有資格者は八名で、全員が砲手班に編成されていた。我が四班では川上君と山崎君と私の三名でした。午前中は各兵科班毎に、その班長から説明があり、午後からは吹雪も収まり、初年兵全員に初めての乗馬訓練が行なわれた。第四中隊付の大神少尉殿の引率で馬舎に行き、ここで御車班の荻原班長及び教育担当の上等兵五名の紹介があり、各自の自分の担当馬を一頭ずつ馬場に引き出した。大神大尉殿より次のとおり注意があった。まず馬の骨格構造、一番大切な馬蹄(足の爪の裏側に打ち付けてある蹄鉄。冬は鉄さいと言うスパイクのように釘の付いた馬蹄がはめられ、雪や氷上でも滑らぬようにしてある)について、馬の性質、馬の病氣、鞍引具等の説明があり、馬の口に取り付け、手綱を取り付けている「タイロク」(馬の口に入れ、舌を挟む金具)の噛ませ方、手綱の持ち方など手本を示し、各自にやらせた。

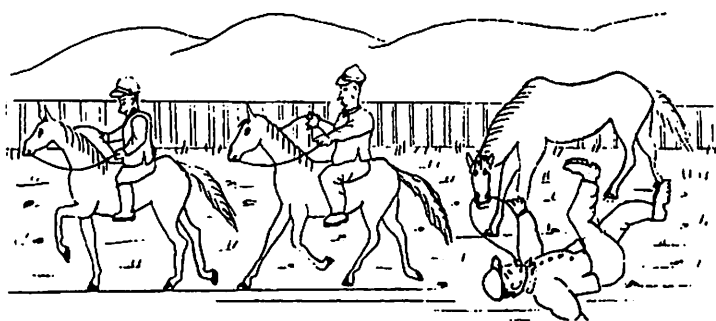
いよいよ各自の持ち馬に乗馬することになった。十頭ずつの五班に分かれ、まず上等兵殿が乗って見せた。

乗鞍は付けていない。いわゆる裸馬であるから、まず左手で馬のたてがみを二重に手に巻きつけ、首にしがみつくように一気に飛び乗った。実に見事な乗り方に、さすがに古兵だなと感心した。初年兵は前列の者から乗り始めた。

しかし、誰も要領が悪く、どうしても一人では乗れず、古兵殿が手伝って、尻を下から持ち上げてやっとな乗っていた。私もとうとう押し上げてもらった。

満州の軍馬は内地の馬より一回り大きいように見え、冬のためか毛も深く、よく太っていた。馬の背丈は我々の頭の高さより少し高い位であった。私の身長は一六五センチで、同じ初年兵中では低い方で、しかも親譲りの短足であるから、あぶみの付いた乗鞍であればと思い、また防寒被服で着膨れたいでたちでは、

到底飛び乗れるものではないと思った。馬の背にやっとな乗ると、意外に高く感じたのには驚いた。屋根に登ったようだ。足を締めろと言われていたが、馬の腹があまりにも太く、足が短いためか、力を入れても全く効果なかった。



馬場を一行に並んで進んだが、馬の振動が尻に伝わり、朝便をしていないために腹が脹り、ガスが上に行ったり下がったり、五臓六腑を駆け巡り、唇を噛んで我慢して進んでいたが、先頭馬の上等兵殿の「早足進め」の号令で、馬が一斉に早足となり、しかも馬場の曲り角に来て馬が急に方向を変えたため、不覚にも横に落馬し、その瞬間ドスンという音と共に、腹に溜まっていたガスが一気に噴き出しました。馬は立ち止まって後ろを振り返り、落ちた自分をあざ笑うように、じつと見ていました。

三 幹部候補生受験辞退意思表示

夕食が終わり、ほっとする間もなく、いつものとおり、班内の初年兵に対し、古兵殿の説教が始まった。今日は御車班の古兵殿二人から、乗馬訓練について厳重な注意が始まった。「乗馬中は足を内側から絞って乗れと言っておいたが、皆言うことを守らなかつたから、落馬者が続出した。これは気合が入つたらんからだ。今後は絶対落ちないように、今から貴様達に気合を入れてやる。覚悟しろ」と、ここまで聞いた時、「鈴木二等兵はおるか」と廊下から入ってきた中村兵長殿の声。「はい、ここにおります」と答えると、「佐藤班長殿が呼びだ。すぐ班長室に行け」と促された。これから皆と古兵殿から制裁

を受けるのに、と行きあぐねていると、兵長殿が「早く行け！」と言われたので、「行つてきます」と、特に大声で叫んで、班長室に行きました。

少々狭い部屋ではあるが、長机と椅子が四脚、班長使用の分机と椅子、それに壁側に寝台が置かれ、毛布等の寝具が正しく整頓されていました。

「鈴木二等兵、参りました」と言うと、「おお来たか。その椅子に座れや」と言われ、遠慮なく腰掛けました。「貴様は行橋出身やな。それに一人息子やな」と言いながら、名簿を見ていました。「俺はなあ、宇佐出身や。わしの班には日豊線の者は貴様とおれ二人だけだ。中隊でも他にはおらんようじや。行橋には入隊前にはよく行つたものだ。姉が新田原のカトリック修道院に勤務しとるので、ちよくちよく逢いに行つたもんや」と言われた。私は「班長殿はキリスト教でありますか」と質問すると、「ああそうや、カトリック教徒や。両親や姉は実に熱心な信者だが、おれは子供の頃から腕白で、洗礼は受けたが遊ぶことが忙しく、なまぐさやつたなあ。ところで、貴様は名簿によると、幹部候補生の有資格者だな。受験に備えてしつかり勉強しなさい。この部屋の隣の部屋が予備室になっており、夜間電灯がついているので、そこでしなさい」と言われた。

そこで私は意を決し、前から思っていた事を次のとおり話しました。「お言葉はありがたく感謝しますが、私は中学校時代陸士を受験し、一度は合格しましたが、身体検査の目の検査で視力が足らず、不合格となりました。以来、軍人には不向きだと信じ、受験は考えておりませんので、よろしくお願ひします」と申し上げました。

すると、班長殿は「そうか、残念だが貴様がそう言うなら、わしは了解するが、中隊長殿がどう言われるかなあ。まあ時間も十分あるから良く考えて置け。これから何でも相談に乗るから、遠慮せずにも何でも言え。よいな。「はい、有難うございませう。ところで一つお願いですが」。「おお、何でも言え」と班長殿が答えられた時、ドアがノックされ、「お茶を持って参りました」の声がした。「ご苦労、入れ」で入つて来たのは、当番兵の古賀一等兵殿（後で佐賀市内の漬物屋をやつてゐると分かる）で、お盆にお茶二人分と大福餅の入つた紙袋を乗せ、目の高さに持ち、一礼して机の上に置きました。班長殿は「ご苦労、貴様よかつたら、餅を一つ持って行け」。「有難うございませう。では、一個戴き帰ります」と言つて出て行きました。「おい、ここで食え。貰つたものだが、今頃は内地ではなかなか食えんぞ」。「班長殿お願いですが、自分は今朝から厠に行く間がなく、困つていますので、これを戴く前に、今か

らチョット行つて来てよくありますか」。

「ああそうか、朝は時間がないだろうなあ。貴様は今夜から夜便型に変えたらよからう。今から行つて来い。済ませたら、またここに来て餅を食え。中村兵長には申し付けてるので、心配するな」と言われ、地獄で仏とはこの事かと思つた。

餅を戴き、班長殿と行橋の事、班長の郷里の事など花が咲き、内務班に帰つたのは、消灯後半時過ぎてからでした。既に皆は眠つていた。

翌朝、戦友の川上君から昨夜の出来事を聞いた。初年兵全員制裁として床に腕立て伏せをさせられ、十分くらい頑張つたが、そのうち、腹が床につくと、木銃の台尻で尻を叩かれたとのことであつた。

四 笹(こ)で水を飲む

今朝は営庭のポールに赤の三角旗が一本昇つている。マイナス十度台である。防寒帽の垂を下ろしてかぶり、防寒服、外套、防寒靴、防寒手袋等を着用し、活動的でない格好で屋外に出た。外は雪が十センチくらい積んでいる。石段も道路も境が分からぬまま、慣れた古兵殿に従つて歩いた。外気が零度十度以下のためか、吐く息まで白く、顔が突つ張つた感じがした。

馬舎作業を終え、朝食を済ますと、直ちに訓練に入った。

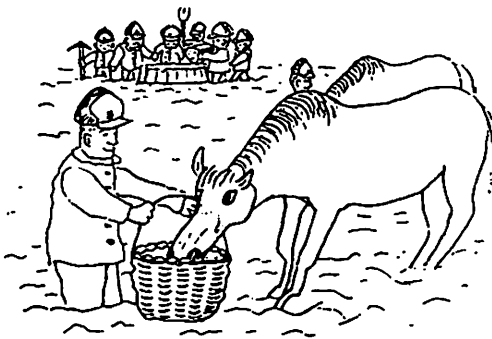
今朝の訓練は、初めて馬を引いて営外に出ての雪中行軍である。四中隊の初年兵五十人、石井見習士官殿の引率で馬舎に向つた。御車班の上等兵より馬舎横の倉庫に誘導され、「前に用意してある台車に、倉庫にある柳笹を積み込め」と命ぜられ、台車に約五十個くらい積み込んだ。この柳笹にはそれぞれ紐がついているが、一体これを何に使うのだろうか、皆が訝つた。皆が口々に「何に使うのだろうかなあ」と言っていると、古兵殿が「うるさい、その内に分かる。命令どおり早くやれ」と言うのみであつた。一人一頭ずつ馬を引き、台車は古兵殿が馬を引かせた。古兵達は乗鞍の付いた馬に乗馬し、われわれは馬を引いて歩いて行つた。

馬はスパイクのような「鉄さい」を履いているので滑らずに進むが、我々の防寒靴では凍つた道は滑つて歩きにくく、馬の速さに付いて行くのが大変だつた。それでも約三時間くらい行つた所で、小休止となつた。見習士官殿が「小休止は貴様達を休ませるのではない。天皇陛下からお預かりしている馬を休ませるのである。従つて、貴様達は古兵の命に従つて、それぞれ馬に水を与え、それが終わった者は馬の足をさすれ」と命じました。次に古兵殿が「台車に摘みである柳笹を各自一個ずつ持つて、こつちに集まれ」と命じ、一同は近くの土の盛

り上がった所の井戸の周囲に集まりました。

井戸の縁には雪が積もり、深さ約四メートルの水面は白く凍っていました。ロープを伝って古兵殿二人が中に入り、他の古兵殿がつるはしとスコップを上から下ろしました。一人が中央部を丸く割り、一人はスコップで割れた氷を傍に寄せ、直径一・五センチの丸型の穴ができ、水が見えました。氷の厚さは五センチくらいだったと思われず。古兵殿が初年兵に、「順番に柳箆を中に下げろ」と命じ、その都度箆を水につけ、上

に上げさせました。
すると、十秒も経たぬ内に箆の周りは氷が張り付き、バケツに化したわけです。これぞ厳寒地における人間の知恵だなあと、一同感嘆の声を発しました。早速水を汲み、各自持ち馬に飲ませました。この間十分で、早く飲ませ終えた者は、「藁束こう」で馬の足をさすりました。



我々は休む暇もなく、足を引きずり、滑っては歩き、転んでは起き、雪道を必死に歩き、沸爺溝(ぶつやっこう)の村落に到着しました。この間の距離は約二十キロでした。やっと昼食を済ませ、また来た道を引き返し、午後の小休止にも十分で、午前中と同じく水飼いを行い、夕方帰隊しました。

五 神のみぞ知る我が命

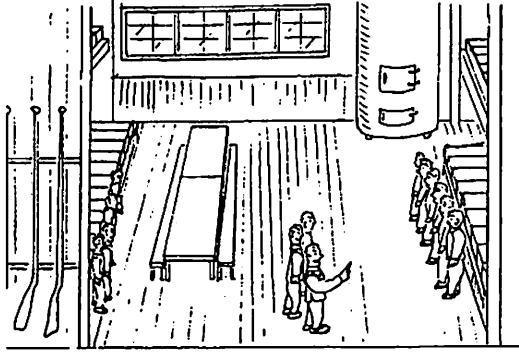
今日は朝から一日中営外の訓練があったので、昼休み予定していた洗濯を夕方行なった。御車班の古兵殿がほとんど馬舎に行っていて、班にはまだ帰っていないので、夕食後毎日行なわれている説教がまだ行なわれないからだ。洗濯物を干し、一息入れていると、馬舎から古兵殿が帰ってきました。その内の二、三人の上等兵殿は、どこで飲んだか酒臭く、顔も赤くなっていて、そのうちの一人、金子上等兵殿が「おい初年兵、今から貴様達の所持品検査をするので、衣類以外の物は残らず寝台の上に並べろ」と命じました、他の古兵達も数人「おお、やるか」と、これに同調するように金子上等兵殿の傍に寄り添いました。

夕方から降り出した小雪は一向に止む様子もなく、窓越しに吹雪がますますひどくなっているのが見える。室内ではペチカが真っ赤に燃え、寒暖計は二四度を示してかなり暖かだ。

外は恐らく零下十度は過ぎてゐるだろう。

各自は寝台の奥の整理棚より所持品を出し、寝台の上に並べ始めた。私も全部出し、軍人勅諭・戦陣訓・洗面具・五円入りの財布・千人針、ナタ豆の入った腹巻(母の手作り)・入隊前に家族で写った写真・最後に聖書と讚美歌を並べた。検査は廊下側に位置する野中君(前原町のお寺の住職)から始まった。

(一九九五年「ぶどうの木」第二二号)



所持品検査

(五) 満州関東軍での思い出し

一 神は我が牧者なり

所持品検査の指示により、我々初年兵十二名は、各自の寝台の上に所持品を並べました。金子上等兵殿は、皆に「気を付け。全員一歩前、回れ右」と号令をかけ、寝台と初年兵との間隔を開けさせ、廊下側に位置している野中二等兵の寝台前に行きました。他の上等兵殿二名も金子上等兵殿に従いました。

軍隊での寝台は「五尺の寝台、藁布団」と言っていたように、木綿の布団袋に打ち藁が入れてあるもので、暑さ約二十センチ、幅約七十センチ、長さは約百六十センチ、就寝時は敷布にくるみ、枕を後で並べ、ちようど封筒の中に潜り込むようにして中に入って寝ていました。

皆はこの寝台の上に、所持品を並べました。勿論、奉公袋等の中身を出し、その袋の上に並べました。

金子上等兵殿は、「おい、野中二等兵、この本は何の本か」と質問があり、野中君は「はい、この本は入隊時に父からもらった般若心経であります」と答えると、「お前は仏教信者か」との質問に、「はい、自分の家は真宗のお寺であります」と答えた。今度は他の上等兵殿が、「おい、この写真の若い女の子

はお前のこれか」と言つて

小指を示して尋ねました。

野中君は、「これは自分の妹であります」と答えると、

「嘘を言うな、お前に似たらんやないか。

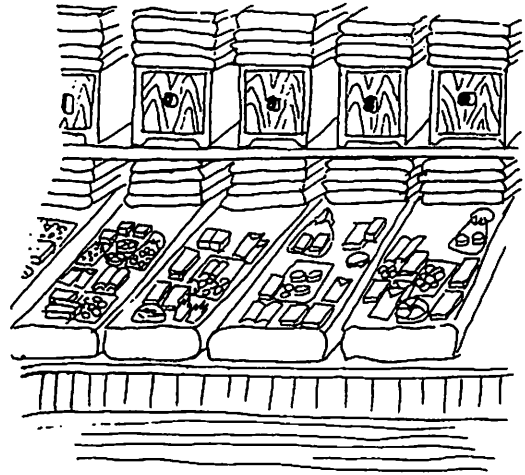
これはおれが預かつてお

く」と言つてポケットに入れました。また、もう一人の上等兵

殿は財府の中を開き、「十円がはいつとるぞ。おい、この中に五円札が、二枚が入つとるぞ。入隊時の規則では所持金は五

円以内になっているじやろう。これは違反やで、五円札はおれが預かつとく」と言つて、これまたポケットに入れました。

次の緒方二等兵の所に移りました。この緒方君は入隊前は土建会社でとび職をしていた由。誰よりも気性が荒く、気も短い男で、両腕には竜の刺青のある人物でした。金子上等兵が、



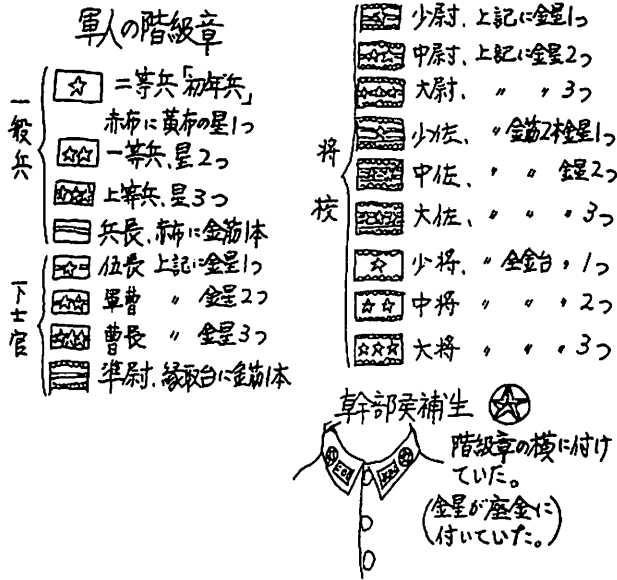
「この本は何や、漫画本か」と尋ねました。緒方君は、「漫画本ではありません。講談社の猿飛佐助であります」と答えた。「こんな本は初年兵の時は必要ないのではないか」と言つて、ペラペラと頁をめくっている内に、中に挟んであったのか一枚の写真が出てきました。女優のプロマイドでした。すると、「よし、これは没収や」と言つて、これも自分のポケットに入れました。さらに緒方君の大型財布を開け、中の硬貨と紙幣を出し、調べ始めました。

「おい、これは二十円あるぞ。これも規則違反や。そうだろうが」と、大声で怒鳴りました。緒方君は、「はい、そうでありますがお袋が発券時に、こつそりくれたものであります」と答えました。すると、「これは違反だから五円を残し、後はおれが預かつておく」と言つて取ろうとしましたが、緒方君は手から離さず、顔も怒りで青白く見えた。その時、金子上等兵殿は「貴様は上官の言うことが聞けないのか」と言いながら、緒方君の両頬に平手打ちを食わせました。緒方君が取り落とした財布から五円を残し、他は全額自分のポケットにねじ込みました。緒方君がじつと我慢している様子がうかがえました。

金子上等兵殿と他の二名の上等兵殿は同じ三年兵で、今の時間帯は、四年兵や五年兵は全部特別勤務で不在となつてい

て、班内には初年兵と数人の二年兵、三年兵、それに幹部候補生の上等兵（二年兵）が数名いたが、皆三年兵には手も足も出せず、ただ傍観するのみでした。

同じ中隊内では、下士官以上を除き、年功が権力の順位と



廊下側から野中君、緒方君と二人の検査が終わり、次は戦友の川上君の番になりました。金子上等兵殿は、「おい、お前の奉公袋の下にある写真はどこで写したのや」と聞きました。

「はい、僕が入隊の時に、三菱造船所の経理課一同で入隊記念に撮ったものであります」と答えると、「僕とは何や。軍隊では自分のことは名前を言うのや。川上と言うんや。もう一度言い直せ」。「はい、川上が入隊の時に、経理課一同で記念に写ったものであります」と答えました。「そうか、しかしこの写真にはほとんど男はいないやないか。お前の横に並んでいる男は誰や」。「はい、川上以外の男子社員は七名おりましたが、ほとんど召集され、それぞれ陸海軍に入営し、最近では横に折られる課長と二人だけになっていたものであります」と答えました。

すると、金子上等兵殿は、「女ばかりの中で写った写真など見るのも女々しい。こちらに寄こせ」と怒鳴りました。川上君は写真を握り締めたまま、渡そうとはしませんでした。その時、金子上等兵殿は、いきなり川上君の右頬に平手打ちを食わせ、「寄こせと言ったら、寄こすんだ」と怒鳴りつけました。川上君は左によろけ、その弾みに眼鏡が飛び、持っていた写真も落ちました。金子上等兵殿はその写真を拾うと、直ぐに奥にある真つ赤に燃えているペチカの口を開け、その中

に投げ入れました。川上君はよろけながら、飛んだ眼鏡を拾い、掛け直しました。川上君はその時唇を噛み締め、眼には光るものがありました。

金子上等兵は再び川上君の前に立ち、「貴様は幹候やな。大分たるんどるようなやな。貴様のような奴が、後一年もして将校や下士官になってたまるか。今後おれが十分可愛がってやるから覚悟しとけ」と言いました。他の上等兵殿が、油紙の袋を見つけました。「これは何か」。「はい、飴玉であります」と答えると、「ほう、これはおれが預かっておく」と言って、胸のポケットに入れました。

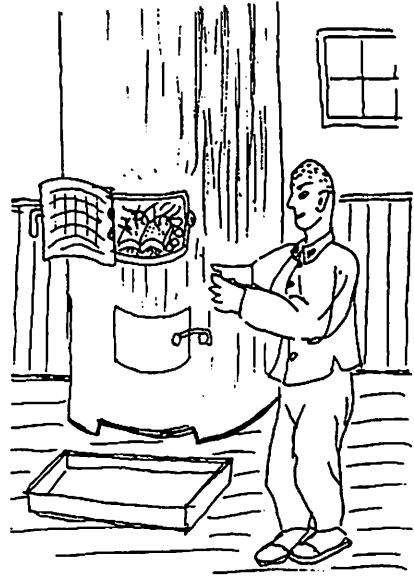
「では、次や」と言って、いよいよ四人目の私の前に来られました。私は寝台の前の方に向かって、軍人勅語、戦陣訓、洗面具、救急薬品類、便箋封筒、財布（五円入り）、千人針、ナタ豆入りの腹巻（母の手作り）、家族で写った写真、一番奥に奉公袋の上に聖書と讚美歌を並べてありました。上等兵殿三人は、手分けして調べ始めました。

財布の中も調べているようでしたが、五円のみで、これで終わったと思った時、金子上等兵殿が一番奥に置いていた讚美歌と聖書を見つけ、大きい方の聖書を手にして、「この本は何の本か」と尋ねました。「はい、それは聖書であります」と答えると、「何、聖書だと。耶蘇なのか。貴様は耶蘇教か」と言

われました。私は、「はい、キリスト教であります」と答えました。「そうか、信者か。耶蘇教の本尊は何か言ってみい」と尋ね、金子上等兵殿の顔は紅潮し、顔を引きつらせて言いました。私は意を決して、「キリスト教では全知全能の神であります」と答えました。すると、キリスト教は外国の宗教だろう。しかも今、日本と戦っている米英などでの宗教だろう。そんな敵国の宗教信者は非国民ではないのか。そんな宗教は直ちに止めてしまえ。何が神だ。我々軍人が信ずる神は、『氣をつけ！』、恐れ多くも天皇陛下である。現人神と云うではないか。お前が信じる神と天皇陛下と、どちらを信じるのか、返事をせい。我々軍人は、国のため、天皇陛下のためにご奉公に来ている。毎朝点呼の後、東方遥拝（宮城の方向に向かって陛下に最敬礼すること）を行なっているのは何のためか。貴様は今から耶蘇教の神を捨て、天皇陛下を信じることだ、よいか」と言いながら、聖書の表紙をめくりました。

表紙の内側には「神は愛なり」と墨書きされ、その下に行橋教会牧師、湯浅雅人と署名があり、さらにその下に横文字で外人宣教師の I・L・シーバーとサインがしてありました。（シーバー先生は行橋教会の伝道のため、毎月一回程度、大分県中津市から来られていた宣教師で、母が聖書にサインしてもらっていたものです。私が小学生時代に日曜学校に通っ

ていた頃、シェーバー先生がニコニコして、大きな手を私の頭の上に乗せ、「あなたは良い子です。きっと神様が守ってくれますよ」と言われた言葉が蘇りました。」



「この外人のサインは何じゃ。この毛頭かぶれめ」と言いながら、手に持っていた聖書をいきなりペチカの焚口を開けて投げ込みました。見る間に聖書は青白い炎を上げ、燃え上がりました。金子上等兵はペチカを離れ、再び私の前に戻り、「貴様も幹候やな、それなら尚更や。今から関東軍の軍人精神を叩き込んでやる」と言って、私の左頬から殴り始めました。掛

けていた眼鏡は飛ばされ、隣の川上君の後ろの寝台の足に当たり、眼鏡の縁が折れ、レンズが転がりました。

だんだん殴る力も加わり、左右と交互に続き、七、八回までは数を覚えていたが、その内、何回殴られたかも分からなくなり、痛さも次第に感覚がなくなって行きました。

母の勧めで聖書と讚美歌を持ち込んだばかりに、こんなひどい目に遭うとは思っても見なかったわけです。神様が守ってくれるどころか、大変な目に遭っている。このまま死んでしまうのではないだろうか。情けなく、恨めしくも思えた。

まだ制裁は続いている。とその時、金子上等兵殿が大きな声で、「野中二等兵、バケツに水を汲んで来い。早く行け！」と命じました。数分後、水の入ったバケツが金子上等兵殿の前に用意されました。私は、この水をどうするのだろうか、私の頭にかぶせられるのかなと思っていると、金子上等兵殿はおもむろに、履いている右足の手縫いのスリッパ(軍隊では上靴と言っていた)をバケツにしばらく浸し、水を吸って少し柔らかくなったスリッパで再び殴り始めました。最初の一発を受けた時は、目が真っ暗になり、その中で頭の頂上から無数の星が飛び散りました。生まれて初めての経験でした。右、左と殴られるたびに星の飛び散る数が増え、体がぐらつくのを感じ、その内全く意識がなくなりました。

どのくらい時間が経ったか分かりませんが、初めに母の声
が聞こえました、「二ちゃん、しっかりせんね。これくらい
事で負けてどうするね」と言っていました。それから行橋教会
の教壇で、湯浅牧師のしゃがれ声が聞こえました、「エホバは
我が牧者なり、我乏しき事あらじ、たとい我死の谷を歩むと
も、禍害を恐れじ、汝、我と共に在せばなり」と、聖書のどこ
に書いてあるのか、新約か旧約のどちらにかかっているのか
全く分かりませんでした。

その内に意識が戻り、数人の初年兵に抱えられて起こされ
ました。一番先に目に入ったのが佐藤班長殿の顔で、その横
に川上君の心配そうな顔を見えました。佐藤班長殿の「鈴木二
等兵、しっかりせい。おれが分かるか」と言われ、川上君に「川
上二等兵、寝台に寝かせてやれ。そして洗面器に水を汲んで
きて頬を冷やしてやれ」と命じました。

それから班内全員総立ちになっている兵隊達の前に金子
上等兵殿と他に二人の上等兵殿も立たせ、「貴様ら三人は、誰
の指示命令で私物検査をしたのか。しかも、勝手に制裁をし
た。平素から中隊長殿から注意されているではないか。それ
から、ポケットに入れてある物を全部出してみよ」と命じまし
た。三人はポケットに入れていた預り物、没収品の本や写真、
紙幣まで全部机の上に出しました。これを見た佐藤班長殿は、

「貴様ら、所持品検査を理由に金品をくすねるとは何事か」と
叱り、三人並べて平手打ちを食わせました。「今直ちに、それ
ぞれに返してやれ」と命じ、返品させました。そして班内最古
参の中村兵長殿（五年兵）に事の次第を説明し、以後三名につ
いて厳重注意をするよう命じました。

それから、「全員
に言っておく、よ
く聞け。宗教は仏
教であれ、神教で
あれ、キリスト教
であれ、わが国の
憲法で信教の自由
が保障されている
おれもカトリック
信者であるが、皆
と同様、国に尽く
す心に変わりはな
い。皆よく覚えて置け」と言って解散を命じ、私のもう一冊の
讚美歌を持って班長室に帰って行きました。

これ以後、遂に所持品検査は私止まりで終わり、その後の
検査はありませんでした。やっとホッとすると同時に、顔の



痛みが走り出しました。両頬が腫れ上がって、口は全く開きません。しかも左の口の中に石様の固まりがザラザラし、口に溜まった唾液をちり紙に受けると、欠けた歯の一部と血が出て来ました。川上君が湯飲みに汲んで来てくれた水で少しづつうがいをして、口をすすぎました。川上君は一晚中タオルで冷やしてくれ、戦友としての恩は決して忘れることにはできません。

寝台に休んで目を閉じ、制裁を受けている時の事を考えました。神様が私の身代わりに聖書を召され、私を守り生かしてくれたのではないだろうかと感謝し、今後どんな困難や苦しい事に出会っても、神が私の牧者として導いてくださると信じ、感謝しました。

翌朝点呼後、佐藤班長殿より、「具合はどうか。まだ痛みはあるか」と声をかけられ、中隊長殿の許可証の張つてある讚美歌を返してくださいました。従つて、今後は晴れて讚美歌を持つことができ、しかも自分はクリスチャンであることが班内に公認となりました。川上君の一晚中の看護のお陰で、幾分痛みも和らぎ、朝の点呼にも参加できましたが、頬は腫れ上がってまだほてっていました。

週番仕官の宮崎少尉殿が到着、佐藤班長殿が、「週番仕官殿に敬礼。頭右。直れ。第四班総員五四名、入室(連隊本部の

医務室に入室している者)一名、伝騎(中隊長殿外の営外居住の将校を、乗用馬を連れてお迎えに行つてゐる兵)三名、馬舎当番四名、北門衛二名、砲廠兵二名、以上勤務兵十二名、合計十二名、差引現在人員四二名。番号!と号令をかけました。宮崎少尉殿は兵一人ひとりの顔や服装を見て廻り、私の前に来た時、「鈴木二等兵、顔はどうした。頬が腫れているが」と尋ねられました。

「昨夜殴られて、このようになりました」と、正直に昨夜の事をありのまま報告すると大変な事になり、しかも佐藤班長殿にもご迷惑をお掛けすることになると思い、「はい、昨日から奥歯が痛んでおります」と答えました。週番下士官殿は顔をつくづく眺めながら、「佐藤班長、鈴木二等兵は本日は練兵休にする。午前中医務室に行かせ、治療を受けさせろ」と命じました。

朝食になったが、口がほとんど開かないので、味噌汁だけやつと口の横から吸いました。

医務室の軍医殿は鈴木という同じ姓の中尉殿で、受診の際も、「貴様も鈴木だな。歯痛と言うが、カッパを食つたな(カッパとは満州での軍隊言葉で、叩かれることを言う)。左下奥歯二本欠損や。それに左右口内打撲裂傷だ。古藤衛生兵、口内消毒、リバノールガーゼを嘯ませとけ。お前は明日も来る

ように」と言つて、治療を衛生兵に任せました。古富士衛生兵殿は治療をしながら、「歯が痛いというて来る者は、貴様だけじゃない。ここに来る初年兵は、ほとんど歯が痛んで腫れたと言つて来よるわ」との事でした。治療を終えて帰班しましたが、昼食は汁物がなく、仕方なくお茶を少しずつ吸いました。

二 国への手紙は二行のみ

昼食後の休み時間に、中村兵長より「初年兵、全員集合。今日は貴様らに国への葉書を出させる。今から一人一枚宛葉書を配るので、受け取れ」と言われて、皆に一枚ずつ配られました。入隊以来二ヶ月が経過したが、まだ一度も便りを書いていかなかったわけです。中村兵長殿はなおも続け、「今から書く文言を言うから、そのとおりに書け。その以外の事は一切書いてはならない。よいな。まず文面だが、一行目は『皆様お変わりありませんか』、二行目は『私も元気でいます』、以上。次に表面には左側に当住所と氏名を次のように書け。『満州第八七二軍事郵便所気付、満州台二二二部隊前田隊』、次に自分の名前だ。宛名はそれぞれ自分の家の住所と名前だ。五分したら集める。書き方、始め」と指示されました。

全員書き終え、葉書を集めた中村兵長殿は、中隊事務室に持つて行かれました。

夕食後、中村兵長殿は再び初年兵全員を集め、次のように言われました。「葉書に二行のみ書かせたのは、防諜上のためである。文章

に訓練がひどいとか、食事が悪いとか、寒さが厳しくなつたとか書くと、それが直ちにスパイに漏れ、敵の作戦に役立つことにもなりかねないからだ。お前らの中に二人だけ指示した二行以外の文章を書いた者が居る。緒方二等兵と佐々木二等兵だ。前に出る」と言った。

佐々木二等兵は入隊時に父親の病気が悪化していたので、心配のあまり指示以外のことを書いたとの事であった。一方、緒方二等兵は入隊当時、残した妻が丁度出産予定の月だったので、産まれていれば男か女か、名前は何と名づけたかを尋ねる文章を追加して書いたとの事でした。が、違反と言え

表

福岡県京都郡橋町行幸在二
便はかき
鈴木美保 称
満州第八七二軍事郵便所
気付満州台二二二部隊
前田隊
鈴木一幹

裏

皆様お変わりありませんか
私も元気でいます。



新京の関東軍司令部



関東軍の特殊演習

違反かな、と思った。二人は中村兵長殿より一発ずつカッパを食らい、「直ちに書き換えろ」と命ぜられ、再提出させられました。軍の規律だけは知らぬが、実に個人の人格を無視した、情け無用の扱いだなと、我ながら情けなく思った。

(一九九六年「ぶどうの木」第二三三号)

(六) 満州関東軍での思い出 IV

一 馬は兵器だ

午後の訓練を終え、馬舎に夕方の水飼飼付に行き、各自の担当馬に水を飲ませ、馬糧を与えて帰る途中、戦友の川上君が困った顔をして、「俺の久緑(ひさみどり)があまり水を飲まなかったが、大丈夫だろうか。(久緑とは馬の名で、初年兵に一人一頭ずつ、訓練のために持ち馬として預けられていた。)しかし、馬糧を与えたら食べていたので、幾分安心したが」と言った。

私は、「おい、川上君。水は何回飲んだのか」と尋ねると、「五、六回しか飲まなかったが」とのことでした。

私は、「それはまずいなあ、それじゃあ飲んでないのと同じだ。それに馬糧を与えては、良くないのではなかったかなあ」と思ったが、



何か気持ちが悪く落ち着かないまま、班に帰着しました。

消灯ラッパで就寝しましたが、川上君も寝返りを打ち、私もなかなか寝付かれずにいましたが、その内に眠りました。

しばらくして不寝番から、隣に寝ている川上君が起こされているのに気づきました。不寝番の話では、馬舎からの連絡で、久緑が疝痛(せんつう)を起こして倒れたので、直ちに馬舎に來いとの伝言であった。やはり胸騒ぎがしていたのが本当になったと思ひ、私も飛び起き、川上君に同行することにしました。

二人は急いで防寒服に着替え、馬舎を目指して急いだ。川上君は、「鈴木君、濟まんなあ」としきりに繰り返し、「なに、戦友だ。お互い様だ。心配するなよ」と慰めながら走った。

夜十時を過ぎて、外は零下十度は下っているだろう。幸い雪は止み、積雪は十センチくらい、暗夜であるが周囲はほの白く、視界はよかつた。兵舎から馬舎まで約五百メートルはあり、道路は凍りついてゴム底の防寒靴でもよく滑り、道路端の外灯を頼りに、足に気を配りながら急いだ。

馬舎に着いて久緑の馬房に行くと、いつもは立っているはずの馬が倒れ、体を横にしているではないか。

数人の馬舎当番古兵殿が久緑の傍に集まって、内一人が藁束綱で腹をさすっているではありませんか。我々二人の到着

を見つけた馬舎週番上等兵殿が、「川上二等兵、貴様は夕方の水飼では、久緑は何回水を飲んだのか」と尋ねました。

川上君は、「はい、五、六階しか飲まなかったと思います」と答えました。週番上等兵殿は、「それでは、この水飼記録簿の久緑の欄には三五回と記録されているのは、嘘の申告をしたのか」と大声で叱り付けました。さらに、「水を飲んだ回数のない馬には、後で再度飲ませ、二十回以上飲むまで馬糧は与えてはならぬことになっている。貴様も習つて知つとるだろうが。嘘の回数を報告するとは何事か。もし疝痛で馬を死なせたらどうする。」「気をつけ!」と号令をかけ、「馬は恐れ多くも、天皇陛下からお預かりしている我が砲兵隊の兵器である。もし死なせたら、貴様は陛下に対しどのようにお詫びするつもりだ。貴様らは一錢五厘の召集令状でいくらでも集められるが、馬はなかなか補充してもらえないのだ」と言いながら、横の柱に立てかけてあつた馬糞すくいのスコップで、川上君の尻を叩きました。川上君は倒れながら真っ青な顔をして「申し訳ありません」と、尻を押さえながら詫びました。

週番上等兵殿は、「貴様を殴つていても、時間がもつたない。古兵に代わつて束綱で馬の腹をこすれ」と命じました。以後、川上君と私が古兵殿に代わつて、交互に腹をこすりま

した。

時々古兵殿が馬の下腹に耳を当てて内臓の動音を聞いていましたが、「まだ音がしとらん。もつと強く、力を入れてこすれ」と命ぜられました。二人は力を入れてこすり、そのため寒いにもかかわらず、体中に汗が流れました。

夜十二時を過ぎた頃、週番上等兵殿が再度来られ、「まだ好転しないか」と尋ねられました。古兵殿が、「はい、懸命にやっておりますが、変わりありません」と報告しました。週番上等兵殿は、「そうか、朝になつてもガスや馬糞が出ない時は、連隊本部の獣医殿に来てもらうしかないが、その前に我々のできる最後の努力をする。お前達は、今から俺のする事をよく見ておけ」と言つて、桶に汲んできた湯に石鹼を溶かし、上着を脱ぎ、右腕を捲り上げ、湯の中につけ、その腕に石鹼を塗りつけ、「皆、後ろ足を押さえとけ」と命じました。古兵殿や私ども二人も、足を懸命に押さえました。週番上等兵殿は、石鹼の付いた手を固く握り、そのまま馬の肛門に差し込みました。そして腹部に溜まつている馬糞を掻き出し始めました。腕が引き出される度に、少量の馬糞らしき物が付着して出てきました。何回か繰り返された後、「おい、川上二等兵、今見た通りにやってみろ」と命じました。川上君は青白く、今にも倒れそうな様子でした。とつさに私は、「はい、鈴木にやらせ

てください」と言つて、上着を脱ぎ、右腕を捲り上げ、習つたとおり腕を湯につけ、石鹼を塗り、馬の肛門に差し入れようとしていましたが、力が足らぬのか、上等兵殿のように上手には行きません。と、横で見えていた週番上等兵殿が、「馬の肛門は時々息をするので、その時に合わせて入れてみる」と言われました。私は言われたとおり、少し間をおいて差し入れてみました。今度はうまく入りました。

生暖かい袋の中に手を入れたようで、時々腕全体を締め付けられるような、時には腕が潰されそうな力が加わることが分かりました。指先で袋の周囲を探り、ちょうど阿寒湖の毬藻のような異物が指に触り、これが馬糞だと思ひました。

これらの異物を集めて握り、一気に引き出しました。確かに馬糞でした。今度は更に奥に入れて再び掻き出そうと、右肩の付け根まで入れました。今度はかなりの馬糞の塊がありました。そして握つては引き出し、外に掻き出し、数回繰り返しました。

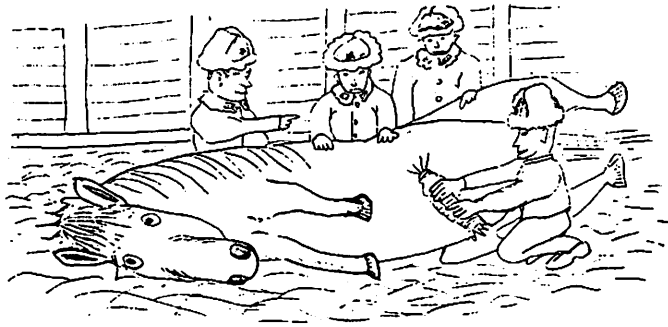
川上君は、古兵殿と一緒に腹を束綱でこすつていました。私はこの時、懸命に祈りました、「天のお父様、どうかこの馬にもう一度元気をお与えください。戦友の川上君にもあなたの恵みをお与えください。主イエス・キリストの御名により御前に捧げます」と、何度も祈りました。

すると、今まで腹をこすっていた川上君が、「今度は川上がやってみます。代わってください」と言つて、私と交代しました。

今度は私が束綱を持って、腹をこすりました。古兵殿達は足を持ち、時々腹に耳を押し当てて、腹の動音を聞いていました。

朝方四時頃、再び川上君を交代し、腕を入れて掻き出す動作をしていた時、突然、ガスと馬糞が一緒になって、私の腕を肛門の外に押し出しました。

さらに、多量の馬糞が噴出しました。そして今まで横になっていた久緑が、急に立ち上がりました。これを見ていた五、六人の古兵殿達が、一斉に集まって万歳を叫びました。週番上等兵殿も駆けつけて来られ、立っている久緑を見るなり、「よかったなあ」を繰り返し、皆一団となって、万歳を叫



びました。皆はよかったなあと肩を抱き合い、馬の顔を撫でました。川上君の目には、喜びと安堵の大きな涙が流れていました。

二 砲手訓練

朝の点呼後、週番士官の大神少尉殿から中隊長殿の命令の伝達があり、今日から各兵科に分かれての訓練が行なわれることになった。第四中隊の初年兵五十名中、砲手班は二十名、担当教官は第四班の班長の佐藤伍長で、補佐教官として二名の下士官(いづれも伍長)が担当することとした。

第四中隊の砲廠に到着すると、砲廠横広場にすでに古兵殿数名が待機しており、建物から砲を引き出す用意をしていた。佐藤班長殿が初年兵の一人に、「おい中野二等兵、お前は娑婆にいた時は、東京相撲の力士であったそうだな。今から古兵に教えてもらつて、一人で砲一門を引き出してみる」と命じました。中野二等兵は一般の兵より背丈も高く、見るからに力士の体型をしていました。一同見守る中を、古兵殿の指示を受けながら、砲の架尾部分を右手肘で持ち、「エイ！」と掛け声をかけて持ち上げました。さらに力強く、後ろ向きのまま、少しずつ広場の方まで引っ張ってきました(砲の重量は約二トン、方針の長さ二、三メートル、口径は七・五センチ

チ、最大射程は約十一キロメートル)。

これを見ていた皆も驚くと同時に、佐藤班長は「見事だ。よくやった。貴様は実戦には、我が砲手班には欠かせない存在だな」と言つて拍手し、皆もいつせいに拍手しました。

あと二門は、一門に十名ずつ分かれ、二人が架尾を持ち上げ、他の八人で車輪や砲身を押し、やっと広場まで運び、ようやく三門は一列に並びました。

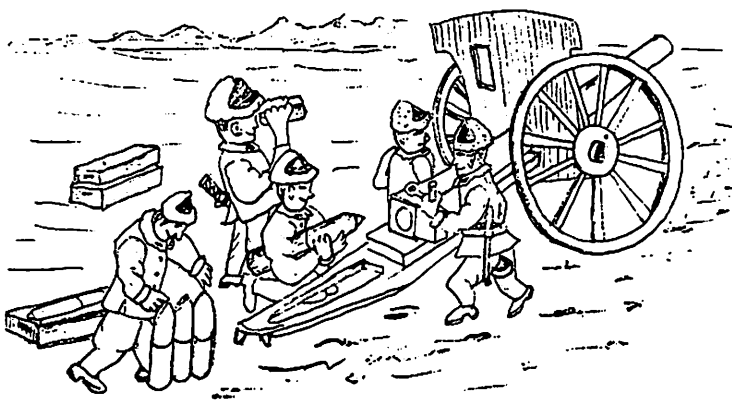
七名二組、六名一組の三組となり、三門の大砲での操作訓練が始まりました。古兵殿達は模擬弾四発の入った箱を、それぞれ一門に一箱ずつ砲の後ろ後方に用意していました。

私は川上君と一緒に、六名の佐藤班長殿の指揮下に割り当てられました。他の下士官二人も、それぞれ七名ずつの指揮を取っていました。佐藤班長殿は六名に対し、それぞれ一番砲手、三番砲手、四番、五番を割り当て、一番砲手には川上君、三番砲手には私が指名されました。一番砲手の任務は、砲の閉鎖器(玉を込める砲口の閉閉をする器)の操作と竜条(引き金)を引くこと。三番砲手は後に位置する四番砲手が用意した弾を貰い、砲に弾を込める操作で、四番以下は後方で弾を用意して三番に渡す役でした。

各砲毎に教官殿が初年兵に操作を教え、いよいよ「打ち方始め！」の号令がかかりました。教官殿達は、標的用の赤白塗り

の鉄のポールを持つて立っています。操作は、まず一番砲手が閉鎖器のハンドルを右手で握り、手前に引くと閉鎖器が開いて砲身が開き、次に三番砲手が四番砲手から渡された弾を受け取り、右手で砲口に押し込む。すると、一番砲手が閉鎖器のハンドルを前方に戻し、閉鎖器が閉まって弾は完全に込もった状態になる。そこで一番砲手は、「よし」と合図する。

次に教官殿の「撃て」の声で、一番砲手は右手で竜条を一気に砲身に沿つて後方に引くと、「カチツ」と撃心を打つ音がする(実弾が入つておれば、発射音となる)。



次に教官殿の「よし」の声で、再び一番砲手が閉鎖器のハンドルを前に引いて砲口を開けると、今度は藁莖が後方に飛び出る仕組みとなっていました。

教官殿の「撃ち方始め。撃て！よし」の号令に従い、訓練が続きました。各自が馴れていないため、操作を誤るたびに、ポールで頭を殴られました。弾の重量は一発約五十キロで、一箱の弾箱に四発入っているので、一箱では六十キロはありました。

三番の私は後にいる四番砲手から左脇で弾を受け取り、右手に持ち替え、砲口に弾を込めるのですが、連続十回もすると腕の力が尽きて、その内とうとう弾を取り落とししました。それを見ていた佐藤班長殿は、「よし、一巡繰上げ、交代せよ」と命ぜられました。私はホッとして、一番の川上君と交代しました。

一番砲手は、操作は他の砲手より手間がかかるようですが、腰掛があり、三番のように力はそれほど要りませんでした。川上君はかなり頭を叩かれた様子で、頭をさすりながら六番に下がって行きました。

午前の訓練を終え、砲廠内に砲を運び込み、帰班のため砲廠前に整列しました。出発に当たり、今回の訓練の結果について次のように言われました。

「今日の砲の操作は初めてであるから仕方ないが、今日のよいうな操作振りでは、実戦には全く役に立たぬ。これから毎日徹底的に訓練を行い、各自何番になっても操作ができるように、また夜間暗闇でも、また目を閉じていても、楽に操作が行なえるようになって欲しい。後数ヵ月後には、初年兵の一期の検閲がある（検閲とは、各隊の初年兵の訓練振りを師団長閣下が直接接見することで、その成長により各隊の優劣が判定されるものとされていた）。それまでに、早く操作が身に着くように」と言われました。

午後の天候は午前中とはうって変わり、激しい北風と共に吹雪となったため、野外での訓練を変更し、砲廠内での訓練となりました。今度は、全員が二番砲手が行う回転盤の操作訓練を受けました。回転盤が五台、一台に四名ずつ配置されました。この機械は二番砲手が操作するもので、砲撃後の着弾の修正、戦車等異動する目標の照準修正をするもので、この操作で目標に弾を正確に当てるためのもので、二番砲手の最も重要な操作の一つのことでした。

各班長と古兵殿の号令で、一度に五名が同時に操作しました。回転盤には小さな目盛りが刻まれていて、横についているハンドルを右手で掴み、右に廻す時は上向きにハンドルを廻せば、それにより目盛りの付いた回転盤が右または左に廻

るようになっていました。

私は四名中三番目でしたので、一番目が操作するのを見ていました。班長殿の号令がかかりました。椅子にかけながら、号令に合わせてハンドルを廻していました。「三つ右、四つ左、六つ右、二つ右、五つ左。よし、今幾つになっているか」と言われました。



五台の回転盤の椅子にかけている兵が、それぞれ答えました、「二です」、「五です」、「三です」、「二です」、「四です」。すると班長殿は、「今の正解は二である。二でなかった三名は後ろに置いてある弾箱を担いで、砲廠をひと回りして来い」と命ぜられました。数字が正確に合う兵は五名中一名か二名で、ほとんどが違いました。砲廠一周で約百五十メートルあり、間違う度に何度も行かねばならず、一箱六十キロはある弾四発入りの弾箱はズシリと肩に食い込み、吹雪の中では目に雪が付着しても、片手を使つて眼をこすることもままならず、担ぐ手も冷え、次第に感覚もなくなり、今にも肩から落としそうでした。

三 風(しらみ)との戦い

初年兵の毎日は、起床から就寝まで自分の時間はほとんどなく、古兵殿の下着や衣類を洗濯しても、自分の衣類までこまめに洗濯する余裕はありませんでした。毎日の訓練で汗や埃、馬糞にまみれ、甚だしく不潔になっていました。

特に寒くなって毛物を着ると風が大発生し、体中が痒くなっていました。最近では特にひどくなって、私達皮膚の弱い者は、全員発疹が出ていました。この虱取りが、初年兵のわずかな休憩時間の日課になっていました。

幸い日曜日は、ほとんどの古兵達は朝食後は外出し、残っているのは初年兵と数人の古兵殿だけでした。

二階の寝台から下の様子を見ていた陣内上等兵殿が、「おい初年兵、お前ら下着を脱いで裏側の縫い目を調べてみる」と言われました。皆が一斉に脱ぎ始めたので、私も早速脱いで裏返し、縫い目を調べました。

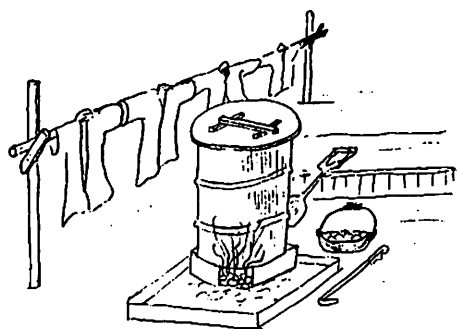
縫い目の間には、白い鳥賊(いか)の形の小さな虱が、ぎつしり並んでいるではありませんか。指の爪で潰すと、パチパチと音を立てて潰れますが、下着の上下は勿論、フンドシまで発生しているので手の 施しようもなく、困っていると、陣内上等兵殿は、「よし仕方がない。皆下着を全部着替える。

着替えが済んだら、脱いだ下着を持って俺について

来い」と言つて、洗面所の一番奥に設置してあるドラム缶を示し、「この中に各自の下着を入れる。今から石川五右衛門の釜茹でや。今から二時間煮沸させ、その後引き上げて洗濯しろ」と言つて、ドラム缶が置かれた焚口に石炭を入れ、点火させました。しばらくするとドラム缶はグツグツと煮え立ちました。二時間位して引き上げ、早速広げて点検してみると、縫い目に並んでいた虱が茶色になって、見事に全滅していました。今思つても、ゾツとするほどでした。

初年兵は日曜日でも外出許可は出ませんので、この虱掃討作戦は、毎日曜日の日課となりました。

(一九九七年「ぶどうの木」第二四号)



(七) 満州関東軍での思い出V

一 食事当番

夜の点呼時、中村兵長殿より、「明朝から一週間、川上二等兵と鈴木二等兵は食事当番をせよ。分かったか」と命ぜられました。

食事当番の任務は一日中班内に勤務し、馬舎にも、訓練にも行かず、班内及び廊下に清掃、ペチカの灰捨てと燃やしつけ、食事の運搬、配膳及び後片付け、食器の洗浄、食缶返納等の仕事がありました。

各班から二名ずつの食事当番兵八名は、舎内週番上等兵殿(中隊内の各班の交代制で、上等兵一名が一週間勤務する)の指揮に従いました。一行は第一班から出ていた中谷舎内週番上等兵殿の引率で、各班二名中一名が樞丸太の天秤棒を持ち、連隊本部横に併設されている炊事場に連れられ、炊事場から食缶(アルミ製の蓋付き大型バケツ)十六本を受領し、一個班二名で、四本の食缶を樞棒で担いで運びました。雪道を兵舎までの約五百メートルを運ばねばなりませんでした。積雪が凍りつき、滑りやすい道を食缶を担いでフラフラして歩く姿は、異様に思えました。担ぐ前に、皆がジャンケンを始めま

した。なぜだろうと思っていると、勝った方が後を担ぐことごとでした。

私は川上君とジャンケンをして負けたので、前を担ぐことになりました。担いで歩き出すと、中身の入った食缶の重さが右肩に食い込み、引つ張るように歩かねばならず、フラフラと真つ直ぐに進めず、これは確かに前担ぎより後担ぎの方が幾分楽かなと思えました。

一行は、一列になつて
週番上等兵殿の引率で歩
きました。約二百メート
ルくらい進み、道路の四
つ角の近くに差し掛かり
ました。その時、前方か
ら他の中隊の週番仕官殿
(少尉)がこちらに向つて
来られるのに出会いまし
た。一行の先頭において引
率の中谷週番上等兵が、
直ちに号令をかけました。

「歩調を取れ」「頭右」と言つて

歩きながら挙手の敬礼をし、我々初年兵は食缶を担ぎながら、



顔だけを週番下士官殿に向けました。週番下士官殿も我々に
対し、挙手で答礼されました。中谷上等兵殿の「なおいれの号
令を聞き、通り過ぎようとした時、「おい、止まれ」と、週番
下士官殿が我々一行に停止を命じました。一同は食缶を担い
だまま停止しました。すると週番下士官殿は、最後尾で食缶
を担いでいた第一班の後担ぎの当番兵に、「貴様の口から、何
かぶら下がっているぞ」と注意されました。先頭で引率してい
た中谷上等兵殿が急ぎ足で戻つてきて、「申し訳ありません。
以後、嚴重に注意します」と答えると、「貴様からよく注意し
とけ」と言つて、足早に立ち去りました。

中谷週番上等兵殿は、「貴様は運搬中に食缶から盗み食いす
るとは何事か」と怒鳴りつけ、同時に平手打ちが頬に飛びまし
た。その瞬間に担いでいた棒が肩からはずれ、食缶四本とも
雪の中に転がりました。四本の食缶中、飯の入った食缶二本
と副食の一本は蓋が外れずに、中身もこぼれなかつたのです
が、味噌汁の一缶だけは全部こぼれてしまいました。一同ど
うなることかと、心配しながら帰隊しました。

中谷上等兵殿は各班に分配の時、第一班の汁を他の三ヶ班
の汁から問引いて補充をし、無事に分配を終えました。一時
はどうなることかと思つていましたが、やっとホツとして、
川上君とわが班に持ち帰りました。

彼が食べていたのは、副食の玉ねぎの掻揚げでした。また担ぐ前にジャンケンしたことも、なるほどなあと分かる氣もしました。

夕食も終わり、食器の洗浄をしていると、中谷週番上等兵殿の声がして、「食缶返納、食事当番集合」とのこと。食缶の洗浄もあわただしく済ませ、川上君と四本の空食缶を持って中隊前に集合しました。

日はとつぷり暮れて、外灯を頼りに歩きました。雪は小降りでしたが、防寒帽の垂れを下げていますので、それほど寒くは感じませんでした。やっと炊事場に到着し、返納口に食缶を返納しようとした時、窓の中から炊事係の上等兵殿が、「食缶の蓋を外した中を見せろ。合格した分は引き取るが、不合格の分は洗い直せ」と言われました。

川上君と私は四本の食缶の蓋を取って見せましたが、四本中飯を入れていた一本のみが不合格で、飯粒の固まりが付着していました。

これを見た炊事係上等兵殿は、「お前ら二人、この返納口に食缶の代わりに頭を出せ」と、窓の中から言われました。二人は致し方なく、恐る恐る頭を前に突き出しました。すると、まだ飯の付着している大型のシャモジで、防寒帽の上から殴りつけられました。「申し訳ありません。すぐ洗い直します」

と言って、建物横の流し場に行きました。

そこにはすでに不合格となった他の中隊の食事当番がいて、ごった返し、一本の水道蛇口に何人も兵が集まり、到底すぐには洗えそうもない状態でした。

しかも冷水では固まりついている飯粒は、なかなか取れませんでした。その時横で、「兵隊さん、一円で

食缶洗ってあげるよ」と言って、沸きたての湯の入った大薬缶を持った苦力(クーリー)。満州人の労務者が私の腕を引っ張って言いました。私は川上君と顔を見合わせ、ポケットから一円を出して与え、洗浄を頼みました。

彼は一円を受け取ると「謝々(セイセイ)」と言って、ポケットからタワシを取り出し、薬缶の熱湯を食缶に入れ、すぐに洗浄しました。熱湯で洗ったので、すぐにきれいになり、誰よりも早く返納することができました。内地から入隊の時に



持参した金は五円でしたので、後四回頼めば無一文になるわけです。一同集合整列し、帰隊の途中、外灯の下を通過する時、川上君の頭を見ると、防寒帽のてっぺんにご飯粒が真っ白に付着しており、自分の付いているのも忘れて一人苦笑しました。

その後も、食缶返納のたびに何人かが不合格となり、その都度、満人苦力に一円を払って、洗ってもらっていたようです。古兵殿の話では、「あの苦力等は、炊事場のボイラー用の石炭運びや雑役のために炊事係が雇っている人夫で、給料が安いので、炊事係の連中が彼らにアルバイトをさせてやろうとの配慮から、食缶返納時の検査を厳しくし、彼らの臨時収入に協力しているのだ」とのことでした。

二 怒鳴ったら相手は兵長殿

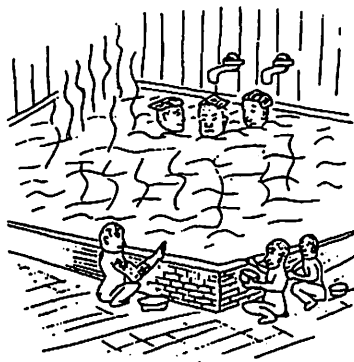
風呂にはなかなか入れなかったが、今日の午後の訓練が早く終わったこともあって、久しぶりに風呂に行くことになった。炊事当番兵を残し、初年兵全員、中村兵長殿の引率で中隊前から二列縦隊に並んで歩きました。手にはそれぞれタオル一本持っているだけで、石鹸、カミソリは持参しませんでした。それは身体から油気を除くと凍傷にかかりやすく、髭も剃らぬがよいとのこと、ただ湯につかることを目的とし

ていました。

途中で他中隊の上等兵や一等兵とすれ違っても、中村兵長殿の引率のため、相手の方が先にこちらに敬礼して通り過ぎるため、小気味よく風呂場に到着しました。

脱衣場には左右の壁側に仕切り棚が付いていたが、先客のためほぼ一杯になっていたため、脱衣籠を使うことにした。下着は着替えてきたので、他の兵に見られても心配はなかった。

浴室に入ると、皆裸であるので階級が分からず、相手が古兵でも敬礼する心配もなく、一同は桶を持って浴槽に近づいて湯を汲み、身体にかけたが、少し熱いなと思いましたが、浴槽の奥には五、六人の古兵が頭にタオルを乗せ、



静かに浸かってこちらを見えていました。我々の中に入ろうとしましたが、熱いので入れないでいると、とび職だったという威勢のよい緒方君が、浴槽の奥で浸かっている古兵殿に向って、「おい、湯が熱くては入れん。貴様の横にある蛇口を開

けて水を出してくれ」と言いました。しかし古兵殿はじっとして動こうとはしなかったので、今度は「うめろと言うとろうが、聞こえんのか」と怒鳴りました。すると、古兵殿は渋々蛇口をひねり、水を出しました。

しばらくして、皆はやつと浴槽に入りました。私はしばらく湯に浸かった後、浴槽から上がり、掛かり湯の方に行き、椅子に腰掛け、蛇口から掛かり湯を出そうと前のカランを廻した時、いきなり上部についていたシャワー口から冷水が飛び出し、私の頭や肩に掛かり、一瞬冷たさに「ヒャー」と声を出しました。その時、ちょうど後ろを上がり口に向つて通つていた古兵殿の上半身にも掛かつてしまいました。しまったと思ひ、カランを元に戻し後ろを振り向くと、何と浴槽の中で渋々うめ水を出した古兵殿が、私をにらみつけているではありませんか。私は「どうもすみません」と言つて頭を下げました。「馬鹿やろう。気をつけい」と言つて上がつて行きました。私も拭き終わり、緒方君らと脱衣場に上がり、衣服を着ようとしてひよいと横を見ると、さっきの古兵殿が上着を着るところでした。そしてその時、襟章を見て驚きました。その古兵殿の襟章は、何と兵長でした。これはしまったと思ひ、急いで私の横にいる緒方君の腕を引つ張つて浴槽に引き返しました。緒方君にも引つ張つた理由を説明し、しばらく掛か

り湯の腰掛に腰掛け、しばらくして戸口から脱衣場を覗くと、もう兵長殿の姿は見えなかつたので、やつとの思いで再び脱衣場に戻りました。

初年兵一同は外に出て整列し、帰路につき

ました。身体は温まつてはいましたが、外の冷気は肌を刺すようで、防寒帽の垂れを下げてはいるが、出ている鼻頭が痛く、吐く息は白く霧状になり、髭が白く霜が付いているようでした。

タオルをぶら下げて歩いていましたが、その内に棒でも下げていのように、硬く真つ直ぐになっていました。皆は鉄砲でも担ぐように、上に向けて肩に担いで歩きました。

三 一 銭呼集

私の所属する内務班の第四班は、第四中隊の建物の一室にあつて、その先が一段下がった下屋続きの別棟で、洗面所と便所、洗濯場、物干場等になっていました。そのため、他



の班の者が洗面所や便所に行く時は、必ず当班の前の廊下を通らねばならず、廊下と班室は扉や壁などの区切りがないので、班内から廊下が丸見えで、便所等への通行には、必ず挨拶をして通っていました。

従って第一班の初年兵は大変で、第二班、第三班、第四班と三ヶ所で挨拶をしなければならなかったわけです。例えば、「第一班の田中二等兵は、廁へ行くため通らせて頂きます」と言うと、班内から古兵が「よし」と声がかかって通っていました。中には「声が小さい。よく聞こえん。もう一度言うてみよ」などと、やり直しを求められることもしばしばありました。

また我々初年兵が便所などに行く時は、出口の所で班内に向って「鈴木二等兵は、廁へ行つてきます」と言うと同時に、室内に向って一礼して行っていました。また帰った時も同様に、「鈴木二等兵、廁から帰つてきました」と言つて、一礼して入っていました。

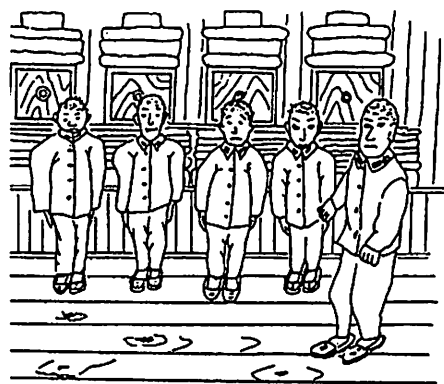
昨日から当第四中隊の予備室が急に騒々しくなったようでした。朝の点呼後の班長殿の説明では、「昨日の午後、内地から当連隊に甲種幹部候補生一行が、一ヶ月の予定で現地教育実習のために着任し、当中隊にも十名の候補生が配属されたので知らせておく」とのことでした。

そう言えば、今朝洗面所で見かけた数人の伍長殿は、服装

も新しく、襟に座金の星が付いていたのを思い出しましたが、その方々の事だったのかと思いました。

いつもの通り馬舎での水飼飼付、馬糞捨てなどの作業を終えて帰隊し、営内靴から上靴（手縫いの皮のスリッパ）に履き替えている時、緒方君が「しまった、俺の上靴がない。困った」と言いながら、靴下のまま内務班に帰ってきました。この様子を見ていた陣内上等兵殿が、「お前がボヤボヤしとるけん、ギョ（盗まれること）されたとやろう。困ったなあ」と言っていたが、「よし心配するな。俺が員数をつけてやるからなあ」と言つて、二階から自分の上靴を緒方君に投げ渡しました。緒方二等兵は、「有難うございます」と言つて、陣内と名前の入った上靴を履きました。

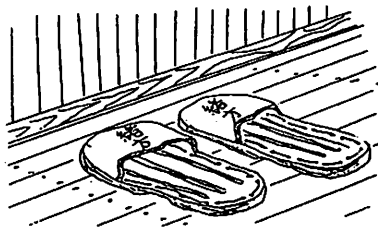
夕食後、陣内上等兵殿が「緒方、これを履け」と言つて、まだ新しい新品同様の上靴一足を緒方君に渡し、貸していた分と交換しました。そして、



「墨で早く貴様の名前を書いておけよ」と言って、二階に上がって行きました。

それから二日後の夕食後、中隊内に一銭呼集が掛かりました。第一班の方から「一銭呼集」との大声がし、二班、三班、四班へと連鎖的に伝わり、伝達されました。

一銭呼集とは、中隊内で所持品を紛失したり、また盗難等が発生した時に、中隊長の命令により中隊全員を各班ごとに集め、被害者は各班を回って調べることになっているものでした。第四班も一銭呼集の命により、佐藤班長殿が部屋の一番奥の窓側に位置し、全員が向かい合って寝台前に整列し、被害者が来るのを待っていました。その時、中隊付の山崎曹長殿が来られ、「今度の調査品は上靴であるので、各自自分の上靴を履いて待つように」と告げて行かれたので、私はとつさに緒方君の上靴を見ました。驚いたことに、彼がさつきまで履いていた新品の緒方と名前の



書いてあった上靴が、いつの間にか再び陣内上等兵の上靴に代わっていました。そして陣内上等兵の姿が、班内のどこにも見当たりませんでした。

どうしたことだろうかと考える間もなく、廊下の方から眼鏡をかけた甲種幹部候補生の伍長殿が入ってきました。そして、そのまま端の方から皆の足許を見て回り、自分の上靴がなかったのを確認すると、そのまま班内から出て行こうとした時でした。奥に立って一部始終の様子を見ていた佐藤班長殿が突然、「おい候補生、チョット待て。こつちに来い」と呼び止めました。候補生殿は振り返り、そして恐る恐る佐藤班長殿の近くまで進み寄りました。班長殿は次の通り注意しました、「貴様は他人の部屋に入る時、何の挨拶もなく、また退室の時も何の挨拶をしなかった。気を付け！畏れ多くも陛下より軍人に賜った軍人勅諭に、一つ軍人は礼儀を正しくすべしとあるのを知らんのか。知らぬとは言わせんぞ。貴様は甲幹で、将来兵の指導に当たる将校になる身ではないか。軍人の基本の一つである礼儀についてよく反省せい」と言うと同時に、平手打ちを数発与えました。「我々は貴様のために大事な時間をつぶし、甚だ迷惑しとるのだ、分かるか」「よし行け」と言いました。

候補生殿は、「申し訳ありません。自分が悪くありました」

と一礼して、そそくさと帰って行きました。

我々初年兵は一瞬の出来事を目の当たりにして、同じ伍長でも我が班長殿の実力の程に、つくづく感心させられました。

消灯ランプがなる頃(午後九時頃)、陣内上等兵殿が奉公袋を持って帰ってきました。「古兵殿は、一銭呼集時には何処に行かれていたのでありますか」と川上君が尋ねると、「俺か、俺はなあ、馬舎に行つとつたよ」、「俺の馬の後ろ右足の馬蹄が浮いていたので、蹄鉄工具兵に頼んで、修繕してもらつとつたよ」とのことでした。後での緒方君の話では、一銭呼集が掛かった時、二階から陣内上等兵殿が降りてきて、「お前の上靴をもう一度おれの上靴と交換しておけ」と言つて、緒方君の新品の上靴を奉公袋に入れて、どこかへ持つて出て行かれたとのことでした。

四 演芸会出演

初年兵は毎日の激しい訓練で、身も心も疲れていました。

夕食後の班長殿のお話では、「来る土曜日、午後一時から恒例の中隊内、各班対抗による演芸会があることになった。当班の出演希望者は手を上げる。誰かいないか」と言われました。誰も挙手する者がいなかったところ、佐藤班長殿は「石橋上等兵」。「はい」。「お前は例の歌でもやらんか。前は三番じ

やったが、あれから大分上達しとるじゃろう」と言われました。他の古兵達も「そうや、石橋上等兵、出たらどうや」と勧め、結局出演することを承諾しました。次に、これも古兵隊に勧められ、野口一等兵殿が舞踊することに決まりました。それで二人が決まり、今度は中村兵長殿が「おい初年兵、誰か出る者はおらんか。十二名もおるのだから、一人くらいは何かやらんか」と言われました。この時私は、今度は演芸会に出演すれば、中隊中に顔を覚えてもらえるよいチャンスかもしれないと思いました。

私は思い切つて、ひよいと手を上げました。これを見た中村兵長殿は、「おお鈴木二等兵か。貴様は何をやるか。歌か」と尋ねられましたので、私は「いや、歌ではありません。落語をやりたいと思います」と答えました。すると佐藤班長殿は、「おお落語か、それは面白い。今まで中隊の演芸会に落語をした者は誰もおらんやつた。これで三名になった。しかも歌と踊りに落語か、よし決まった」と大はしゃぎでした。

そして「よし、三名は後で俺の部屋に来て、それぞれやつて見せる。中村兵長、ご苦労やが、世話役をやってくれ」と言つて退席されました。班内が急に活気付き、賑やかにになりました。川上君や初年兵達が、「早く見たいなあ。鈴木君はそんな芸があつたのか。驚いたなあ」と話していました。

しばらくして、三名は中村兵長殿に伴われて班長室に行きました。石橋上等兵殿の歌はセリフ入りの「臉の母」で、野口一等兵の踊りは「旅笠道中」で、歌は石橋上等兵殿が唄われるとのことでした。鳴り物なし、伴奏もなしで、二人ともなかなか手馴れて上手でした。私の番になり、中学時代にクラス代表で学芸会に出演した時の落語「ガマの油売り」を思い出しつつ、始めました。

班長殿を始め在室の古兵殿達が、腹を抱えて笑っているのが良く分かりました。佐藤班長殿が、「なかなか三人ともよくできた。面白いやないか。よし、これならうちの班は、今度は優勝間違いなしや」と言ってお満悦でした。そして「ガマの油の落語は羽織に袴が似合うと思うので、中村兵長、ご苦労やが、金曜日までに東寧の町に行った時に、借りて来てやれ」と命じました。

そうして、いよいよ土曜日が来しました。朝の点呼後、佐藤班長より、「今日の演芸会は午後一時から行なわれるので、出演の三名は午前中の訓練には出なくてよいから、午前中、三人で十分に練習しとけ」とのこと、石橋上等兵以下三名は中村兵長殿に従って班長室に行き、練習をすることになりました。私は中村兵長殿が東寧の町より調達してきた着物を着用し、刀は班長殿が大神少尉殿から借りた日本刀を使わせてい

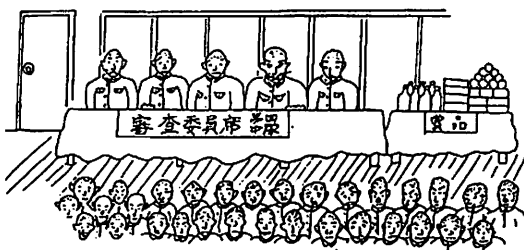
ただくことになりました。

会場は中隊事務所の大広間で、にわか造りの舞台が設けられ、引き幕は窓用のカーテンが張ってありました。今朝から各班の大功経験の兵が四名、使役に出て用意したとのことでした。

野口一等兵は何処で用意したのか、三度笠に黒のマント、しかも脚絆にわらじまで用意し、刀は石井見習士官殿から借用したとのことでした。

会場にはすでに班ごとに兵達が舞台前に座り、賑やかな話し声がしていました。舞台正面には審査員席が設けられ、審査員には前田中隊長殿、大神少尉殿、宮崎少尉殿、石井見習士官殿、山崎曹長殿の五名がなっておられました。

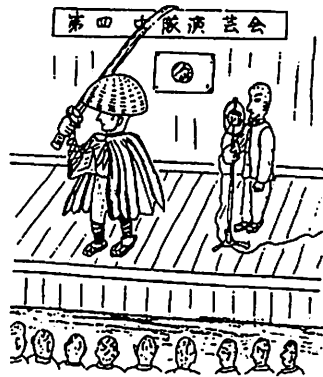
出演者は各班から三、四名で、全員で十五名、ほとんどが歌を唄いましたが、歌以外では私の落語と野口



一等兵殿の舞踊と、二班の一人で手品をやる人の三名でした。プログラムに従って開演されました。審査員席の横の机の上に入賞者への賞品や参加賞が置かれ、いやが上にも会場を盛り上げました。出演者には洩れなく商品が与えられるとのことでした。一番は他班の歌から始まり、石橋上等兵殿の順番は割りに早い方で、唄い終わってから四班を中心に、かなりの拍手がありました。

中頃、野口一等兵殿の踊りが始まりました。

勿論、石橋上等兵殿の唄う「旅笠道中」の歌声に乗って、マントを肩に掛け、三度笠を被り、刀を差し、脚絆にわらじを履いた姿が舞台に現れると、会場の兵達



から拍手と「待ってました」と言う掛け声が掛かり、何度もヤンヤの拍手が沸き起こり、終わってもアンコールの音が続き、これは入賞間違いなしだなどと思えました。私の番は、終わってから三番目でした。

舞台の中央に机が置かれ、その上に半紙と刀と私の所持品

の薬のメンソレータムの缶一個が置かれていました。

幕が開けられ、拍手の中、一礼の後、早速始めました。

和服の袂から紐を取り出し、襷(たすき)をしながら「さあさあ、お立会い。御用とお急ぎでない方は傍によつて、とくにご覧じろ。ここに取り出しましたる缶入りのこの薬は、軍中膏はガマの油、そこいらにも、ここいらにもあるという薬とは、いささかその効用は違います。さてお立会い、このガマの生息する所は、ここより遙か北の国、手前が生まれ故郷は丹波の国は大江山の麓に生息しております。さあお立会い、このガマを四六のガマと言います。何で四六のガマと言うかと申しますと、前足の指が四本、後ろ足の指が六本あるから、四六のガマと言う」と言いながら気分も落ち着いてきたので、辺りを眺めると、会場を埋めた約二百人の兵達は皆、固唾を呑んでじつと話に聞き入っていた。

審査員席では中隊長殿が笑顔で、しきりに右手で口髭を触っておられ、その隣の宮崎、大神両少尉殿もビツクリしたような顔で、聞き入っておられる様子でした。

私はさらに話を進めました。「この四六のガマを捕らえ、四角四面の鏡の箱に追い込みますと、鏡に映りし己が醜い姿を見て、タラーリ、タラーリと油汗を金網越しに、下の器に受け取り、その油を柳の小枝で三七二一日トローリ、トロー

りと煮詰めて作り直したのが、このガマの油。この葉の効能を申し上げますと、火傷、切り傷、赤切れ、しもやけ……(以下省略)と言つて終わりました。その間、約十分だったと思ひました。

会場の兵達や審査員達、皆割れんばかりの拍手が続き、笑い声の中で、私の番は無事終わりました。舞台の袖のほうで、心配そうに見守っていた中村兵長殿が、私の手を握り、背中を叩いて、「よくできたぞ。よかつたなあ」と涙を出さんばかりの喜びようで、迎えてくれました。

全プログラムが終わり、閉会式と審査の発表があり、審査員の山崎曹長殿より発表されました。

「二等、落語の『ガマの油売り』、第四班鈴木二等兵」とのこと、思いもよらず驚きました。「二等、踊り『旅笠道中』、第四班野口一等兵及び石橋上等兵」となり、「従つて、本日の優勝は第四班である」と発表されました。

中隊長より賞品の授与があり、私には煙草(満州の極光という煙草)二十本入り五十箱、二等の兩人には羊羹二十本が、優勝の第四班には清酒(月桂冠)五本が代表の佐藤班長殿に与えられました。

そして前田中隊長殿は全員に対し、「本日の演芸会は、前回よりさらに新しい芸や一段と磨きの掛かった歌や踊りなど、

大変楽しいひと時を諸君と過ごすことができた。これを機に、さらに明日から新しい気持で軍務に精励して欲しい」と挨拶し、閉会解散となりました。

帰班後、第四班では夕食後、消灯まで優勝祝賀会が開かれ、食卓の中央に私と石橋上等兵殿、野口一等兵殿の三人が座り、周囲に全員が座つて、夜遅くまで賑わいました。私はこの時期まで煙草を吸っていなかったため、中村兵長殿より班内全員に一人一個宛て配っていただきました。

それ以降、中隊内では私を知らぬ者はいなくなり、他の班の古兵殿や下士官殿からも声を掛けられ、「もう一度聞きたいよ」と言われるなど、皆笑顔で話しかけてくれるようになり、また日曜日外出した時に買ってきたからと言つて、ロシヤ飴や饅頭を貰うなど、その反響は我ながら驚くばかりでした。

(一九九八年「ぶどうの木」第二五号)

(八) 満州関東軍での思い出VI

一 極光(オーロラ)の祈り

各衛門の衛兵勤務は、各中隊の一週間交代で行われていました。今日から当中隊に衛兵勤務が回ってきたので、今朝からの勤務を命ぜられました。

衛兵司令には、中隊付の通信担当下士官高良伍長殿が任命され、その指揮下に、他班から上等兵一名、一等兵一名、当班から私と野中二等兵がそれぞれ命ぜられました。

佐藤班長殿より我々二名に対して諸注意があり、「特に夜間の立哨中に不審な、怪しい人影を発見した場合、三度誰何(スイカ)するまでは、絶対に銃を撃ってはならない」などの詳細な説明を受けました。野中君と私の二人は防寒服に身を固め、帯剣を着用し、班内に備えてある九九式小銃(小型で眼鏡



が付いた、当時では最新式銃)を持ち、中隊玄関前に整列しました。週番士官の石井見習士官殿より諸注意を受けた後、全員に小銃用の実弾一人五発ずつが渡され、一行六名は高良伍長殿の引率で出発しました。実弾を持ち、いよいよ任務の重さを感じながら、二列縦隊で進みました。

北門衛兵所に到着、前任の衛兵司令から後任の高良伍長殿に引継ぎが行なわれ、いよいよ衛兵勤務が始まりました。

日中は一人二時間の立哨でしたが、夕方六時頃の日暮れから翌朝七時頃までは気温が下がるので、一人一時間ごとの交代勤務で、夜間の気温がマイナス十度から二十度くらいまで下がり、風がある時は、風速一メートルにつきマイナス一度が加算されることとなります。従って、マイナス二十度以下になると、三十分での交代となっていました。

北門は通称馬糞街道の出入口に当たる門で、北風が真正面に当たり、寒さが厳しい上に、馬糞の臭いで体全体が馬糞臭くなるようでした。降雪時は雪に覆われるので、臭いは減少するが、今日は珍しく昨夜から晴天だったため、早朝から川土手に新しい馬糞が捨てられて、かなり臭っていました。

私の勤務は午前十時から二時間で、弾の入った小銃を持って立哨しました。日中と言いなながら外気は零下十度と冷え込み、防寒頭巾を被り、その上に防寒帽を被り、防寒手袋の上

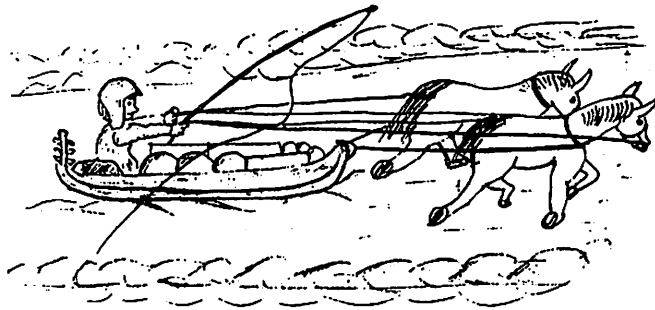
からさらに防寒大手袋をはめていました。しかし防寒靴の下から寒さが足に伝わり、冷たさを通り越して、少々痛さを感じていました。

門の外の川土手上の道路は、満州人(中国人)の荷ソリが時々「シャン、シャン」と鈴を鳴らしながら通り過ぎて行きます。その荷ソリはチャン馬(中国産の少し小さい馬)二頭仕立てで、

「イヨ、イヨ」との掛け声と共に、ピシツと鞭の音がしていました。内地では馬や牛を使う場合の掛け声は、「セイ、セイ」又は「ドウ、ドウ」と聞いていましたが、ここ満州では「イヨ、イヨ」と聞き、国が違えば掛け声まで違うのかと不思議に思

い、異国に来たなどの実感を、しみじみ肌に感じました。

右からソリが来たかと思うと、今後は左からもシャンシャ



ン鳴らして眼の前を滑って行きました。その時ふと、東海林太郎氏が唄っていた「国境の町」を思い出し、静かに口ずさみました。「ソリの鈴さえ寂しく響く、雪の眩野よ、町の灯よ、一つ山越しや他国の星が、凍りつくよな国境」と。

食事は三度とも中隊の食事当番が飯盒に入れて運んでくれました。夕食を終えた七時頃、突然、中隊から布施伍長殿以下十名の古兵達が慰問に来たと言って、焼き芋の差し入れがあり、衛兵所内は急に賑やかになりました。私は、衛兵の増員でもないのに、それぞれ小銃を持参し、何事かなと思っていると、今夜九時になったら、ソ連軍陣地近くに偵察に行くとのことでした。丁度私が夜九時から立哨することになっていました。やがて九時となり、交代立哨して間もなく、ペチカに当たっていた古兵十名は、布施伍長殿の引率で手に銃を持ち、「行ってくるぞ」と言って、北門の外に出て行きました。眼前の大鳥蛇江(黒竜江の支流)は現在凍結しているので、徒歩で渡れるとのことでした。川の中央が国境線で、これを越えると越境した事になるわけです。

今夜は真つ暗闇で、一行の姿はすぐに闇の中に見えなくなりました。

昼間と違って前の道路の通行は全くなく、物音一つしない静けさでした。小半時経ったと思った時、ソ連軍陣地の方か

ら川面に向つて、突然、ダダダダッ、パンパンと機銃と小銃の発射音がしました。私は驚くと同時に、着剣した小銃の安全装置を外し、小脇に構え、下腹にグツと力を入れましたが、恐れに寒さも加わり、身体全体に身震いが走りました。

衛兵所内で仮眠している

兵も、飛び出て集まつてきました。また発光と同時に、ダダダダッと連続的に機銃の音がして、同時にパンパン、シユルシユルと異様な音がして、その直後に上空に照明弾が打ち上げられ、川の中央部が真昼のように明るく照らし出されました。

一時はどうなることかと思ひ、一同が銃を構えているうちに照明弾の光も消え、前の暗闇に戻りました。

すると、その暗闇の中から兵隊の一団が走り出てきました。皆「ハア、ハア」と息を切らせて帰ってきました。布施伍長殿の話では、一列になつて川を渡り終えて、ソ連軍陣地に近づいた時、ソ連軍の動向に見つかり、慌てて戻つたとのこと、今は川が凍結しているので、日本軍もソ連軍もお互いに夜間



国境線まで行つて、相手側の様子の探り合いをするとのことでした。しばらくして、衛兵所のペチカに当たつた後、布施伍長殿一行十名は、中隊に帰つて行きました。

私は古兵殿と交代し、仮眠しました。夜十二時再び立硝となり、銃を着剣し、門に立ちました。外気温度は零下二十度を超えているようで、足の指、銃を持つ手、耳、鼻等に痛みが走り、瞬きの時には臉が上下くっつくようでした。物音一つなく、また風もなく、真つ暗闇で、何となく不気味で、三十分交代ですが、その三十分が長すぎる感じでした。

そう思っていると、北のソ連領の上空が少し明るくなり、サーチライトの光のような筋が頭の上空まで延び、その内、青白い影絵のような模様となり、さらにその光の北の方から今度はピンク色の光が、これも影絵のように青白い光と重なつて、五色の走馬灯のように輝いていました。

立硝の私は、しばらく見とれていましたが、我に返り、急ぎ衛兵所内に戻つて仮眠中の衛兵司令の高良伍長殿に、その旨を告げました。高良伍長殿も他の兵達も皆起きてきました。空を見上げた高良伍長殿は、「おい鈴木二等兵、お前は実に幸せな奴だなあ。これはな、極光と言つて、オーロラのことや。今まで話に聞いていたが、俺も入隊五年になるが、見るのは初めてや。皆歩哨に立つても、なかなか見れんと言つていた。

しかも、この極光を一番先に見た者は、必ず運が開けると聞いていた。それで、貴様は本当に幸せな奴やなあ」と言われました。居合わせた者も皆、初めて見たとのことでした。



私は改めて、天地を創造し支配されて、全てを掌握される神の御業の偉大さを、身をもって感じるとともに、私を今まで守り導いてくださったことを感謝し、今後も私を導きお守りくださるように、何度もお祈りし、感謝しました。

二 おれの命を聞け

内務班での昼食時、佐藤班長殿より「鈴木二等兵は食事が終

わり次第、中隊事務室の山崎曹長殿の所に行くように。午後の訓練は、用件が終わり次第に参加すればよい」とのことでしたので、昼食後、事務室に山崎曹長殿を尋ねました。

山崎曹長殿は「昨日、連隊本部事務室で村上大隊長から、明日来る時に鈴木二等兵を連れてくるようにと、依頼された。今から本部事務室に行くので、同行せい。よいな」と言って、公用腕章を渡されました。「何事ですか」と尋ねました。「俺は分からん。とにかく行こう」と言って出かけました。

連隊本部の正面玄関を入ると、右側が事務室と会議室、廊下を挟んで前が連隊指揮班室となっており、また玄関の左側が各大隊長の部屋が四室、応接室があり、その前の廊下を挟んで連隊長室、会議室、将校室等があり、私の所属する第二大隊長室は玄関から廊下を左折して三番目にありました。

山崎曹長殿はドアをノックして、「第四中隊山崎曹長、鈴木二等兵を連れて参りました」と挨拶しました。すると、中から「ああ、苦勞、中に入りなさい」と、大隊長の声がありました。私は山崎曹長殿の後に従って中に入り、「鈴木二等兵、参りました」と挨拶しました。山崎曹長殿は、「事務室に用事がありますので行っております。何か御用があればお呼びください」と言って、退出されました。

大隊長殿は私を机の前の椅子に掛けさせ、「楽にしなさい」

と言われました。机の上には何冊かの書類が積まれ、一部は開かれていました。「君は行橋町出身で、豊津中学だな。俺は隣の抜郷村だ。俺も豊津中学で、君より四年上だ」。「はい、そうでありますか」と答えました。そして何事だろうかと今まで心配していた不安が、幾分消えて行きました。そして急に懐かしく、また何という奇遇な巡り合わせだろうかと思ひました。私は中学の頃、行橋町行事にある八幡神社の境内で、いつも一緒にバレーボールやキャッチボールなどをして遊んでいた子供達の中から四年上の先輩を思い出し、その名前を言ってみました。まず行事本町にいた田原医院の息子で田原康志、東町の白川宏、同じ本町の細野修氏の名前を言ってみました。すると大隊長は、「細野君は一組で、彼は明専(現九州工大)に行ったな。他の白川と田原とは同じ四組で、皆よくできる連中だったな。田原は鹿児島島の七高に行き、白川は熊本の高五やった。お前は皆と友達やったのか」と言われました。私は「はい、三人にはよく可愛がってもらいました」。「三人はその後どうしているのか」。「はい、細野さんは明専卒業後、現役で兵隊に行かれ、田原さんは阪大医学部に行かれ、白川さんは京都大学に行かれています」と答えました。いろいろ話を交わしていると、当番兵がお茶を持って来られました。「お茶を飲みなさい」と言われ、本論に話を進められました。

大隊長殿は書類を手にし、「これは君の書類だが、君は幹部候補生の試験を辞退するとなっているが、本当にそれで良いのかね。辞退する理由は何かね。どういう訳なのか話してみなさい」と言われました。

私は佐藤班長に説明したとおり、「中学時代に教練の教官だった権藤少佐に勧められ、陸士を受験しましたが、視力不足で不合格となり、それ以来、私は軍人には不適格だと思ひ、今回の受験も辞退しました」と説明しました。大隊長は「ああそうか。良く分かった。実は俺も権藤少佐の勧めで陸士を受け、卒業後、久留米の野砲隊に配属され、二年前当連隊に転属となった。君はすでに現役で入隊し、立派に軍人になっている。それなら幹候の試験を受けて合格することだ。この書類の中に、学校の甲幹適任証も添付されている。今度の試験は学科と面接だけであるから、何も心の心配はいらない。たまたま俺が今回の試験の試験管を命ぜられているので、君は俺に任せておけ、よいな。中隊長には俺から受験させることになったと伝えておく。よいな」と受験を説得させられました。私は「しばらく考えさせてください」と答えると、「考えることなど何もない。とにかく俺に任せておけ、よいな」と再三言われ、あまりにも積極的な、しかも強引な命令であり、有り難いような、迷惑のような、複雑な気分でしたが、「よいな」の

念押しに、遂に「有難うございます」と答えてしまいました。

帰班後、佐藤班長殿の部屋を訪ね、幹候受験は私の本意ではなかったが、受験せよとの命を大隊長から言われ、説得されたことを報告すると、「それはよかったではないか。受験目指して頑張れよ。俺はなあ、宇佐の高等小学校を出てすぐに大工の弟子入りをしたが、全く性に合わず、十八歳の年に陸軍に志願し、入隊三年で現在やつと伍長や。貴様は最初から幹部候補生の資格があるやないか。受験に通れば、一年もすれば少尉殿や。とにかく良かったなあ」とのことでした。

その後引き続き事務室に山崎曹長殿を訪ね、借用していた公用腕章を返却し、大隊長殿より幹部候補生の受験を説得されたことを報告しました。山崎曹長殿は「そんなことだろうと想像はついていたが、やつぱりそうだったのか。貴様の中学の先輩か。それは本当に良かったなあ。まあ、しっかりやれや」と言われました。

その夜、就寝してもなかなか眠れず、毛布に包まったまま神様に祈りました。「神様、今日も一日私をお守りくださり、厚く感謝します。また今日は、凶らずも大隊長殿が私の中学の先輩で、私の幹候受験を命ぜられました。私にはどうしてよいか分かりません。どうか、あなたの御旨のままに、私をお導きください」と。

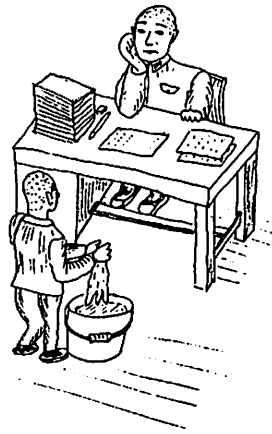
三 中隊事務室勤務を命ぜらる

日々の訓練は寒さが加わるに従って厳しさを増し、砲の射撃訓練、乗馬訓練、営外雪中行軍等が繰り返され、初年兵は皆、持てる体力を消耗し尽くし、ヘトヘトになって帰隊していました。その上、休む間もなく馬舎へ行き、水飼、飼付を済ませ、やつと夕食となるわけです。これを済ますと、今度は古兵殿から諸注意に続く制裁で、最近ではこれにも慣れ、早く制裁が終わって眠らせて欲しいと思うようになっていました。今日の夕食後は、各班以外の清掃日で、当班の十二名の初年兵中六名は下士官室、他の四名は隊長室と士官室、川上君と私の二人は中隊事務室の清掃を命ぜられました。

二人は事務室に入り、「第四班川上二等兵ほか一名、掃除に参りました」と挨拶しました。山崎曹長殿が机の上に書類を山積みにし、記録されていました。山崎曹長殿が「ああ、苦労。掃除する前に、この机の上を先に拭いてくれ」と言われました。川上君は床を拭き、私は机を拭こうとバケツの中で雑巾を絞りながら、何となく机の上を見ると、山崎曹長殿が記録しているのは、陸軍功績名簿でした。これは軍人・軍属個人別の名簿で、本人の勤務場所、勤務期間やその間の勤務の内容を詳細に記録し、勅令により、叙位・叙勲時にその資料

となるものですが、これは私が入隊まで勤務していた小倉造兵廠で勤務していた仕事でもあり、再びここでお目に掛かれたことに、非常に懐かしさを感じました。

その時、山崎曹長殿が頼杖をして、「困ったな。どのように書けばよいのか分からん」と独り言を言われ、両手を上に大きく上げ、大あくびと共に背伸びされました。その名簿を見ていた私は、とっさに「山崎曹長殿、そこは、前に勲労がありますので、今回と併せて勲功と書けばよいのですよ」と言い



ました。すると山崎曹長殿は、「おお貴様は功績名簿の書き方や処理方法が分かるのか」と尋ねられました。私は「はい、分かります。入隊前の仕事が陸軍の軍属で、専らこの事務をしておりました」と、前の職業の概略を説明しました。

山崎曹長は椅子から立ち上がり、「よし、それでは俺の椅子

に掛けて、この一枚を書いてみよ」と言って、私を掛けさせました。私は「それでは始める前に、机を拭かせてください」と言って拭き終わり、川上君に「済まんが、君やつてくれないか」と言って頼みました。川上君は快く引き受けてくれたので、早速机に向いました。私は一枚約二十分くらい掛かって書き終え、「これで書き終えました。間違いありません」と答えました。

山崎曹長殿はしばらく横に立って眺めていましたが、「よし分かった。貴様は明日から俺の助手として、事務室勤務にする。明朝早速、中隊長殿に申し上げて許可を貰う。佐藤班長には俺が言うので、命令が出たら事務室に来るように、よいな」と言われました。掃除はどうとう川上君一人で行なってくれました。掃除後、川上君に礼を言うと、川上君は、「今日は、君は良かったなあ。入隊前にあんな仕事をしとったのか。どこで役に立つか分からんなあ。僕は経理事務だから、中隊事務室では役に立たないからなあ」と言って、羨んでいました。消灯時間となり、就寝しましたが、山崎曹長殿の言葉が耳に残り、なかなか眠れず、夢ではないかと何度も頬をつねってみました。

翌朝は、通常通り馬舎での作業を終え、朝食後、佐藤班長殿より「鈴木二等兵、今から俺と一緒に来てくれ」と言って、

私を中隊長室に連れて行きました。中隊長殿の横に、山崎曹長殿も居られました。

前田中隊長殿より「鈴木二等兵、貴様は入隊前は小倉陸軍造兵廠の庶務課人事掛で功績班に属し、功績業務を担当していたそうだな」と質問されました。私は「はい、そうであります」と答えました。すると隊長殿は、「良く分かった。鈴木二等兵、本日只今から当分の間、中隊長事務室勤務を命ずる。今日からは山崎曹長の指揮下に入り、命に従うように。なお籍は第四班で、従来どおりとする。従って事務室勤務以外は、第四班で起居するように。以上」との命令を受けました。

中隊長殿はさらに、「昨日、連隊本部で村上大隊長殿より貴様は幹部候補生試験に受験することになったとの話があった。大いに結構だ。頑張つて必ず合格してもらいたい」と付け加えられました。「有難うございます」と敬礼をして、佐藤班長殿に従つて帰班しました。

佐藤班長殿は班内の全員を集め、「皆よく聞け、只今中隊長命により、本日より鈴木二等兵が中隊長事務室勤務を命ぜられた。しかし、籍はそのままであるので、起居は今ままでおりである。皆承知するように」と発表されました。

班内の初年兵から、「よかつたなあ、今後もよろしくな」と言葉をかけられました。これからは事務室勤務になると

いう誇りと、毎日の厳しい訓練に参加しなくてよいという安堵の気持と、初年兵皆と苦勞を共にしなければならぬという、何となく気が引ける感じが残っていました。

班内の挨拶を終え、私物や荷物を整理し、事務室に行きました。事務室には山崎曹長のほかに、もう一人の事務の上等兵殿が居られ、山崎曹長殿より紹介されました。従つて、今日からは三人で事務を担当することになりました。

山崎曹長殿は、「当分の間、期限付きで仕上げねばならぬ事務があるので、班での点呼が終わったら、直ちに事務室に来るように。従つて馬舎に行く必要はない。食事も三度当番兵に用意させるので、班で食べる必要はない。事務室で三人一緒に食べればよい。後始末も当番兵にさせる。よいな」と言われ、そしてさらに話を続け、「この中村上等兵はな、広島高等師範を出て、佐賀の中学で国語の先生をしようたよつて、文章にかけては天下一品や。それに引き換え、この俺は、入隊前は下関の車掌区で列車の車掌をしつたが、事務をすることも多く、これが苦手で陸軍を志願し、下士官試験を受けてやつと下士官になって、やれやれと思つた途端に、隊長には言えんが、また嫌な事務室勤務を命ぜられ、そのお陰で連隊事務室で連隊副官殿や佐藤准尉にしよつちゅう書類の事で叱られよるわ。しかし、これからは二人が揃つたので、鬼に金

棒や。これから連隊本部に書類提出の時は、書類の内容によって、どちらかが一緒に行ってくれ。「これからは意が強くなったわい。アツハツハツ」と言つて、背伸びされました。

さて、ここで私の入隊前の職場の事を、少し披露することにしましょう。前にも述べましたように、小倉陸軍造兵廠の庶務課人事掛功績班に、中学卒と同時に筆生として勤務しました。当時は行橋駅から小倉駅まで列車で通勤していました。この功績班の主任は、門司から来られていた伊沢さんという予備役の砲兵中尉で、五十歳くらいの歴戦の勇士でした。また班員は約三十名で、内男性は約十人、残り約二十人は女性で、男性は次々と兵隊に招集されていきました。井沢主任は功績業務の処理に精通し、皆を厳しく指導し、私も在職二年間、主任より公私共にご薫陶を受けていました。当時の小倉陸軍造兵廠では、戦況が激烈になるに従い、兵器の増産が急務となり、廠内で働く人員も軍人軍属合わせて約三万人を越えていました。従つて、これらの人々の功績名簿や戦時名簿を保管し、召集で出兵する場合や転勤等の異動時には、これらの名簿を法規に基づいて処理し、それぞれに転送していきました。また勅命によつて叙勲がある場合は、そのうちの該当者の名簿を彰勲局に進達して、勲章の交付を受けていました。

また主任は仕事のみでなく、生活面にも良く世話をされ、

特に男子については、「いずれ君達は軍隊に行く身であるから、軍隊内で役に立つことがあるうから」と、功績業務の法令講習は勿論、自分が日本刀の鑑定士でもあつて、造兵廠内の廠長閣下や各将校から保管を依頼され、預かっている多数の名刀を、毎日終業後、希望者に約二時間に亘つて鑑定の講義をされていきました。そのお陰で、一年も過ぎた頃は十本中、五、六本の刀については、その刀工名や年代、何物(備前物)などが当たるようになり、二年後の入隊前には十本中八本までは、ほぼ当たるようになりました。

従つて今度、功績業務の知識が、これほど早くお役に立つことになったことは、とても偶然になったとは思えず、これも神様のお導きだったと、感謝しました。

山崎曹長殿の話では、中隊全員の功績名簿を十二月上旬までに作成整備せよとの連隊本部の命令が出ているとの事を聞きました。私の経験から推測して、この名簿の整理をする場合は、その名簿の兵員は移動や転勤が発生する際に記載・整理されていたので、心の中で、中隊全員か部隊全部が何処かに移動するのではないだろうか、不気味な予感がしていました。

(一九九八年「ぶどうの木」第二六号)

九 満州関東軍での思い出VII

一 右手指切断手術か

初年兵の食事当番勤務は、ペチカの管理も大切な仕事となつており、ペチカの灰出し、清掃後は新しい石炭に点火しなければならず、炭バケツを持って、営庭に中隊毎に山積になった石炭置場から石炭を掘って持ち帰るわけですが、点火の際は塊炭(かいたん)を選んで使用しないと着火が悪く、食事当番兵は、各班競つて塊炭を集めていました。十一月に入った頃になると石炭の山も粉炭ばかりとなり、早朝凍り付いた石炭の山を、ツルハシで掘り起こし、スコップでは粉炭しかすくえぬため、軍手のままで塊炭をより出し、炭バケツに入れていました。

早朝は零下二十度となり、濡れた手袋もすぐに凍り、指先もしびれて無感覚となっていました。一週間毎に回つて来る食事当番で、ついに私も右手中指と薬指の先端が、白ろう色に変色し、全く感覚が無くなりました。ついに凍傷にかかったようです。

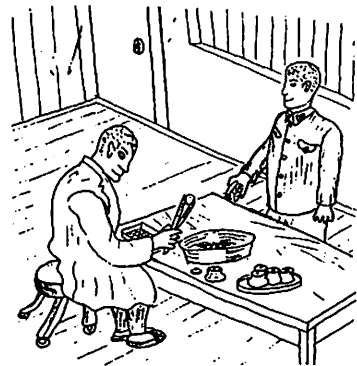
入隊時に母が用意してくれた救急薬袋の中にあつた缶入り

のメンソレータムを塗つて自分で治療していましたが、毎日の訓練で、どうしても右手指を使うため、日々悪化していました。

たまたま今度事務室勤務となり、作成した書類を連隊本部に届けた折に、医務室に立ち寄り受診しました。鈴木軍医殿より「一応治療をし、様子を見ることにしよう、もし好転しないときは、手術しかないなあ」と言われました。私はそれから毎日治療に通い、毎夜神様に、何とか手術にならずに済みますようにとお願ひし、祈りました。

一週間が過ぎ再診を受けました。軍医殿は「指先から膿が出ているが、余り好転していないな。今週末までに好転が見られなければ、来週火曜日(十二月五日)午後手術をする」と言い渡され、手術の際の留意事項が書かれた注意書をもりました。治療中に衛生兵殿から「手術は右手中指と薬指をそれぞれ先端の第一関節から切断する」とのことでした。

私は気が動転するほどショックを受けました。手術を受け



れば、少なくとも一週間は入室させられるとのことでした。

帰隊して山崎曹長殿に報告しました。「それは気の毒だな、だが頑張つて充分に治療しなさい。余りくよくよするな。お前のお陰で、事務処理も順調だし、貴様が居てくれるだけでも大助かりや」と励ましの言葉をいただきました。この言葉に励まされて気分も落ち着き、私の運命は神様にお任せしてあるので、何も心配することはないのだと心に言い聞かせ、気分を一新して事務机に就きました。

二 動員令発令

今日は十二月二日土曜日、朝の点呼時、週番仕官の大神少尉殿から「本日十時に中隊長殿より重要なお話がある。従つて全員中隊の前庭に集合せよ。従つて、各兵科毎の訓練は中止する。以上」と伝達されました。一同は何事だろうかと思し兼ねていた。私は事務室に行き、山崎曹長殿や中村上等兵殿と朝食をとりながら、中隊長殿の重要発表とはどんなことですか、と二人に尋ねました。

山崎曹長殿は、「わしもよく分からんが、昨日連隊本部で全隊会議があつて、中隊長殿も出席され、副官殿もいつになく緊張されておられたが」とのことでした。

午前十時近くになり、中隊全隊が各班毎に集合する中で、

前田中隊長殿がおもむろに台に上り、大神少尉殿の号令で「頭右、直れ」と敬礼を行い、引き続き中隊長殿より次のとおり命令の伝達がありました、「今から師団長閣下の命令を伝達する。我が第十二師団は十二月十日を期して（は号）演習に参加する。以上」と伝達を終え、そしてさらに次のとおり付け加えられました。「明朝午前十時、我が連隊は東寧神社に参拝し、その後引続いて師団長閣下の閲兵を受けることになっている。なお当連隊の（は号）演習参加への出発日は十二月九日である。それまで、各班毎に出動準備をするよう命令する。終り」とのことでした。出発まで後一週間あるので、事務処理、特に功績名簿の作成も極力早く完了させる必要があるなと思ひました。

解散後、事務室に帰り、山崎曹長殿の指示で、出発日までの事務処理、事務用品の整理、出発時の荷造り梱包、搬出等について打合せを行いました。

三 手術延期

午後から山崎曹長殿のお供をして、連帯本部事務室に出来上がった分の功績名簿百名分の提出と命令書受領のため頭出し、佐藤準尉殿に名簿を提出しました。佐藤準尉殿は「第四中隊はさばけとるな。前回の五十名分は一枚の間違ひもなく、

立派に記録されていた。今日百名で残り約五十名分だな。まだほかの中隊は早いところで五十名分、まだ提出されていない中隊もある。なかなかよく整理できると言われました。

横に立っていた山崎曹長殿が「この名簿は、鈴木二等兵が全部書いたもので、入隊まで、これを担当していたとのことで、四中隊は助かっております」と答えました。すると佐藤準尉殿は「山崎曹長、鈴木二等兵を連帯事務室にくれんかのう、専門家がほしいなあ」と言われました。山崎曹長殿は「それはお断りします。先日やつと中隊の中で見つけ出し、中隊長にお願いで中隊事務に入れたばかりで、それはできません」と答えました。「まあ、その内相談するよって考えとけよ」と佐藤準尉殿は言われました。山崎曹長殿は「鈴木二等兵、早く帰ろう、長居は無用だ」と言つて命令書を受け取つて立ち上がりました。

帰路、私だけ医務室に治療に立ち寄りしました。衛生兵殿に治療を受けていると、鈴木軍医殿が「来週五日予定していた貴様の手術は(は号)演習のため延期することになったから、明日から当分の間、自分で治療するように。ガーゼと薬を投与するから、衛生兵にもらつて帰れ。明日から新任地に到着するまでは自分で処置をするように」と言われました。(は号)演習参加命令が発せられたため、ひと先ずは手術を受けずに

済んだと内心ほっとしました。

四 血判での嘆願書提出

午後三時頃事務室に帰つて来ると、山崎曹長殿が待つておられ、「鈴木二等兵、貴様は大変なことになったぞ」と言われ、さらに続けて「(は号)演習に参加できない残留組に、当中隊で十五名おり、貴様もその中に入っている。残留組になった理由は、貴様が一人息子だからだ。一人息子が他に二名おり、その他の十二名は年令四十五才以上の者だ。師団長命令で、そのようになったとのことだ」とのことでした。

私は突然のお話しであつたので、ただ茫然とし、深い谷底に落とされたような気持ちになり、返す言葉もありませんでした。

帰班し、消灯前に班長殿より、中隊長殿の伝達として、古兵殿二名と私が残留組になつた旨の言葉をいただきました。

古兵殿二名は臨時召集兵の上等兵で、何れも四十五才を過ぎておられ、その内の一人は、我々初年兵のためによく面倒を見ていただいた陣内上等兵殿でした。私は後で班長室を尋ね、佐藤班長殿に私の気持ちを打ち明け、ご意見を求めました。「私は班長殿には一方ならぬお世話になり、兄とも思っております。従つて出陣に当たつては、ご一緒に隊に加えてい

ただき、何れ戦死する場合でも、班長殿のお供をして死にたいと思っております。従つて師団長命令とは言え、今この隊が出陣を前にして残留することは、自分としては耐えられませんが。私の母や、家の祖父母も出征する時は、もう戦死しても国の為だから、と既に覚悟はできております。この状況を考慮いただき、是非（は号）演習に連れて行つていただかうお願いしたいと思います」と言いました。

佐藤班長殿は、一言ずつ、うなずきながら聞いておられました。が「そうか、貴様の気持ちは良く分かつたので、それでは嘆願書を書いて持つて来なさい。山崎曹長殿にも頼み、一緒に中隊長殿に書面を渡し、我々からもお願いしてみよう」と言つて下さしました。

私は九時の消灯時間は過ぎていましたが、一刻を急ぐことでもあり、事務室の勝手も分るので、早速事務



室に行つて半紙を用意し、嘆願書を墨書で記しました。また署名の下に、事務用の小刀で左小指を切り、血判を押しまし

た。

そして神様にお祈りをしました。「天の神様、今日は右手指の手術があると決心しておりましたが、貴方のおぼしめしとお導きにより、手術が一応延期になりましたことを感謝いたします。しかるに今後は、動員令による隊の出陣を前にして、残留組となっております。私は是非共一緒に参加したいと思っております。ここに中隊長殿宛の嘆願書をしたためました。只今から班長殿に提出しますが、どうぞ貴方の力をもつて、私の願いを叶えて下さるよう、主イエス様の御名により、御前に捧げます。アーメン」と祈りを捧げた後、班長室に佐藤班長殿を尋ね提出しました。

翌日午前九時頃中隊長室に呼ばれ、前田中隊長殿より「貴様の嘆願書は見せてもらった。貴様の覚悟の程が良く分かつた。それに、山崎曹長も、鈴木を外すと困ると言うし、佐藤班長よりの強い願いもあり、熟慮の結果、師団長命令に逆らうことにもなるが、万一の責任は、わしがとることにし、参加させることにする」との言い渡しを受けました。私は「有難うございます。今後共よろしく願ひします」と言つて一礼し退室しました。

事務室に帰つて来ると、山崎曹長殿の机の前に佐藤班長殿も来ておられ「よかつたなあ、山崎曹長殿からも中隊長殿に

頼んでいただいたからなあ」と言われました。私は「両者に對し「ほんとお手数をお掛けしました。ほんとに有難うございました」とお礼を申し上げました。

山崎曹長殿は髭をさすりながら「中隊長殿から除外十五名の中に鈴木の名があつたことを聞いた時は、ほんとにおれは困つたなあと思つたよ、貴様がいなくなると今後の仕事に支障をきたすからなあ、今朝佐藤班長が、あの嘆願書を持って来たときは、ほつとしたよ、あれさえあれば必ず中隊長殿を説得できるちゆう自信があつたからなあ、ワツハツハツハ」と大声で笑い、「ともかく良かったのお、これからも今までどおり、頑張ってくれよなあ」と言つて、私の肩を何度も叩きました。

その夜就寝して思いました。もしあのまま残留組になつていたら、この北滿の国境の部隊が全部この地から居なくなるとしたら、どうなるだろうか。当隊の大砲等重火器の主力武器が部隊と共に全部移動し、後は四十五才以上のロートル兵（老人兵）等少数の兵力ではソ連の戦車部隊と対峙して、到底国境線を守ることは不可能だろう、当中隊で十五名として一個連帯で二百四十名くらいだろう、しかも砲兵隊では武器として砲以外では小銃のみであるから、一人一丁としても二百四十丁の銃のみと考えられると、ソ連戦車部隊には到底齒も

立たぬことになると思ひました。残留になる当班の古兵殿二人、特に陣内上等兵は、今後はどのようになるのだろうかと考え、なかなか眠れませんでした。

特に私の場合、右手指の凍傷もあり、残留組となつていれば、これからの何か月間は毎日零下何十度という寒さを、果たして体が乗り切つて行けるかどうかと思ひ、今日の参加許可となつたことは、神様のお導きだつたと思ひ、感謝の祈りを捧げました。

各班は毎日、出発準備に追われていました。砲手班は砲の手入れと、持参する弾薬の整理、御者班は馬の手入れと、鞍引具、ロープと継架柵の準備、馬糧の荷造り等に多忙を極め、班に帰つても、私物の整理、携行する寝具（主として毛布等）の選別準備、小銃や小銃弾の準備、帯劍の刃先の磨出し等、用意に追われていました。

五 滿州よ、東寧（とうねい）よ、さらば

出発の前夜の食事は鯛の御頭付に赤飯で、出陣にふさわしく豪華な夕食でした。若干緊張の中にも、賑やかさがありました。残留組の二名の上等兵殿を中央にし、食卓に就きました。班長殿より次のとおり挨拶がありました。「我々は明朝八時に当隊を出発する。朝食は予定通り済ませた後、各自飯盒

に三食分の飯と、おかずを詰める。東寧駅までは整列行軍を行う。東寧駅では、砲、馬、車輛毎に貨車に乗せる。我々は各班毎に客車に乗車するが、窓は閉めたままで行くことになっている。任地は不明であるが、先ず目的地は朝鮮の釜山港であるので、それまでは食事の補給はない。各自の水筒には朝食後忘れぬようにお茶を入れておくよう、以上明日の出発に際しての諸注意をしておく」と言われました。次に話を続けられ、残留の二名について、次のとおりの言葉がありました。「今回の出勤に当たり、残留となられたお二人については、師団長命令ではあるが、自分としては、今まで一緒に苦勞を共にしてきて、誠に残念ではあるが、明朝、我々が出発して後の午後から、新規に部隊が到着することである。この部隊に参加されることになっております。ご二人には、前任の古兵として、良く軍務に精勵され、特に初年兵に対して良く面倒を見ていただきました。私からもお礼を申し上げます。これから益々寒くなるので、お身体に注意して軍務にご精勵されることをお祈りします」と挨拶され、食器に清酒を注ぎ、中村兵長殿の発声で乾杯をしました。

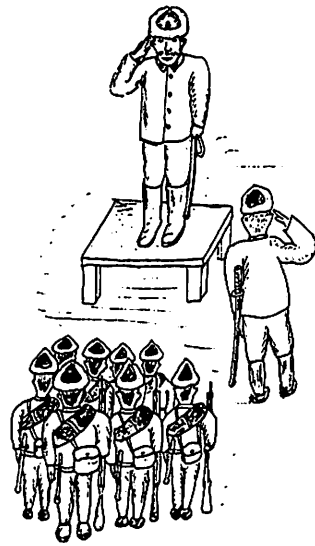
現在何処に居るのか判りません。初年兵の諸君を見ると丁度息子を見ている感じがしていました。初年兵の諸君は今までよく耐えて訓練に励んで来られ、どこの戦場に行っても、ひけを取ることはないと確信します。今後体に気を付けて、今まで通り頑張つて下さい。私は今年で五十一才になりますが、第四班の皆様には、大変お世話になりました。どうぞお元気で」と言われました。班長以下全員で拍手しました。

陣内上等兵殿の眼には光るものが見えました。

翌朝点呼後、私は馬舎には行かず事務室に直行し、山崎曹長殿の指示どおり、事務室前に配車された輜重車(しちようしや、荷車)に事務用行李(こおり、荷物)を入れる用具を積み、御者班の兵に渡しました。中村上等兵殿は第一班に、私は第四班に帰班しました。馬舎から帰班した兵と一緒に朝食を済ませ、三食分の飯(かしわ飯)と副食(奈良漬、タクワン、開きメソ、下着等を入れた袋)を背に掛け、雑のう(非常用に食べるパン三袋入り……これは師団長閣下の許可が無くては食べられぬ非常食)を掛け、帯剣を着用し、更には私は小銃を持つことになっていたので用意し、一同中隊前に集合しました。

中隊長殿の出発の挨拶の後、全員各班毎に整列し、砲廠に向かいました。途中各班の御者班は馬舎に行き、それぞれ準

備を進め八時前に全員準備が完了しました。



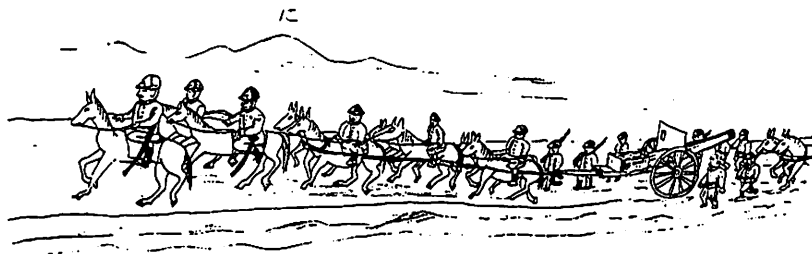
軍装を整えた四中隊は中隊長を先頭に東寧駅を目指し出発しました。二二部隊正門に差しかかりました。衛兵指令の号令が聞こえました。「気を付け！頭右……」（中隊長は馬上から答礼）なおれ」。中隊長の次は将校（大神少尉、宮崎少尉、石井見習官）、山崎曹長等の馬が続き、その次には第一班の砲を引いた六頭仕立ての馬が前馬、中馬、後馬の御者三人の誘導にて進み、次に二頭仕立ての弾薬車、同じく糧秣（りょうま）を積んだ二頭仕立ての輜重車が進みました。馬のいななきと、蹄の音、車輪の音が静けさを破り、谷にこだまし、兵の吐く息、馬の息も白く立ちのぼりました。正門のかたわれに

四中隊の残留兵が見送りに出て居られました。中に陣内上等兵殿の姿がありました。互いに手を振って別れを惜しみました。さようなら、二度と再び来ることはないだろう。この土地、砲撃訓練でいつも目標にしていたあの山々、そう思いながら、短い間ではあったが住み慣れた野砲兵連帯を後にしました。

六 関東軍（当時満州に派遣されていた日本陸軍）と南方戦線

当時の関東軍は日本陸軍の中では最も訓練が厳しく、世界最強の軍隊とまで言われていました。従って、南方の戦線が拡大するに依り、大本営は在満州の関東軍の精鋭部隊に南方戦線への派遣を命令し、その補充を内地から行い、直ちに教育訓練を行わせ、再び南方に出動命令を出していました。

私の遭遇した（は号）演習の前には（い号）と（ろ号）の各演習が発令され、それが



何時ごろ、そして南方の何処に派遣されたものか、当時は何も分かりませんでした。後になって次のようなことを聞きました。

「い号演習」 昭和十七年十二月、大本営は当時イギリスの植民地であったビルマ（現ミャンマー）の攻略を、当時の関東軍の第十五軍（司令官、飯田中将）に命令。

当時の中国には日本軍が八十万、満州に七十万、計百五十万が配置されていました。

特に中国戦線は地図でも分かるように範囲が広く、イギリスから中国への救援物資、戦略物資が、ビルマから中国に送り込まれていたわけです。これが即ち当時、援将ルートと呼ばれていました。従って、中国の戦況を有利に導き、早期に戦争を終結させる手段として、この援将ルートの絶滅のため、満州の精鋭部隊をビルマに向け出動させるため、（い号）演習命令が出されたと聞きました。この第十五軍の兵力は、第三師団、第五師団の二個師団で、その兵力は四万人であったとのことでした。

（ろ号）演習 昭和十八年三月大本営は、ビルマ方面軍第十五軍総司令官に牟田口中将を任命し、インドのマニプール州都インパールを攻略する作戦を命じたと聞いています。

これには関東軍の精鋭三個師団、兵員約四万九千名が投入

されましたが、不幸にもその内約二万名が戦病死し、約一万七千名が、行方不明又は病氣護送されたと言われ、その損耗率は七四パーセントにも達したとのことでした。

（一九九九年「ぶどうの木」第二七号）

（十） 移動編 I

一 満州出発

我が隊は中隊長殿を先頭に、六頭仕立ての大砲八門と二頭仕立ての弾薬車十六輛、輜重車約二十輛を二百名余の兵で誘導し、その隊列の長さは約三百メートルにも及んでいました。

隊列は黙々と、ただひたすらに東寧駅（当時の満州国の北端の牡丹江省の東寧県にあった終点の駅で、黒龍江（現在のアムール河）を挟んで当時のソ連と対峙（たいじ）していた。）を目指して進行しました。

道路上の積雪は、車輛や人馬で踏み固められ、氷状となり、

馬は蹄に鉄幸(スパイク状の蹄鉄)が取り付けられているので滑らないが、初年兵等徒歩で行進する兵は、防寒靴(内側は毛皮の布靴でゴム底)で歩くので滑りやすく、片手で砲車や馬の引具(馬と車輛を連結してある革のベルト)を掴まえて、滑らぬように気をつけて歩きました。

馬のいななきと砲車等の車輛の響き以外は、何も音は聞こえませんでした。

道路沿いの満人の家々や周囲の畑や、クリーク(小川)には十センチの雪が積もり、あたり一面銀世界となっており、毎日の砲手訓練で駆け巡った山野を眺めながら、この眺めも今日で見納めかと思ひ、この目にしっかりと焼き付けて置くことにし、感慨ひとしおでした。

新任務地も知らされぬまま、隊列は一步一步東寧駅を目指し進みました。シベリヤの方から、凍りついた黒龍江(現アムール河)を渡って吹いてくる北風はさらに冷たく感じ、頬や鼻・耳等痛さを感じました。

そのうち、当隊はやつと東寧駅に到着しました。駅には先着の他部隊が、列車に乗り込むところでした。列車は客車が前の方で、後部は有蓋(ゆうがい)貨車が連結されていました。

中隊長殿から、「これから停車中の列車に乗車するが、先に貨車に砲・弾薬・馬・馬糧等を積み込み、完了後に各班毎に

乗車せよ」との命がありました。

我々砲手班は、貨車の扉を開けて、貨車から斜めに厚板を掛け砲車・弾薬車と交互に、掛け声と共に人力で引き上げて乗せました。

しかし、御者班の兵は馬を貨車に入れようとしませんが、馬が嫌がつて、立ち上がる馬、後ずさりする馬、蹴る馬などがいて、かなりてこずっていましたが、発車予定時刻の十二時までには、ほぼ積み込みも完了し、各班毎に客車に乗り込みました。

今回乗り込んだ車輛は、満州への赴任時の貨物車輛ではなく、普通の客車だったので、やつと今度

は人間並みの扱いとなり、ほっとしました。丁度十二時頃発車しましたが、車窓は全部鐵戸(木製)が閉められ、「絶対に開



けてはならぬ」との隊長命令でした。

これは防諜(スパイ活動を防ぐ)上のためだったのでしよう。駅に停車してもどこの駅なのか、駅名を見ることもできませんでした。

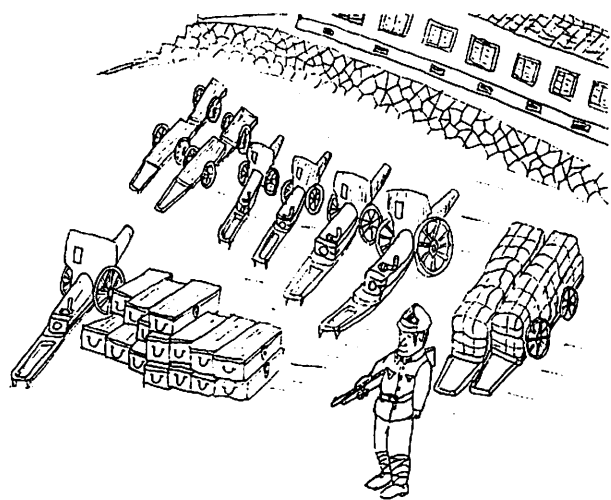
「昼食を摂れ」の命令で、各自携行の飯盒を取り出し、三食分を詰め込んであるので、その内の約三分の一を食べることにしました。アルミの飯盒で、しかも東寧駅までに長時間を零下十度の中を携行したので、飯も半分凍って「カチカチ」でしたが、干物の「開きメンタイ」(マコを取り除き、背割りにし、乾燥したメンタイ)の副食と共に、どうにか食べました。

車内の天井には、十ワット位の電灯が数ヶ所点灯しているのみで薄暗く、お腹も適当に太り、何もすることもなく、車内暖房も良く、ウトウトと眠り出す様子でした。

列車は前側に客車が四両、その後部に貨車が十輛(大砲八門、弾薬車、馬、馬糧等を積んである)連結されているため、発車時と停車時にはかなりの強い衝撃と振動を受け、丁度昼食と発車とが同時でしたので、中には飯盒を取り落とす兵もいたようでした。

私の腰掛けている四人席には、戦友の川上君と初年兵ばかりが一緒にかけていましたが、誰も行く先を知ってはいませんでした。また「無駄口は一切叩くな」との命令も出ていま

たので、ただ顔を見合わせるだけでした。車内は静まりかえり、車輪の音と、時々汽笛の鳴る音のみ聞こえていました。そのうち、誰がどこから聞いたのか、前の座席の坂上上等兵殿が小さい声で「おい、お前達知っとるか、この列車は今、朝鮮の釜山に向かっている。釜山から船に乗って南方に行くそうだ」と知らせてくれました。



二 国防婦人会による接待

列車は翌日午後四時頃釜山駅に到着、貨物車輛からそれぞれ大砲、弾薬車等を降ろし、約百頭の馬を御者班の兵が引き降ろし、隊列を整えて、釜山市の高台にある小学校まで行進しました。学校は冬休み中で、臨時に兵舎として貸与されたものでした。

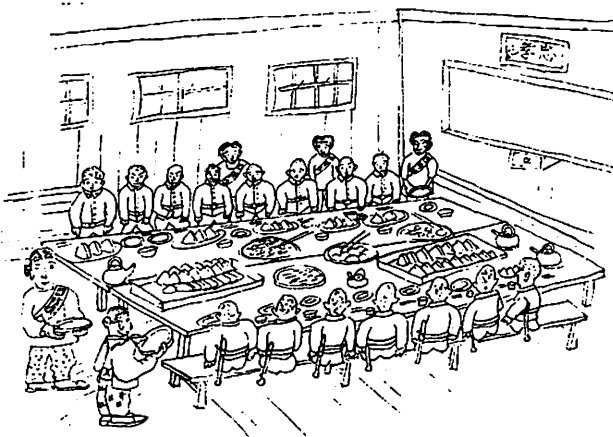
大砲や弾薬車、輜重車は、校庭に並べて、シートを掛け、砲手班から数名の立哨兵(りっしょうへい)が出されました。また馬は校庭に繋駕柵(けいがかさく)を設け、これに繋ぎ、ここにも御者班から数人の立哨兵が出されました。

満州の東寧の連隊を出発する時は早朝で、零下二十度位でしたが、ここ釜山では気温も暖かく感じられ防寒服を着ていたためか、夜間で零下二―三度に下がる程度とのことでした。教室内の机・椅子は後ろの壁に積み上げられ、板張りの床にはゴザが敷かれていました。佐藤班長殿は「我々が携行した食事は三食分で、車内で昼食・夕食・朝食を食べたが、今日の昼食は欠食となり、少し腹が空いていると思うが、今から夕食を摂る。場所は隣の二年生の校舎で用意いただいている。これは釜山市の国防婦人会の方々の奉仕だと聞いた。各自は感謝を持って有り難く頂戴するように」と説明し、隣接校舎に引率されました。この棟は二年生の教室で、室内に

は生徒の机と椅子が向かい合わせで四列に並べられ、机の上には飯茶碗・味噌汁椀・箸等が置かれ、餅箱には麦飯のオニギリとタクワン漬け・リンゴが入れてありました。

割烹着に国防婦人会のタスキを掛けたご婦人方が、かいがいしく、お椀に味噌汁をついだり、お皿にタクワンやリンゴを盛って配膳していました。

一同は子供の椅子のため腰掛けにくいようでしたが、何とか腰掛けました。班長殿は兵を代表して「今日は大変お世話になります。遠慮なくいただきせてもらいます」と御礼の挨拶をし、兵一同「いただきます」と言つて箸をとりました。



久しぶりに温かい味噌汁の味、タクワン漬けの味をかみしめ、家庭的な雰囲気にひたりながら食べました。「味噌汁の御代わりをどうぞ」と言つて、お盆を持って横に立っている四十歳位と思われる日本婦人の横顔の何と美しいことか、早めに汁を吸い込んで、「御代わりをお願いします」と言つて汁椀を差し出し、お盆の上に乗せながら、しみじみと、婦人の顔を見ると、故郷に居る従姉の泰子姉さんに、どこか似ているようでした。

三 釜山市内の風呂屋

夕食を終え、元の教室に戻り、佐藤班長殿より、これから先の行動予定の説明がありました。「これから各自所持品の整理をし、引き続き、市内の風呂に行くように、詳細は中村兵長から聞くように、そして風呂から帰った者から、今着ている防寒服は全部夏服に着替える。新しい服はその時に渡す」。「次に明日の予定は、朝六時起床、人員点呼後、朝食を摂る。七時校庭に整列し、釜山港埠頭(ふとう)に行進する。以上」。次に中村兵長より入浴券の配布を受け、「この券の裏面に印刷している風呂屋は、どこでも入浴できるので、印刷してある配置図を見て行ってくるように」とのことでした。

地図を見ながら、風呂屋の位置を確かめ、少し遠い方が入

浴人数も少ないはずだと思い、川上君と相談し、早速洗面具を持って二人で出かけることにしました。

所持品の整理をしながら、教室の壁に生徒の書いた絵画が貼つてあるのが見えました。立ち寄つて一枚一枚を眺め、黒のクレヨンで戦車らしいものが書いてあり、これは男の子の作品でした。次

の列は女の子の作品と思われ、

日の丸の旗を持った婦人会の

方々の姿が書いてありました。

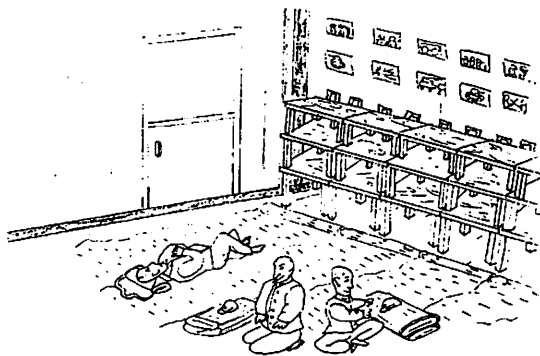
名前が下の方に書いてあり、日

本名の分と、韓

国人名のものと混ざっていました。

従つて、この教室の生徒は、韓国人と日本人

が一緒に、日本語による教育が行われているのだらうと思



ました。

川上君と二人で校門を出て坂道を下り、住宅地を通り抜け、ほとんど戸が閉まっている商店街を一気に通り過ぎ、図面を見ながら行くと、一番遠いと思われる目的地の風呂屋に着きました。

男女別の入り口

の中央に張り紙で

「兵隊さんは午後

五時より、一般は

午後七時より」と

書き出してありま

した。

六時少々過ぎて

はいましたが、入

るのは我々二人だ

けでした。

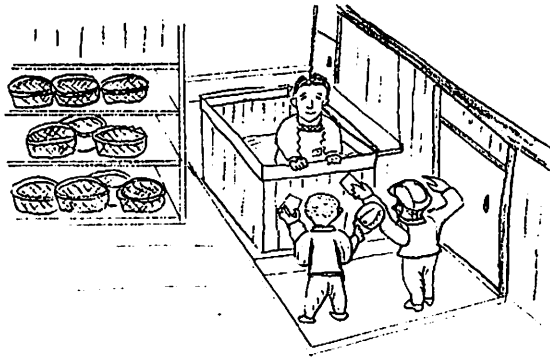
「今日は、風呂

に入れてください」

と言って番台に座っ

ているおばさんに

入浴券を差し出すと「いらっしやい」と言って、笑顔で歓迎



してくれました。

満州を出発する約一週間前から、出勤準備に追われ、一度も入浴していなかったもので、身体があちこちかゆく、おそろく「シラミ」が繁殖しているためだろうと思いました。

脱衣場も、きれいに清掃されているので、脱衣籠に脱衣すれば、あたり一面シラミが飛び散るだろうと考えると、申し訳ないと思いながらも脱衣しました。

浴室入口のドアを

開けて見ると誰一人

入っておらず、本当

に一番風呂でした。

浴槽につかり、川上

君と久し振りに「実

にいい湯だなあ」と

手足を延ばし、互い

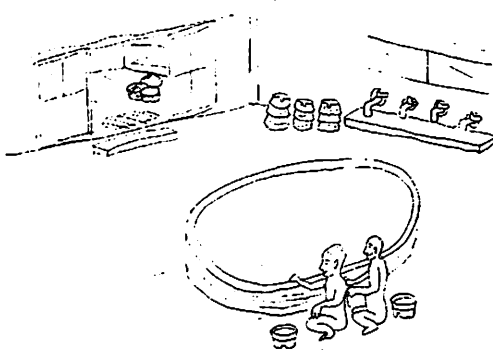
に背中を流し合って、

厚く溜まっていたで

あろう「アカ」を流

しました。

帰りに番台のおばさん



に「有り難うございました」と挨拶すると、おばさんが「兵隊さん、あなた方はこれからどちらの方に行かれるのですか」と尋ねられました。私は「さあ、どちらに行くのか知りませんが」と答えると、「私の長男も満州の関東軍に入隊しましたが、昨年十月ビルマから一度便りがあつただけで、その後はどこでどうしているのか分からず心配しています。あなた方も体に気を付けて元気に過ごしてください。家の方も心配していると思いますので、出来れば手紙を出してあげたらよいですよ」と言われ、ハンカチで眼頭を押さえられていました。

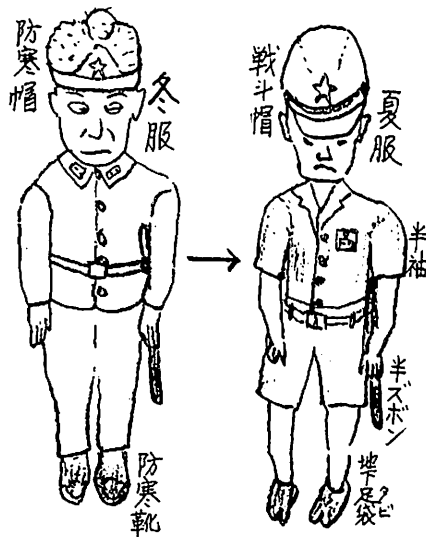
この言葉に急に故郷のことを思い出し、母や祖父母は今頃どうしているだろうかと気になりました。礼を言つて帰途についても、あの思いやりの言葉と、子供への気持ちに身にしみるのを感じました。永らく入浴していなかった身体の汚れも、すっかりきれいになり、ほどよく身体も温まり、商店街の中をゆっくり通り抜け、学校に帰りました。

四 夏服での乗船

「鈴木二等兵、只今帰りました」と言つて教室のドアを開けると、中から中村兵長殿が「鈴木・川上二等兵、帰りが遅かったやなかか。どこをそついとつたか。早く服や下着を着替える」と言つて、部屋の角に山積みされた衣類を指差しました。

室内ではすでに着替えた兵連が、階級章の付け替え等をしていました。我々二人も、早速急ぎ着替えました。

室内はストープのお陰で暖かく、ホツとしました。今まで着ていた防寒被服や下着は「シラミ」と一緒に廊下に用意されていた大きな竹籠に脱ぎ入れられました。靴は防寒靴に換えて、ゴム底の地下足袋が支給されました。



夜九時、班内の点呼があり、就寝には一人毛布二枚が貸与され、約五十名の兵隊達は蚕棚の蚕のように雑魚寝で就寝し

ました。勿論枕はなく、各自携行の雑のうを枕代わりに用いました。

翌朝六時起床、点呼後、隣棟(夕食をとった二年生の教室)での朝食を終え、軍装を整え、全員校庭に集合しました。

雪は降っていないが、屋根からは幾本もの「ツララ」が下がっていました。半袖、開襟の上着に半ズボン、地下足袋姿で、皆はガタガタ震えていました。班長殿の「気を付け」の号令まで震えて聞こえました。

我が隊は、隊列を整え、釜山港目指して出発しました。おそらく今日の夕方には同校に再び関東軍の別の部隊が到着するだろうと思いました。

校門の左右には食事の世話をしてくれた国防婦人会の一行が、日の丸の手旗を持って見送りに来ていました。誰言うもなく、こちらから「お世話になりました。有り難うございました」と言い、「お元気で、さようなら」との声を聞き、馬の蹄の音と砲車の音を轟かせて、坂道を一気に下りました。

この学校も軍の移動のための仮宿舎に提供され、後続部隊が次々とお世話になることだろう。一宿一飯のご恩にあずかり、久し振りに家庭的な食事等のサービスを受け、特に満州での軍隊生活では、満州人を見るだけで、久しく日本婦人に

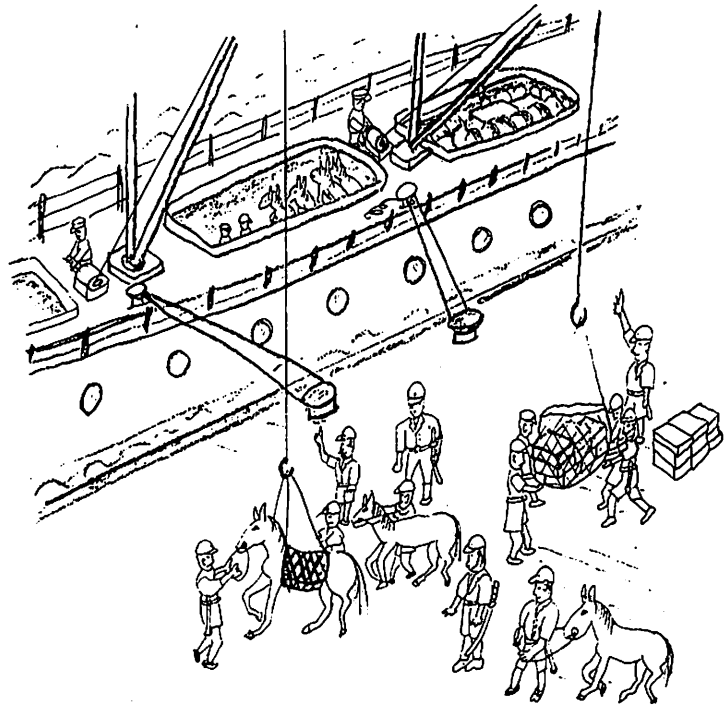
会える機会がなかったが、はからずも、この学校で日本婦人に会えたことは、これが最後の見納めかと、感慨を胸に秘めて立ち去りました。

我が隊列は国道に入り、早朝ではあったが、道路沿いには女、子供が集まり、また民家からも人々が飛び出し、隊列の通るのを見送っていました。釜山港までは約五キロで、一時間くらいかかることでした。

最前列の馬上から中隊長殿の「軍歌始め！」の声があり、前列二個分隊(約百名)と後列の二個分隊(約百名)が一節ずつ交互に歌い始めました。(砲兵隊の軍歌)「袴(えり)には映ゆる山吹色の、軍の骨幹、誉も高し、我等は砲兵、御国の護り、(以下略)馬の蹄の音に合わせ、徒歩の兵の靴音も勇ましく…」と言いたいところですが、地下足袋ばきであるから、歩調の音もつましく進みました。

沿道添いの商店や飲食店はまだ閉められたままで、看板の漢字やハングル文字が見え、朝の静かなたたずまいでした。

午前十時頃釜山港岸壁に到着し、直ちに隊列が解かれ、御者班の兵は馬から鞍引具をはずし、砲手班の兵は砲車や弾薬車を岸壁近くまで運びました。岸壁には我々を待ち受けている輸送船が十数隻接岸していました。いずれも大型船ではなく、千トンくらいのことでした。各船の近くには、すで



に他の歩兵部隊や工兵隊、輜重隊(しゅちょうたい)等の各隊が
終結し、積荷の準備に追われていました。そのうち各船とも
一斉に荷物の積み込みが始まり、船からクレーンのロープが

吊り下ろされ、馬が一頭づつ空中に吊り上げられ、やがて船
倉に吊り降ろされていきました。

一方のクレーンでは弾薬箱や大砲が吊り上げられ、大砲は
船の甲板上に右舷(うげん)と左舷にそれぞれ四門ずつ配置さ
れ、馬や弾薬箱等は船底の船倉に吊り降ろされました。

クレーンの操作は船員が行っていましたが、それ以外の荷
物のロープ掛けや綱への取り付け、取り外し等は関係の兵等
が陸上と船内とに別れて行われました。その作業の中で一番
苦勞していたのが御者班の兵で、馬が嫌がって暴れるので、
手こずっていたようです。

積込作業が終わり、乗船命令が出ました。各中隊毎にタラ
ップを上り、船内に入りました。舟はもともと貨物専用バラ
積み船のため、全く客室はなく、船腹に仮設の床が設けられ
ていました。

乗船した兵員を概算すると、我が砲兵中隊が約二百名、歩
兵二個中隊で四百名、工兵隊一個中隊約二百名、輜重隊一個
中隊約二百名、計約一千名で、仮設の床だけでは到底収容で
きないと思われました。この状態でこれから先、目的地(行き先
不明)まで幾日かけて行こうとするのか。船底には多くの荷物
と共に約百頭もの馬がすし詰め、先行きが非常に不安に感
じました。

五 船上での砲撃訓練

十二時近くになり、昼食として各兵に薄板に包んだ握り飯二個とイワシのミリン干しとタクワン入りが配られました。ほとんどの兵はすし詰めのため、立ったままで食べていました。

十三時頃、船のドラが鳴り、汽笛と共に出港となりましたが、一同は外の景色も見られぬままに船は釜山港を離れました。しばらくして船は大きく横に、或いは上下に揺れ始めました。港から外海に出たらしいなと思いました。

一時間位経った頃、佐藤班長殿より「砲手班の渡辺上等兵外六名、今から右舷甲板の前から二番目の砲の位置に集合。対潜砲撃訓練を行うから急げ」と命令がありました。

渡辺上等兵は二番砲手（一番技術に熟練していて大砲の眼鏡を覗き、標的に照準を合わせる担当）で、彼から残り五名の名前を呼ばれ、私も戦友の川上君も一緒に呼ばれました。背負い袋と雑のうを他の兵に預け、帯剣のみ腰に付けて急ぎ魚網を伝って甲板に登りました。甲板上は歩兵部隊の兵達でほぼ一杯でしたが、押し分けて通り、やっと砲の位置に集まりました。

空は曇り、北西の風が強く、波も高く、船は上下左右に四

く五米動くので立っているのも難しく、物に掴まっていないと倒れそうでした。左側に並んで航行中の輸送船も船の揺れで全く見えなくなる有様でした。右手後方に見える島は対馬とのことでした。

前田中隊長殿は佐藤班長以下砲手に対して、直ちに砲撃訓練をするように指示をし、我々は砲に被せてあるシートをはずし、砲口のキャップを取り除き、弾薬箱から実弾十発と信管十個を取り出し、砲の真後ろに用意しました。

満州の砲撃訓練では空砲を撃っていましたが、実弾を撃つのは初めてでした。私は一番砲手を命ぜられ、川上君は三番砲手を命ぜられました。後の四・五・六番砲手は弾に信管を取り付け、三番に渡す準備と、撃った後の葉莢（やつきょう）の始末をする役でした。私は満州では、しばらく事務室勤務でしたので、一番砲手の動作がうまく出来るだろうかと少し不安でしたが、懸命にやる決心をしました。

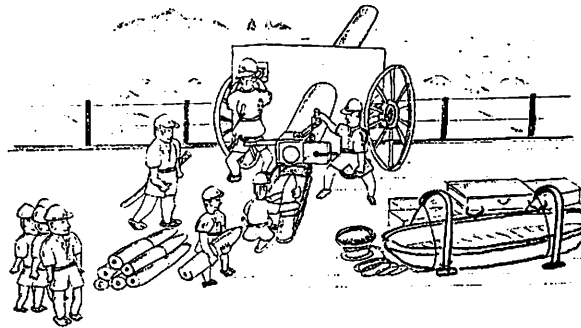
半袖、半ズボン、地下足袋ばきで、一月の北の寒風を受け、身体全体に武者ぶるいともつかぬ震えがしていました。佐藤班長殿の号令「砲撃用意」、「目標…前方の敵潜水艦」、「直接照準（しょうじゅん）」、「榴弾瞬発信管砲撃開始」を聞き、私は右手で大砲の閉鎖機（弾を大砲に詰める時に開ける部分名）を開き、三番砲手の川上君は四番砲手からもらった信管付の実

弾を砲口に差し込みました。これを見て私はすかさず、左手で閉鎖機を閉め、「よし」と大声を出しました。

二番砲手の渡辺上等兵殿は砲の椅子に腰掛け、パノラマ式眼鏡のぞきながら、照準を合わせ、「よし」の掛け声を発しました。その時すかさず佐藤班長殿が「打てー」の声を発しました。私は間髪を入れず一気に竜条（りゅうじょう）を引きました。

「ドドン」と大きな音と同時に砲身が一米程後ろに下がり、「シュルシュル」と砲弾の飛び行くのを感じました。私はすかさず閉鎖機を開けると、勢いよく薬莢が後方に「カランカラン」と音を立てて飛び出しました。

甲板上の砲の周囲には歩兵部隊の兵達が、かたずを飲んで



見守り、あまりの音の大きさに驚くと同時に耳を両手でおさえ、砲撃の都度「ウオー」と、それぞれが声を出していました。我々砲兵は砲撃の瞬間には、口をゆるめておけば、耳の鼓膜がゆるみ、耳には支障が残らないと教わり、砲手は砲撃時に口をアパーと開けて鼓膜が破れるのを予防していました。連続十発を撃ち終わり、無事砲撃訓練を終えました。

砲撃訓練後、班長殿の指示により、砲の砲身の洗浄作業を行い、弾薬箱に薬莢を納めて砲車の下に置き、砲口に皮のキアツをはめ、大砲全体にシートを被せている時、後方から「鈴木さん、鈴木さんでしょ」との呼び声がしました。

私は思わず後ろを振り向ききました。私を呼んだ方は、母校豊津中学で一年先輩の坂本さんでした。私が入隊前に勤めていた小倉陸軍造兵廠で庶務課の隣接の作業課に居られた方でした。「あ、坂本さんではないですか。昨年入営されて以来ですが、お元氣のご様子で何よりですね」と答えると、坂本さんは、「私は歩兵二中隊（中村隊）に居ます。計らずも貴方と同じ船で、たまたまこの甲板に居たので、貴方方の砲撃訓練を見ていました。我々歩兵隊と違って、大砲の威力には感心しました。貴方も元氣で頑張ってください。またお逢いできたら、ゆっくりお話ししたいですね」と言われました。

坂本さんは曹長の階級章の横に座金の星がついていたの

で、見習士官だなど判りました。腰のベルトには真新しい軍装の日本刀が下げられていました。ゆっくり話も出来ぬまま、班長殿に引率されて、我が中隊の座席に帰りました。

座席に座っている兵達の中には船酔いする者が続出し、空の飯盒に嘔吐する者もいました。川上君も訓練中は緊張していたせいか、何ともないようでしたが、座席に帰ってから船酔いが出てきたようでした。私は元來船には強く、比較的元気で、従つて船の揺れのため、かえつて腹がすき、船内食も、船酔いのため食べられぬ他の兵の分まで食べる始末でした。

寝場所のないくらい「すし詰め」で兵達は身体を縮め、あぐらをかき、くつき合つて眠りました。夏服ではあるが、船内は比較的暖かでした。

私は眠る前に祈りました、「今日もめまぐるしい一日で、しかも甲板で砲撃訓練がありましたが無事に任務を果たすことが出来ましたことを感謝します。これから先の進路についても、どうか主の導きにより、無事に目的地まで到着することが出来ますようお願いします。主の御名によつて御前に捧げます。アーメン」。

(二〇〇一年「ぶどうの木」第二八号)

(十一) 移動編Ⅱ

一 門司港に入港

翌朝船は汽笛を合図に入港停船し、前田中隊長殿より「当船はただ今門司港に入港した。今後の予定は、明日、別の船が到着し、その船に乗り換えて、いよいよ南方に向け出発の予定である。朝食を終えたら、砲・弾薬・糧秣(りようまつ)等をこの船から陸揚げし、次の船が入港してから、その船に再び積み込むことになっている」との説明がありました。

一刻も早く甲板に上がり、久し振りの門司港を見たい気持ち先立ち、ソワソワしていました。朝食後、中隊長殿より「第三班と第四班は船倉での搬出作業、第一班と第二班は上陸して船から荷受作業を行う。各班長の指揮に従い、作業開始」と命令がありました。

第一班と第二班の兵は各班長の指示に従つて、魚網を伝つて甲板上に登つて行きました。他の部隊の兵も、我先にと登つて、見る見る内に船内の人が減つてきました。

我が第四班は、佐藤班長殿の指示により、砲手班は先ず甲板上の八門の砲を先に吊り下ろす作業を行い、これが完了後、船倉に降りて行き他の兵に合流することになりました。

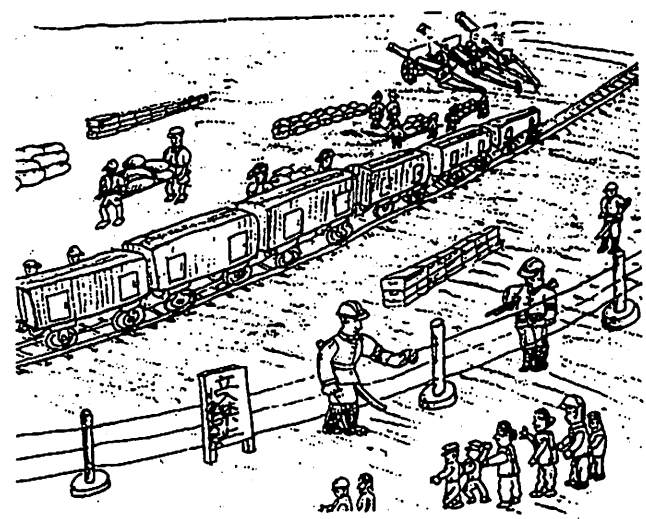
我等砲手班の一行は、最後に魚網を登り、砲の場所に行き

ました。クレーンが回ってくるまで、時間があつたので、や
つと船上から周囲の景色を見ることが出来ました。久し振りに
見る故国の山々や、接岸している岸壁と周辺の建物を眺め
て、着いている場所が門司の税関岸壁だと判りました。

岸壁の上には船から降ろされる荷物を受け取るための兵達
がひしめき合い、その後方の駅側の道路沿いには、「立入禁止」
と書かれた札の下がったロープが張られ、詰めかけている市
民が中に入れぬように憲兵が立っていました。

学校が冬休みのためか、ロープぎわには子供達が多く集ま
り、その後ろに婦人や老人の姿も見え、我々が乗っている船
の様子をじっと眺め、この冬の寒い時(十二月)に夏服姿で、
どこに行くのだろうかと言った、げげんそうな顔で、我々の
動きを見守っているようでした。

曇り空から小雪交じりの霰(あられ)が降ってきました。や
がて我々の処にクレーンが回って来たので、我々は砲に掛け
ているロープを、クレーンのワイヤー先に付いているフック
に引っかけました。クレーンはガリガリと大きな音を立てな
がら砲を吊り上げ、甲板から岸壁に吊り降ろして行きました。
下で待っている兵達がこれを受け取り、フックからロー
プを外しました。この作業を次々に行い、寒さも忘れ、甲
板上の八門の砲の陸揚げを終え、引き続き船底での作業に向



かいました。

船底では既に御者班の兵達が懸命に作業中で、丁度四基の
クレーンで、馬を吊り上げるところで、我々もこの作業に参
加しました。厚い布の四角にロープの付いた吊り具を馬の腹
部に当て、ロープの端をワイヤーロープ先に付いている「フッ
ク」に掛け、「よし」と手を上げ合図をすると、クレーンが吊り
上げ、宙に浮いた馬は驚いて足を動かし、暴れるやら、嘶く(い

ななくやら、馬を押さえて腹に吊り、布を当てるだけでも大騒ぎで、一頭に十人もの兵達が手伝うほどでした。こうして約百頭近い馬の搬出が終わり、一息つく間もなく、次は弾薬・馬糧を搬出し、そのほか小銃弾・機銃弾・手榴弾等、他部隊の分も搬出しました。

船内は比較的暖かく、搬出作業もはかどりましたが、岸壁の荷受作業の兵達は曇(みぞれ)が降る中を夏服姿で、さぞや寒かったことと思われました。日暮れの頃やつと夕食となり、船倉の壁の明るい電灯の下、残っている弾薬箱に腰掛けて食べました。早く上陸したいな、という気持ちに駆られました。

夜間作業が終わったのは、夜九時過ぎでした。船倉の荷物も全部無くなり、外で作業していた兵達も皆再び乗船して来ました。全員が一夜をこの船内で過ごしました。

一夜が明け、点呼、朝食後、全員は手荷物を携行して下船しました。この船は、我々が下船後再び釜山港に引返すとのことでした。岸壁で中隊全員整列し、中隊長殿より、本日の行動計画と作業分担の説明がありました。その間我々が乗って来た船は、汽笛を合図に静かに岸壁を離れました。

昨日まで降っていた曇(みぞれ)も止み、門司の山々は白く薄化粧をしていました。少し北風は吹いてはいましたが、日中は薄日もさし、岸壁での作業も割にはかどっていました。

砲手班の作業は、引き込み線に停車している貨車(多分、小倉市城野にある小倉陸軍補給廠(ほきゅうしょう)から運ばれてきたものだろう)から砲の弾薬箱(一箱中に四発入り、約八十キログラム)を背負って岸壁まで運ぶ作業でした。

丁度満州での馬糞捨て作業を思い出し、六十キログラムのカマスを担いで馬糞街道を歩いた頃を思い出しました。

貨車上には数人の古兵殿が居て、貨車に積んである弾薬箱を二人がかりで持ち上げ、我々が後ろ向きで背中を差し出すと、ずしりと箱を背中に乗せられました。途中で落とさぬように岸壁まで、よちよちと歩くと、降ろす場所にも古兵殿達が待ち受けて、これも二人係で受け取り岸壁上に積み重ねていました。この作業を何回も繰り返し、岸壁の端はみるみる内に弾薬箱が山積みになりました。

丁度正午頃、岸壁に大型貨物船が次々に接岸しました。

我々の正面に停泊した船には、船腹に白ペンキで第十六多門丸と書いてありました。またその一つ前の船には、第十四多門丸と書かれていました。

我が中隊が乗る船は正面に停泊している第十六多門丸とのことでした。

「昼食をせよ」とのことで、岸壁に積まれた弾薬箱に腰掛けて弁当を食べているとき、横を通行中の数人の他中隊の兵

の一人から「おお、鈴木さん、鈴木さんやないですか」と私に声がかかりました。顔を見ると、行橋駅で出征する時に一緒だった同駅前にある靴屋の息子の杉本君でした。私は「おお、杉本さん、久しぶりでしたね、お元気でしたか」と言うと、「はい、ありがとう、今体調をこわして入室しているが、そのお陰で、さつき両親に面会できました。お宅の方も多分会いに来られているのではないですかね。これ残り物ですが、母が作ってくれた『おはぎ』が少し入っています、食べてください」と言つて紙袋を渡され、「私は今第一大隊第二中隊に居り、乗る船は第十四多門丸です。ではお元気で。現地に着いたらまた会いましょう」と言つて、急ぎ足で立ち去つて行きました。家の者が来ているのであれば、是非一目で良いから会いたいと思う気持ちはあれど、作業中で勝手に場所を離れることもできず、外での弾薬運搬作業が終われば、引き続き船内の荷受作業となるので、船底に入らねばならず、諦めるよりほかはありませんでした。（出航後、彼の乗った第十四多門丸が途中敵の魚雷攻撃を受けて撃沈され、戦死されたようとは思っていませんでした。）

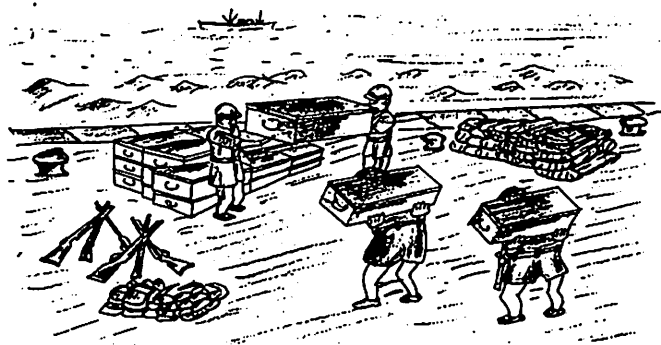
後で船員に聞いた話では、今度我々が乗る船は、日本郵船の徴用船で、この船員も船と共に軍属として徴用されているのだとのことでした。

この船は石炭焚きの三千トン級貨物船で、徴用前までは、横浜からフィリピンに軍需物資を運び、帰りにはバナナ、砂糖、生ゴム等を積んで帰つて来たとのことでした。

午後から我々は再び船内に入り、クレーンで吊り降ろされる馬を始め、弾薬や物資を船底で受け取り、所定の場所に配置する作業を行いました。貨物搬入の全作業を完了したのは、午後五時頃でした。

遂に家の者に遭う機会もなく、かりに来ていたとしても、立入禁止の縄張りに、憲兵が見張りをしていたので、到底不可能だったことだろうと思いました。陸上での作業の兵も皆乗船し、人員点呼がありました。

しばらくしてドラと汽笛が鳴り、船が静かに動き出しまし



た。全員が甲板上に立ち並び、いよいよこれが最後の故郷(故国)の見納めかと、門司の家並みや後ろの山並みを眺めました。

船はゆっくりと、静かに関門海峡を西進し、風師山(かざしやま)から戸ノ上山が見えてきました。海岸の家々からは灯火が見え、海岸線を守る西鉄電車が見えますが、窓は全部鐵戸が閉ざされていました。海岸線を眺めても全く人影は見えませんが、防諜(ぼうちょう)上とは言え、見送ってくれる人もなく、全員が無言のまま立ちつくしていました。日暮れ近くに船は幾分速力を上げ、陸からも遠くなり、今まで薄青色の海水も急に真青に変わりました。

いよいよ外海に出た頃、対潜監視兵(航海中、甲板上にいて、敵潜水艦を監視する役目の兵)を甲板に残し、他は全員船内勤務に入りました。この監視兵は各中隊から約十名ずつ、一回の勤務時間は約二時間の交代制で、私は夜九時から十一時の間とのことでした。私は船内に入る前に甲板から船列を眺めると、当船団は六隻が二列に並ぶ十二隻の船団で、その護衛として海軍の駆逐艦が先頭に一隻、中程の両横に各一隻計三隻が随行していました。

我々はまだ行先も知らされず、ただ南方方面に行くという事実をふまえ、不安と心細さをじつと堪え、各自静かに座っていました。この頃から船は上下、左右に、かなり大きく揺

れだしました。

二 兵舎は鶏小屋

この船は貨物船のため、十数人の船員の部屋以外には客室等はなく、我々兵二千人を収容するために、丁度養鶏所の鶏小屋のように船槽に木材で五階建の棧敷が組み立てられ、上下の床と床との高さは約一・五メートルの間隔で、板張りの床にはゴザが敷かれてありました。従って我々は床上を立つて歩けず、四つんばいに、這っていかねばならず、またあぐらをかい、やっと頭がかえらずに座れる程



度で、全員そろうと鮪詰め同然でした。ただ、いつも幾人かの勤務兵(馬車当番、砲廠当番、不寝番、対潜監視当番等)が席を空けるため、幾分ゆとりがある程度でした。船が大きく揺れるたびに「ギー、メリメリ」と音がして、今にも上の床が崩れ落ちそうな、潰れるのではないだろうか、落ち着いては居られぬ状態でした。我等野砲中隊の居場所は、五階建ての内の一番下で、そのすぐ下の船底には、砲や馬や、弾薬箱、馬糧等が積み込まれ、数日経過した頃から、馬の糞尿の臭いが充満し、窒息するのではないかと思われる有様でした。また各階への往来や、船底に、或いは甲板上に行くには、階段は中央部に一カ所あるだけでした。しかもその階段は狭く、食事当番兵が食缶の運搬等以外は使用禁止のため、甲板上から船底まで棧敷(さじき)の前面に吊り下げられている魚網を伝って上下していました。

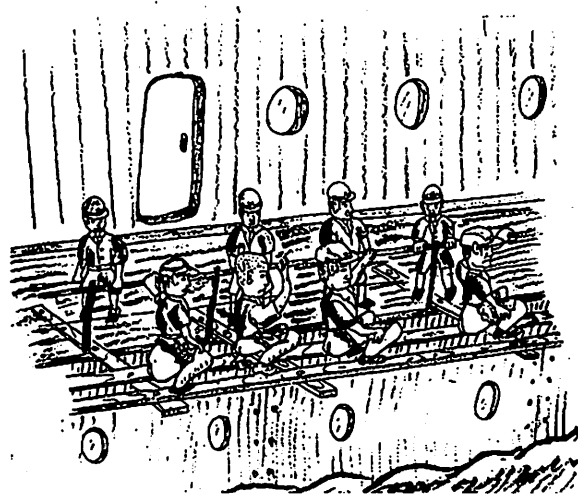
三 便所をするのも命がけ

船内で、我々が一番困ったのは便所で、船内の便所は船員便所が一カ所だけで、船員以外は使用禁止になっていました。従って臨時に甲板上に便所が作られていました。これは甲板から海面上に突き出しで、材木組の仮設便所が左舷と右舷とに各十人分ずつ設けられていました。

小便の時は、甲板上の縁取りロープを握って海面に向かって放尿すればよいが、大きい方は、ロープをまたぎ、海面に身体を乗り出し、仮設便所の板の上に乗る、海に落ちないように右手でしっかりとロープを握りしめ、左手でズボンを下げて用を足さなければならず、波の大きなうねりで船が揺れ、また風雨の激しい時など、全身ずぶ濡れになる等大変でした。風の強い時等、拭いた紙が舞い上がり、兵等が座っている船内に落ちてくる始末でした。

四 対潜監視(敵の潜水艦を探すこと)

対潜監視要員を命ぜられたのは、夜八時三十分頃でした。



私達約十名の勤務時間は、夜九時から十一時までの二時間でした。布施伍長殿の指揮下に入り、戦友の川上君を含め一同帯剣を腰に付け、前面に垂れ下がった魚網にぶら下げられている救命具を着用しました(救命具と言っても布製ではなく、長さ五十センチ程に切った孟宗竹(もうそうだけ)を、前側に五本、後ろ側に五本を紐で繋いであった)。そして布施班長殿の引率で、一斉に魚網をよじ登って行きました。

体に帯剣を付け、雑のうをかかっている上に、孟宗竹の救命具を着用しているので、地下足袋ばきとはいえ、魚網をよじ登るのは大変で、体の重みで足が上にあがり、なかなか思うように早くは登れませんでした。もし敵潜水艦の攻撃を受けて非常事態になったら、各隊毎に全員が竹の救命具を取り付け、この魚網を登らねばならず、しかも一度に二千人もの兵隊が、我先にと、魚網に取り付くであろうことを想像すると、ゾツとするのを禁じ得ませんでした。大混乱が起こるのではなかるうかと思いました。しかも我が中隊は船底に近い一階になっているので、上まで登り付いた時には、息切れしそうでした。

我々の任務場所は右舷の甲板上の救命イカダが積み上げである横で、海に向かって横一列に「おりしけ」(左足を曲げて立て、右足は地面に付けて座る姿勢)をして座りました。前

任の監視兵と交代して任務に就きました。甲板上は少し寒く、空は少し薄曇りで時々月が雲間から顔を見せる冬空でした。我が船の右横に並んでいる船(第十四多門丸)も薄闇の中に、ぼんやりと霞み、船影も黒ずんで見えていました。風は強くはなかったが、波が高く、並んで進んでいる第十四多門丸が時々見えなくなるほどでした。

船のエンジン音が「ゴトゴトツ」と響く外には物音一つなく、甲板上は静まりかえっていました。

私は指示の通り海面を探視し、万一敵潜水艦や魚雷の航跡等を発見したときは、大声で「敵潜水艦〇〇メートル先に発見」等と大声で司令に知らせることになっていました。

夜十時を過ぎた頃、半袖の上衣では、さすがに寒さが身にしみ、皆身体がふるえていました。

横に居る川上君が小便のため立ち上がり、甲板の柵とロープを握って海面に向かって放尿しました。これを機に、他の兵達も交互に放尿し始めました。司令が「船が大きく揺れているので、海に落ちぬよう注意せよ」と声を掛けていました。夜が更けて静けさの中に不気味さを感じながら、各自が海面を見すえ、一秒毎に目の位置を右から左へと移し、二分位してから今度は左から右へ移動させていきました。

真正面に並んでいる第十四多門丸は灯火管制下であり、一

点の灯も見えず、我が船同様エンジン音を響かせ、船に当たる大波の白い波頭を残しながら静かに一路南進していました。

五 第十四多門丸撃沈さる

その時、右舷の我々監視班の後方(船尾側)に位置している他部隊の監視兵が大声で、「船の後方二十メートルの位置に、魚雷の通過跡発見」との連呼が起りました。我々も一斉に船尾の方の海面を見ると、船尾の後方約二十メートルくらいの所に白い泡状の魚雷の通過跡が見えました。その瞬間に船内の非常ベルと汽笛が断続的に鳴り出しました。

船は急に進路を左に変えたため、横に並んで進んでいる第十四多門丸は右手後ろの方向に位置が変わって見えました。

海面上は月明かりで、魚雷の航跡が、かすかに見えました。船内からは続々と救命具を付けた兵達が、魚網を伝って我先にと甲板に出てきました。私は魚雷の白い航跡を見て、その不気味さに、一瞬身ぶるいし、背筋に寒さが走り、生きた心地はありませんでした。横にいる川上君や同僚達も皆、ガタガタと震え、顔色も真っ青でした。

魚雷航跡発見から数分経った頃、右斜め後方になっていた第十四多門丸の中央部から、「ドカン」との大音響と共に大きく高く水柱が立ちました。引き続いて、船尾の方からも水柱

が立ち昇りました。我々は、かたずを飲んで見守っていました。二本目の水柱が立った直後に、この船から、かすかに人の声が聞こえ、甲板の上を歩き交う兵の影が見え、恐怖と絶望が渦巻き、阿鼻叫喚(あびきょうかん)の修羅場となっていました。私は身体から血の気が引く思いで眺めました。どうすることもできません。

あの船には「南方に着いたら、また逢いましょう」と笑顔で別れた同郷の行橋駅前出身の杉本君の顔が浮かび、何とか助かってほしいと思いました。困った時の神頼みではあるが、震える声で、「天の神様、貴方の力をもって、杉本君の命を守りください。またこの船をお救いください。我等の船が無事目的地に着くことができますようお願いいたします。この願いを尊き主の御名によりお願いします」と何度も祈りました。

再び眼を開け右後方を見ましたが、今度は左後方の少し離れた位置になり、我船はジグザグに進行方向を変えながら進んでいます。第十四多門丸は、ほぼ停止し、船の中央部から火災が起こった模様でした。数分後我が船は、今度は向きを大きく右に変え、火災を起している横の僚船が再び右真横約一キロメートルくらい離れた位置になりました。

我々は、ただじっと見守るのみで、助けることも何もでき

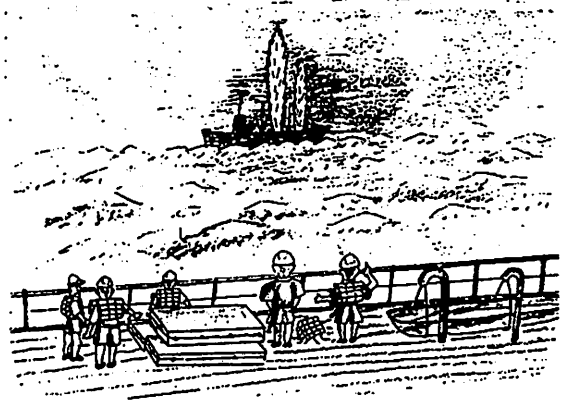
ません。その内僚船から爆
発音が出ているようでした
が、見る間に船首の方を立
てて、船尾の方から一気に
沈んでいきました。

一瞬の出来事で、誰もが
無言のまま、いつまでも
沈んで行った第十四多門丸
の跡をじっと見つめていま
した。

戦争と言うものは実にむ
ごく、悲惨なものだなと思
い、また私が入隊する時、
職場の責任者から、出征に

際し、贈られた言葉を思い出しました。「我国は今や、大東亜
共栄圏の確立と平和と繁栄のために戦っている。貴方は今こ
こに国に召されて兵役につかれるわけであるが、どうか国民
の代わりとして、この目的に向かって軍務に精励してください
と。」

今日の戦争が、本当に大東亜共栄圏の平和と繁栄のための
戦いなのか、我国が独・伊と同盟を結び、他の世界中の国々



を相手に戦っているが、本当にこれが聖戦なのか、勝算があ
るのか、我々のこの大輸送船団の航行に、我が帝国海軍の艦
船が一隻もないのはどうしたことか、また現在の船の位置は
鹿児島島の沖を航行していると思われるのに、既にこの近海に
までも敵潜水艦が近づき、待ち伏せしていたとは、どうい
うことなのか、本当にこの戦いが聖戦であるのなら、神様が
きつと守ってくれるだろう、等と考えながら、甲板上で夜露
に濡れながら、シヨックと心労の中で、ウトウトしながら長
い一夜を過ごしました。

夜が明けて海を眺めると船の進路の右側に転々と小島が現
れ、その後方二キロメートルくらいの距離に大きな陸地が見
えました。海面の色は茶褐色でした。船は中国大陸の沿岸に
沿って南下している様子で、とにかく魚雷攻撃からやつと解
放されたなど、兵達は安堵の気持ちとなり、それぞれ持ち場
に散って行きました。

(二〇〇二年「ぶどうの木」第二九号)

(十二) 移動編Ⅲ

「前号までのあらすじ」

満州（現中国）の関東軍に入隊していた私は、所属する師団に動員令（戦地に出動する命令）が発令され、当部隊全員が南方に移動することになり、満州の牡丹江省東寧県大城子の野砲連隊を出発し、韓国の釜山港から軍用船で門司港に到着、同港で大型軍用船に乗り換え、十二月下旬、曇（みぞれ）の降りしきる中、門司港を出発しました。

船内は鶏小屋同然の狭さで、約二千人の兵達が高さ一・五米の五階建の棧敷が設けられ、その中に各隊毎に収容されていました。甲板上下では各中隊から派遣された数名の兵達が、中隊毎に対潜監視を命ぜられ、鹿兒島沖に到達した夜九時頃、船団内の当船の右隣りの船が、突然敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、撃沈され、次は我が船の番だと、同乗兵一同、生きた心地もなく、心配していたが、幸いにも無事甲板上で一夜が明けました。

一 食事当番

昨夜の九時の人員点呼時、佐藤班長殿より、明日の食事当番を命ぜられ、戦友の川上君と二人で第四班（約五十名）の

食事の世話をすることになりました。

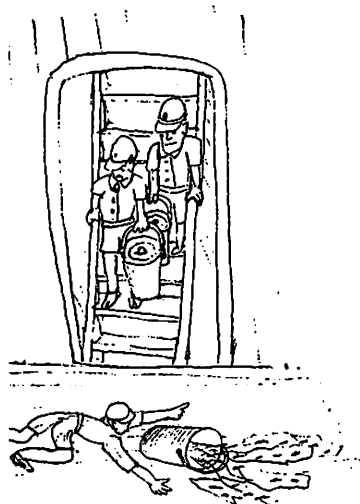
昨夜から強風となり、海が大荒となっていたため、今朝も船が可なり揺れていました。中隊の週番上等兵殿の「各班の食事当番兵は、甲板の炊事場前に集合」の号令で、第四中隊の当番兵八名は一勢に走って階段を登って甲板上に集合しました。船が大きく前後左右に揺れるので、じっと立っていることが出来ず、柱やロープにすがって足をふん張り、各自動かぬようにしていました。川上君と二人で大形アルミの食缶四個（飯缶一、肉ジャガ缶二、味噌汁缶一入り）を、階下の棧敷の自班まで運ばねばなりません。川上君の体力から考えて、彼に味噌汁缶を運んでもらうことは難しく、ましてや一度に一人が二缶運ぶことは到底不可能でした。

また食缶を持って階段を降りる時、船の揺れで、階段が垂直に立ったり、横になったりするので、その都度片手で手すりを掴まえ、片手で食缶をぶら下げて階段が横になった時、一斉に運び、垂直になった時は、しばらく、じっとしている要領が要り、万一片手で持った食缶を取り落とせば、味噌汁は全部こぼれ、大変な事になると思い、川上君には一回目は飯缶を、二回目は肉ジャガ缶を持ってもらい、私は初めに味噌汁缶、二回目は肉ジャガ缶を運びました。私は満州の部隊で勤務中、凍傷で右手の人差指・中指・薬指の三本を先端の

第一関節部分から切断手術することになっていましたが、動員令が出て、手術が延期され、赴任地に到着後再診断すると言われて、移動中は自分で受領の薬で治療していました。

零下三十度位の満州での環境から南方に移動するに従い、凍傷の指先から自然に膿が噴出し、自分で付替え治療の結果、ローソク色の指先が下から赤みが差して来ましたが、まだ指先に力が入りませんでした。しかし、どうにか無事に食缶を運び終えました。

他班では階段を下りる時に味噌汁をとり落とし、汁が全部缶からこぼれたため、その班では朝食は飯と肉ジャガのみで味噌汁は無かったとのことでした。



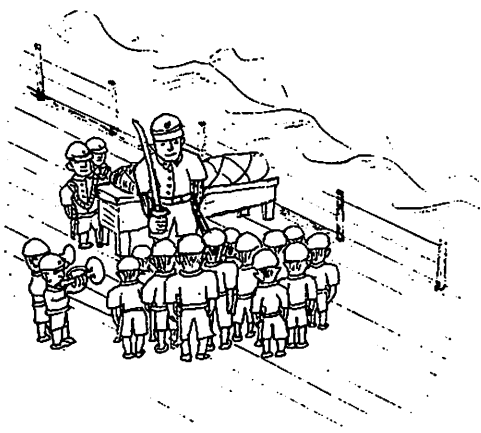
二 船上での水葬

我が中隊の第一班の兵の中で、乗船前から体調が悪く、軍医が治療に当たっていた兵(上等兵)が、乗船三日目に治療の甲斐もなく病死しました。午後二時から船上甲板で水葬をするとのことで、中

隊全員(約二百名)が甲板上に整列し、中隊長殿より挨拶があり、兵の中から指名された僧侶二人が読経を、葬儀が始まりました。

遺体は毛布と敷布に包まれ、これに石灰を入れた袋をロープで縛り付け、「重し」にしてありました。

読経が終り、前田中隊長殿は抜刀し、号令をかけました。英霊に敬礼、「捧げ銃(つつ)」と声を発しました。ラッパ兵二人が最敬礼のラッパを吹き鳴らし、宮崎少尉殿が合図し、甲板



上に設けられた祭壇を海面に向って斜めに傾け、遺体を縛つてあつた縄を軍刀で切断しました。遺体は板の上を海面に向つて、すべり落ちて行きました。

全員はしばらく黙祷しました。目を開けて海面を見ると、遺体は静かに波間に浮いて船の進行とは逆方向に流れながら、静かに沈んで行きました。

三 食品倉庫の衛兵勤務

朝の点呼後、食品倉庫の衛兵勤務を命ぜられ、私は午前八時から午後四時まで、川上君が私の次の午後四時から午後十二時まで、石田二等兵が午後十二時から午前八時までとなつていました。中村兵長殿の引率で、船内第二槽の倉庫前に到着しました。前任の第二班、早川二等兵と交代し、衛兵の腕章を貰い、直ちに左腕にはめ、勤務に就きました。当倉庫の入り口はドアは無く、通路から倉庫内は、まる見え状態でした。倉庫に収容されている品物は、缶詰類で、各れも木箱入りで、品名員数表に記してある一覽表を見ると、牛缶、サバ缶、イワシ缶、サケ缶等、他に米俵・パン粉袋等で、これ等の木箱が、ぎっしり積み上げられていました。

倉庫前の通路は狭く、従つて倉庫内に立硝(りっしょう)してしまいました。通路からは立哨兵は直接見えず、倉庫内に入って

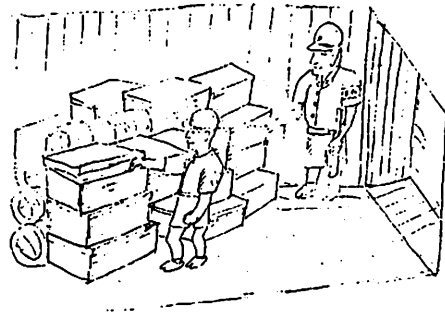
来て、やっと歩哨が立っているのが判る状態でした。

手近にある箱は牛缶の箱でしたが、よく見ると、手前に置かれた箱は、蓋が少し浮き上り、蓋をとめてある釘も抜けているようでした。私は思わず蓋を持ち上げて見ると、楽に開き、中の缶詰の様子が良く判りました。中を覗くと牛缶が半分位になっており誰かが盗んで持ち出したのだなと思ひました。立哨して中から通路の方を見ていると、時々他部隊の兵達が通り過ぎるのを見ました。歩兵隊の兵が多く、その他工兵隊、輜重隊(しゅちようたい)の兵隊も時々通行するようでした。

丁度十一時頃、四十才位の歩兵隊の一等兵(いつ星)が急に缶の箱に近づき、少し蓋を持ち上げ、蓋のすき間から右手を差し込み、牛缶を一個掴み出し、右ポケットにねじ込もうとしていました。私は横後側から、大声で「一寸待て、貴様は誰の許可を得て入つて来たか、その牛缶を返しなさい」と言うのと、相手はびっくりして私を見ました。私は二等兵で相手の方が一階級上でしたが、私は衛兵であり、任務上問題は無いと思ひ、牛缶を取り上げ、「貴様の部隊名と名前を言いなさい」と命じました。相手は急に弱つた態度で、「私が悪うございました。ほんとに申し訳ありません。出来心です。二度としませんので、どうか勘弁して下さい」と頭を何度も下げま

した。私は相手が年配でもあるし、今度は許すことにし、もう二度とせぬ様に言つて許しました。相手は「申し訳ありませんでした」と、何度も頭を下げて立去りました。

十二時過ぎには、当班の食事当番兵が持参の飯盒入りのカレーライスを食べ、午後は異状のないまま過し、午後四時になり、当班の上野上等兵の引率で川上君が交代員として来ました。私は上野上等兵殿に、「衛兵勤務に



異状ありません」と申し上げ、衛兵の腕章を川上君に渡し敬礼すると、「ご苦労でした」と言われ、やれやれこれで自分の班に帰れると思つていると、上野上等兵殿が「一寸と待て」と言つて、正面の牛缶の箱蓋を持ち上げ、牛缶一個を掴み出し、自分の右ポケットに入れ、「二人共、黙つておれよ、良いな」と言つて、私を連れて倉庫前を立ち去りました。

四 船内盗人代えの恐怖

① 非常用携帯食

門司港で輸送船に乗船時、全兵員に対し一人当り三食分の乾パン(一袋は網袋に小形の乾パン約四十個で中に金平糖入り)が配布されました。これは非常食として、師団長閣下の許可が無ければ、絶対食べてはならぬと言われ、各自はそれぞれ背負袋に入れ、大切に所持していたのですが、出発後三日頃から、朝起床後、枕代りにしていた背負袋が少し小さくなつていのに気付き、袋の口を開け、中身の乾パンを調べたところ、乾パン袋三袋あつたのが二袋になつており、一袋が無くなつていました。川上君は二袋無くなつており、他の兵達もほとんど一袋か二袋無くなつていました。

真夜中に熟睡中に誰かが盗んだのだろう、「全く困つたなあ!」と、被害に逢つた兵達は悔やんでいました。

その様子を見ていた馬屋週番の坂田上等兵殿が「おいお前等、盗まれた乾パン袋は全部で何袋になるか」と尋ね、盗られた者が手を上げ、一袋、二袋と数えてみると総不足数は約三五袋になりました。

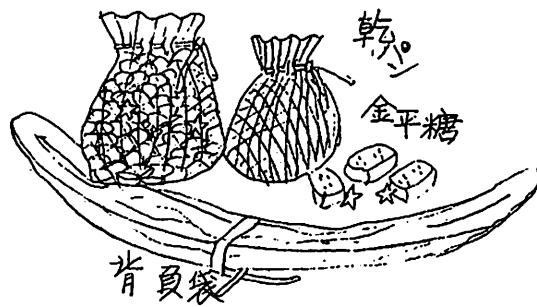
翌朝の朝食後、坂田上等殿が、馬糧袋を背負つて棧敷に帰つて来ました。「おい、昨日乾パンを盗られた者は、この袋の中に乾パンが四十袋入っているから、各自不足分を補充して

おけ」と言つて袋を置いて、再び馬舎に帰つて行きました。盗られた者は不足分を補充できて一同ほつとしました。

後から聞いた話では、坂田上等兵は真夜中に他の馬舎当番兵と共に歩兵部隊の棧敷に忍び込み、熟睡中の兵の枕にしてある背負袋を盗み出し、これを馬舎に持ち帰り馬糞袋に入れて、朝まで隠しておいたとのことでした。

② 二重飯盒調達

我が砲兵隊の各兵に貸与されていた飯盒は、すべて一重の飯盒でしたので、野外演習時や、外泊訓練時に自炊することもあり。この場合、一重飯盒だと炊飯に使うと味噌汁や副食の煮焚には他の兵の飯盒を借りるか、共同で使用するかしな



くてはならず、非常に不便を感じていました。

我々の棧敷の向い側の歩兵隊の居場所となつており、甲板上から各階棧敷前を経て船底まで、魚網梯子がぶら下がっており、歩兵隊棧敷前に釣り下がっている魚網梯子に歩兵隊員の人數分の二重飯盒が約二十個分づつ、束ねたものが十ヶ所位に分けて、ロープで縛り付けられていました。

入隊前に建設会社で薦(とび)職をしていたという上野上等兵殿が、「鈴木二等兵、今夜十一時頃、俺について来い。俺が先に門魚網を登り、飯盒を釣り下げているロープを持って甲板上まで駆け登るのだ。できるか」と言われました。

私は盗むことはとても出来ないと思つたので、とつさに、「上野上等兵殿、鈴木は昨日食事当番の時、船が大揺れで階段を下るときすべつて尻もちをついて、今腰を痛めておりますので、ご勘弁下さい」と言いました。上野上等兵殿は、「そうか仕方がないな、では川上二等兵、貴様はどうか、おれに付いて来い。よいな」と言われました。川上二等兵は、しぶしぶ「はい、やつてみます」と返事をしました。

それ以来、川上君も私も私も夜九時の消灯時間後も眠れぬまま十一時となりました。上野上等兵殿は身支度を整え、川上君を連れて、静かに我が隊の棧敷を出ました。私はじつと行先を見守っていました。歩兵隊にも不寝番が居るので、これに

見付かると大変なことになるのではないかと、ハラハラして観ていました。

二人は船内の階段を降りて一度船底の馬舎に行き、そこまで垂れ下っている魚網の最下部から真上の歩兵棧敷を目指して登りはじめました。私は、どうなることかと、まばたきもせずに、じつと見守っていました。

歩兵隊の不寝番にもまだ見付からぬまま、飯盒の釣り下っている場所に到着しました。上野上等兵殿は右手で腰のゴボウ剣を抜きロープを切りました。そのとき川上君がしたから左手で、飯盒を結んであるロープを握って引張ったとき、カラン、カランと金属製の音がして棧敷内に居た不寝番の兵が気付き、「誰か」と大声で走って出て来て、川上君の右足先を捕まえました。川上君は右足先を振り切るべく、バタバタと動かしている内に左手で掴んでいた飯盒を取り落とし、飯盒は馬舎の馬糧用乾燥藁を被せて隠しました。川上君は不寝番に掴まれた足先の地下足袋が抜け落ちたため、不寝番の手が外れ、上野上等兵共々魚網を登り、無事逃れた様子で、これを見ていた私をはじめ同班の兵達は、捕まらなくて良かったなあ、とホッとしました。暫らくして、川上君と上野上等兵殿が帰って来て、「一時はどうなることかと肝を潰す心地でしたが、助かって良かった」と言っていました。ホッとして皆一

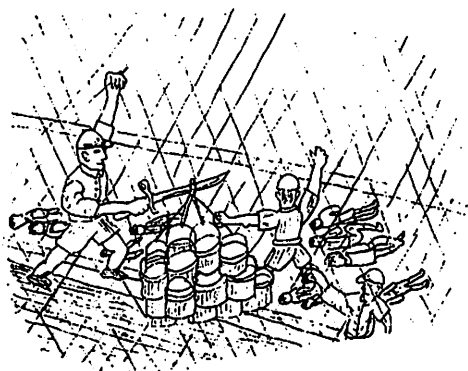
斉に眠りに着きました。

私は次のように神様に「いつもお守り下さり感謝いたします。今日は、上官の命令とは言え、窃盗はしたくありませんので、腰が痛むと嘘をついてお断りしましたことをお許し下さい」とお祈りしました。

③ 軍刀の調達

我が中隊所属の下仕官は伍長から曹長まで約十人で、皆一般兵同様、ゴボウ剣を腰に下げていますが、動員令が出て、戦地に出発の場合は下仕官も軍刀の使用が認められています。丁度、当中隊の棧敷の一つ上の段の棧敷の一面に、どの部隊にも所属していない、内地から台湾の現地部隊に赴任する見習士官だけの約二十名の一団で、彼等の服装はすべて新品で、軍刀も内地で揃えた見事な新品揃いでした。

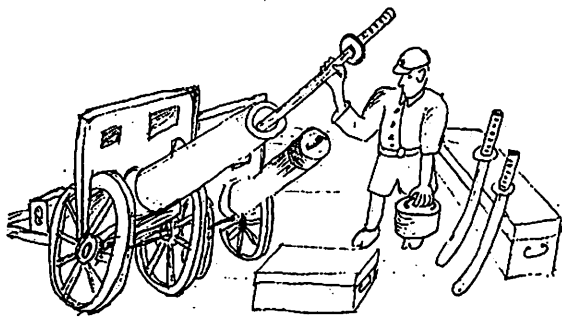
彼等の棧敷前をたまたに通りがかる時など、横の手摺に立派



な軍刀が無造作に立て掛けてあり、我々は目を見張って通り過ぎる有様でした。夜の点呼の後、古兵達が何かコソコソ相談話をしていましたが、夜中の十二時頃、下士官が一人、船底の砲軍の方に先に下りて行き、その後又一人、今度は魚網を伝つて真上の見習士官の棧敷の方の上つて行きました。

私は何事かなと、棧敷から魚網の方をじつと見つめていました。川上君や他の数人の兵も眠つてはいませんでした。しばらくして驚いたことに上の棧敷の端から軍刀が一本、船底の砲軍の方に落下したではありませんか。その内又一本と次々に四、五本は落ちたと思いました。

先に船底の砲軍の所に行った兵が落下した軍刀を受け取り、十糎榴弾砲の砲口の蓋(皮製)を外し、砲身に軍刀を



一本押し込み、蓋をかぶせ、更に落ちて来た軍刀を次の砲口に押し込む等して、四、五本は隠したのではないかと思われ、唯々啞然とし、恐さを感じました。翌朝刀が無くなっているのに気付いた見習士官が軍刀を探し回っていましたが、砲が置かれている所には他部隊の兵は一切立ち入ることは許されず、到底見つけることはできぬだろうし、実に気の毒だなあと思いました。

船内で調達した飯盒や軍刀は、船が入港し、下船の際は、大砲や馬糧と一緒に船から搬出され、他部隊には全く判らざじまいでした。

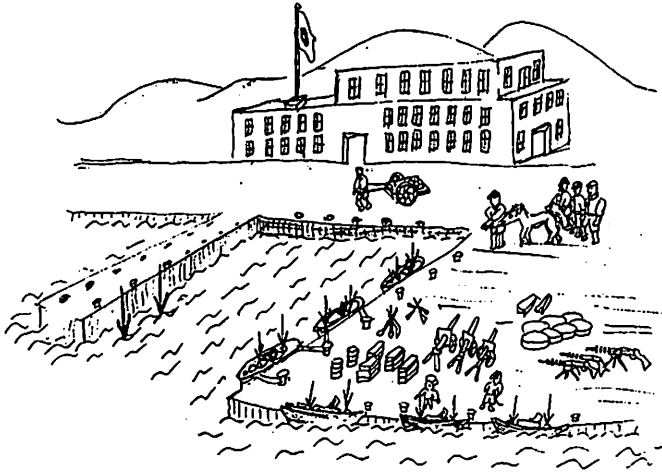
五 台湾、基隆(キールン)港入港

船は門司港を出港してから五日目の朝八時頃基隆港に入港しました。昨日は晴だったのに今日は早朝から小雨が降り、一月ではあるのに気温も比較的暖かく、半袖・半ズボンの服装でも全く寒くなく、門司港を出港する時は褌みぞれが降っていて、あの時の寒さは夢のようでした。ここ基隆は年中の降雨日数は年間日数の三分の二とのことで、ジメジメした感じで、我々は船内地下足袋を履いているので、雨で濡れ梅雨のような気分の悪さを感じていました。

船が静かに接岸する時、左側の岸壁の近くで、商船が一艘

沈没しているのを見ました。船のマストが二本海面上に突き出たままになっていました。多分港で接岸中に米軍の空襲を受け、沈没したのでしょうか。空襲の激しさが想像されました。

(二〇〇三年「ぶどうの木」第三十号)



(十三) 台湾編 I

一 基隆(キールン)港待合室

台湾到着二日目の朝を迎えることができました。わが中隊約二百名の兵隊は、基隆港の駅舎の二階の待合所を仮泊兵舎として、コンクリートの床にゴザを敷き、軍服着用のまま、毛布一枚を使用し、雑のうを枕に一夜を過ごしました。



一月始めとは言え、比較的暖かく、外は昨日から雨が引き続き降っていました。朝食後、中村兵長殿が大声で、「おい、よく聞け、もうしばらくして、皆に乾燥バナナの配給があるそうだ」と言われました。

間もなくして、食事当番兵達が、乾燥バナナの入った木箱を隊の中央に運んで来ました。「今から一人五本ずつ配るので、各自受け取るように」と言って、配り始めました。

私は勿論、他の兵隊も今まで乾燥バナナなど見たことも、食べたこともなく、好奇心を持って待っていました。五本ずつ配られたものの、サイズは長さが十五センチ位、太さは人指し指位、色は茶褐色で、パラフィン紙に包んでありました。皆はしばし眺めていましたが、やがてパラフィン紙を破り、口に入れていました。確かにバナナの味がして、非常に甘く、久しぶりに大好物に巡り会った感じでした。

満州にいた時は、三食以外には菓子は勿論、甘い物など全く食べていなかったのです、ここ台湾では果物は勿論、菓子などもこれから大いに食べられるとの事で、大変期待していたわけです。

次に前田中隊長より、次のとおり通達がありました。「わが部隊名は、台湾第八七二部隊前田隊となった」とのこと。また今日これからの行動予定について、次のとおり説明を受けました。「わが中隊は、午後一時頃の軍用列車で当基隆駅を出発し、今夕に台南市の任地に赴任する。着任先の隊舎、砲廠、馬舎の位置等については、台南駅に到着後に改めて説明する。移動中は各班員は、班毎に班長の指揮によって行動するよう

に」とのことでした。

各兵は出発準備のため、各自の装具や荷物を整理していたところ、一階の待合所から帰ってきた兵が、一階で買ってきたとばかり菓子袋を高く掲げ、「今一階に菓子や果物を売りに来とるぞ」と皆に知らせました。皆はその言葉を聞いて、それぞれ二階から待合所に降りて行きました。

物売りは普通、駅舎内には入れず、中での販売はできないことになっていましたが、数日前からの雨で特別許可が出たとのことでした。物売りはほとんどが女性で、中には幼児を背負って売っている女もいました。

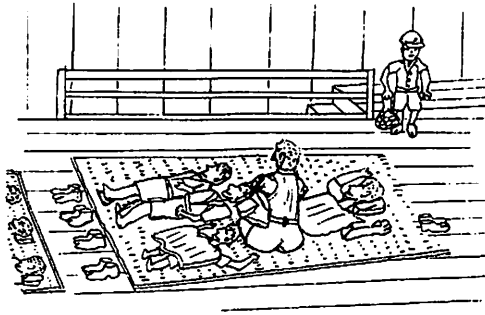
ヤンチョン傘を被り、子供を背負った婦人が、「兵隊さん、このお菓子おいしいよ、買ってよ」、「この菓子、金華糖と言って、砂糖でできていて、とても美味しいよ」と言って、竹の平ザルに入ったお菓子を見せました。傘型の砂糖菓子で、傘の



中心に竹楊枝が刺してあり、赤、青、黄、白の四種類がありました。一緒に買いに行っていた川上君が、「これ一個幾らするの」と聞いたところ、「一個二銭あるよ。これ一人一個ずつ味見していいよ」とのことで、近くにいた兵達は、それぞれ一個取って試食し、「これは美味しい」と言って、ポケット

から一円札を出して「二十個買いたい」と言うと、「兵隊さん、まだおつりの小銭がないよ。小銭で四十銭ありませんか」とのこと。

我々は昨日基隆港到着後に満州銀行券を台湾銀行券に交換してもらいましたが、皆一円札のみのため、小銭の持ち合わせはありませんでした。その兵は、「よし、それでは五十個買うので、色を混ぜて、紙袋に入れてくれ」と言って一円札を渡しました。従って、川上君も私も同様に一円札を出し、それぞれ買いました。さらに五、六人が買ったため、見る間に売り切れと



なりました。他の菓子や果物売りも兵達がそれぞれ殺到し、ほとんど売り切れとなりました。

買い物を終えた兵達は、それぞれ菓子や果物を抱えて二階に帰り、菓子や果物を出し、互に交換して食べ、笑談していました。

二 糧秣(りょうまつ)衛兵勤務

いよいよ軍用列車が台南に向かって出発しました。しばらくして、台湾の最大都市の台北に到着し、さすがに駅舎の大きさ、また近くに見える大型建物や人々の流れなど、いずれも政治の中心都市だけあるなあと思いました。台湾総督府と台湾方面軍最高司令部がある街だな、と思いました。

台北駅を出発した後、同車内の佐藤班長より呼ばれ、次の命令を受けました。「台南駅の手前の永康駅の下り線ホームでの衛兵の勤務を命ずる。駅への引率は石井見習士官殿が指揮されるので、これに従うように」とのことでした。

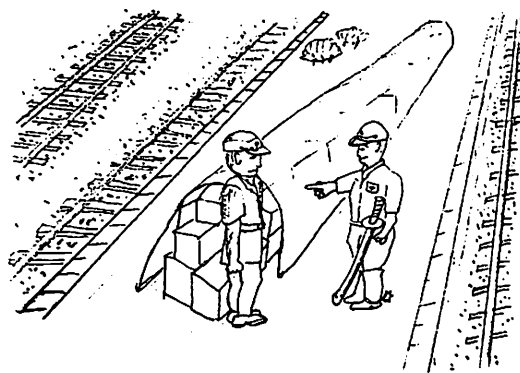
従って、早速私は班長殿より小銃と小銃弾十五発を受け取り、少し緊張しながら身の回りの用意をしました。

夕方五時過ぎに永康駅に到着、石井見習士官殿に付いて下車しました。下りホームには木箱に入った糧秣が約五百箱、段重ねで約五十メートルの長さに並べられ、上からシートが掛

けられていました。

「貴様は、只今から今夜九時まで立哨せよ。九時ごろ本隊から交代要員を連れてくるので、それまで約四時間勤務するように」と言って、前任の歩哨を連れて立ち去りました。私は携帯していた雑のうと背負い袋を体から外して、一番南端の一段になった箱の上に置き、シートを掛けて隠し、次に小銃に玉を五発込め（小銃は一度に五発までしか弾が込められない）、安全装置を施して、右腕の脇に挟み、ゆっくりと糧秣箱の周囲を巡回し始めました。

西側の駅舎の前方には店舗が多く立ち並び、民家もかなり建っていて、台湾人が数人歩いているのが見えました。下りホームの東側は、広々としたニラ畑とサトウキビ畑で、その先二百メートル位には立派な中国風の寺院が見えました。ニ



ラ畑では、ヤンチヨ傘をかぶった男女の農夫が数人働いていました。

何回廻ったか、一時間位巡回した頃、後ろから大声で「兵隊さん」と呼ばれ、振り向くと、駅員が「兵隊さん、ご苦労さんです。これパインジュースです。どうぞ飲んでください」と言って、大コップを差し出しました。私は「ありがとう、早速いただきます」と言って、コップを受け取りました。駅員は「飲んだら、コップは箱の横に置いていてください」と言って立ち去りました。私は喉が渴いていたので、早速いただきました。とても冷たく、パインの味が何とも言えず、コップ半分ほどを飲み、残りは箱の上に置き、シートを掛けました。

夕方六時を過ぎた頃、日暮れとなり、早速腰に吊った帯剣を抜き、銃に着剣しました。衛兵の守則として、夜間に人が近づき不審に感じた時には、誰可（すいか）し、これを三回し



でも何も返事がなく、当方の指示に従わない時は、銃を発射させてもよいことになっていました。

さて、夜も九時を過ぎ、そろそろ交代の歩哨要員が来る頃となり、まだ夕食も食べてなく、空腹となりました。残りのパインジュースも飲み干し、幾分精神的にも疲れてきました。

時々、上りホームに列車が到着しましたが、遂に降りて来ませんでした。十二時頃に駅舎の電灯も消え、上り下りのホームの常夜灯だけが暗く付いていました。規則に厳格な軍隊がどうして交代時間が守れぬのか疑問を感じ、イライラするばかりでした。着剣した銃を小脇に挟み、箱積みの周囲を警戒しながら歩きました。丁度このホームが、入隊当時の行橋駅ホームにそっくりでした。私が入隊する時、行橋教会の方々や町内の方々が行橋駅ホームに見送りに来られた時を思い出しました。列車到着前に、送別の讚美歌が歌われた日のことが浮かんできました。歩きながら、声を出して唄いました。

「神共にいまして、行く道を守り、あめの御糧もて、力を与えませ……」、そのうち午前三時頃となり、大分体も疲れたので、一番北側の糧秣箱の上に腰掛け、銃を肩に立てかけて、うっかり眠り込んでしまいました。夜明け前の五時頃になった頃、「おい、ここには歩哨はおらぬか。誰かいないか」と大声が数回聞こえました。私は腰掛けたまま、「はい、ここに

居ます」と言って、やっと立ち上がりました。

眼前に何処の部隊か分からぬが、少尉の胸章を付けた将校が立っていました。「貴様は歩哨か？今まで眠っていたではないか」「気をつけ！」と号令を掛けられ、私が不動の姿勢を取って立ち上がると、右手で私の顔を何回も殴りました。そして「貴様の部隊名と名前を言って見よ」と命じました。私は次のとおり、「台湾第八七二部隊、野砲兵隊の前田隊、鈴木二等兵であります」と答えました。将校は手帳に記入しながら、「そうか、野砲隊か。俺は歩兵隊であり、直接関係ないが、ここを通りかかって、軍用品の集積場所に歩哨が見えないのはいささかおかしいと思いい立ち寄った」。「理由の如何を問わず、任務は絶対に遂行するように、よいか」と言って立ち去った。口の中が切れたのか、口から唾液と一緒にかなりの血が流れ出しました。

朝八時頃の到着列車で、石井見習士官殿が交代要員を連れてきました。見習士官殿は、「やあ、貴様には申し訳ない。昨日は到着した台南での部隊の設営その他諸準備に追われ、約束の九時に来れなかった。夕食も朝食も欠食させ、重ね重ね申し訳なかった」と詫び、「直ちに交代し、今から駅前の飲食店に連れて行くので、付いて来なさい」。「ところで、お前の頬が腫れているようだが、どうしたのか」と、質問を受けま

した。私は、「はい、昨夜から歯が痛んでいるので腫れたのでしよう」と答えました。

駅前の飲食店に伴われ、「鈴木、何が食べたいのか、遠慮なく言いなさい」。私は「では、チャーハンと中華スープをお願いします」と答えました。石井見習士官殿は、台湾人の主人に注文しました。そして「食事が終わったら駅舎に待っているので、すぐに来るように」と言つて、店主に食事代を支払い、店を先に出て行かれた。私は昨夕から二食抜いていたせいもあつて、チャーハンと中華スープをペロツと平らげました。これを見ていた店主は、「兵隊さん、お腹空いていたのでしよう。もう一杯同じものを作りましょうか。お金は要りませんよ。サービスしますよ」と言われました。私はすかさず、「お願いします」と告げました。食べながら、こんなに旨い焼き飯は今まで食べたことがないような、美味しさに思えました。店を出る時、「ありがとう、大変美味しかった。機会があったら、また来るからね」と言つて店を出ました。駅舎に帰った私は石井見習士官殿の引率で、下りの台南行きの列車に便乗し、台南の本隊に向かつて出発しました。

三 台南市内の本隊に着任

列車は台南駅に到着しました。さすがに南の一大都市だけあつて、建物も大きく、乗客の出入りもかなり混雑していました。丁度、小倉駅を思い出すようでした。待合所では多くの男女が集まつて互いに何かしゃべっているが、これが台湾語と言うのだろうか。中国語とはまた一味違った言葉のようでした。

石井見習士官殿が、売店からサイダー二本を買つて来られ、「喉が渴いたので、君も一本飲みなさい」と言つて、一本を私に差し出されました。「ありがとうございます。戴きます」と言つて受け取り、直ちにラツパ飲みしました。何年ぶりに飲んだのか、格別の味でした。

駅前から部隊本部のある大林区まで約四キロの距離があるとのことで、見習士官殿に連れられ、台南駅より南東方面に歩き出しました。市内の繁華街を通過し、台南から高雄方面に通じる幹線道路を進みました。道路の沿線には、椰子の林やサトウキビ畑、ニラ畑などが続く風景となり、約一時間位進んだ頃、民間の事務所や倉庫・住宅等が立ち並んだ大林区の四つ角に到着しました。

この中隊本部の建物や各班の建物などは、台湾製糖株式会社の社宅や倉庫を軍が借りて、兵舎や倉庫として使用しているものでした。中隊長殿に帰着の報告をすると、隊長殿は「今

度の勤務は大変ご苦労であった。班に戻ったら、十分休養するように」と言われました。下士官殿にも挨拶し、第四班に行きました。佐藤班長殿は、「ご苦労でした。君には昨夕交代要員の派遣が遅れ、本当に申し訳なく思っている。遅れた理由は、兵舎への荷物の搬入・弾薬の運搬・馬舎の設置等に手間取り、ほとんど徹夜となり、朝までかかった。従って、石井見習士官殿に交代要員を差し向けるのが、朝の五時頃となった次第だ。君には本当に申し訳ないと思っている」と言われました。また、私の顔を見ていた班長殿は、「君の右頬が腫れているようだが、どうしたのか」と聞かれました。私は「はい、二、三日前から虫歯が痛んでおります」と答えました。「それはいかんなあ。当大林区の南の方の道路沿いに、台湾の歯科診療所があるそうだ。明日外出して行ったらよい」と言われました。また、中隊本部の山崎曹長殿よりの伝言で、中隊事務室を明日から開設するので、鈴木が帰ったら、私の所に差し向けて欲しいとのことでした。

第四班の部屋に案内され、班内の各兵に挨拶を終え、戦友の川上二等兵に会いました。川上君は「歩哨勤務はご苦労だったそうだね。二食抜きだったとか聞いていたが、とにかく元気で帰隊できてよかったね」と言って、私達の使用の部屋に案内してくれました。六畳三つの内の一つに、班員十名が同居

することになっており、部屋の押入れに私の荷物は川上君の荷物と一緒に整理して置かれていました。川上君にはお礼を言って、糧秣衛兵勤務での一切を話しました。川上君の話では、同室十人にはなっているが、あなたが一晚居なかったように、各種の勤務に二、三人は出るので、結果的には、夜の部屋には実質六、七名位だと思ふとのことでした。

四 中隊事務室再開

朝食後、班長殿の指示により、中隊本部に山崎曹長殿を尋ねました。山崎曹長殿は私の顔を見るなり、「おお帰ってきたか。待っていたぞ。今日から中隊事務室を開設するので、君はこれから毎日、特別勤務のない限り、毎日事務室に勤務してもらいたい。中隊長殿にも承諾を得ており、佐藤班長には伝えてある。満州当時の事務室のとおり処理すればよい。君ならできると思っている。よいな」と言われ、私は承諾しました。曹長殿が「今日は文書類を箱から出して、事務を行いやすいように整理して欲しい。昨日夕方には、机の上に軍用電話も取り付けられているので、連隊本部や他の中隊等への通話もできるので、必要な時は使用するように」とのことでした。従って、文書類の整理や配列は、午前中に完了させることにしました。ついでに曹長殿に、次のようなことをお願いしま

した。「私は昨日から左側の歯が痛んでいますので、午後になつてから、歯医者に行かせていただきたいと思ひます」と願ひ出ますと、山崎曹長殿は「そう言えば、右頬が少し腫れているようだな。痛むのはよくない。今からでも直ぐに行つて来なさい」と言われました。私は言葉に甘えて、直ちに行かせてもらふことにしました。

五 歯科医院での受診

午前十一時頃、事務室用の自転車を借りて、大林区四つ角から南に約二キロ位行くと、王歯科医院に着きました。早速受付の女性に手続きを取つて待合室に入ると、すでに男女十数名の患者が椅子に掛けていました。この状態では、何時間待たされるかなあと周囲を見回し、受付窓口の横壁に王先生の卒業証書が額入りで掛けてあるのが見えました。これを読んで驚きました。王先生は小倉区にある九州歯科医学専門学校卒でした。私は台湾で、日本の歯科医学校で学んだ台湾人の先生から治療を受けるとは……と感激しました。

そして受付から五分もかからぬ内に治療室のドアが開いて、王先生が顔を出して、患者一同に台湾語で何か言つていますが、その後で、「兵隊さんの鈴木さん、どうぞ中にお入りください」と言われました。中に入ると、先生は「椅子に掛けて

ください」と言われました。王先生は日本語がさすがにお上手でした。次に私に、「当院では、兵隊さんには一般患者さんより優先して、診療してあります」と言われました。

早速、診察が始まりました。先生は口の中を口内鏡で見えていましたが、「あなたは

右頬をかなり強く殴られたのではないですか。

口内に裂傷を起こしています。同時に虫歯部

が折れています。したがつて、今から虫歯の

治療をし、後でうがい薬を投薬しましょう。

当分四、五日位通院してください」とのこと

でした。虫歯部分を少し削りますと言われ、

部屋の隅に置いてあつた足踏み式ハンドグラインダーを引き寄せ、私の口を開かせ、足で踏みながら口中にグラインダー

を差し入れ、虫歯部に当てて削り始めました。痛みと共に足踏みの動きが口に伝わり、顔が大きく揺れて、とても我慢が



できない状態でした。歯の穴に薬を含ませた綿花とゴムを詰め、やっと今日の治療が終わりました。が、明日も来院することを思うと、苦になりました。

治療後、先生に「先生は九州歯科医学専門学校を卒業されたそうですね。学校の場所は北九州の小倉市にありますね。」

私は小倉から日豊線で少し南にある行橋町に住んでいました」と言いました。先生は「それは大変懐かしいお話ですね。」

私は半年に一度くらい学友数人と別府温泉に行きましたので、行橋駅はよく覚えていますよ。確か同級生に行橋から来ていた生徒がいたと思いますので、同窓会名簿を調べてみましょう」と言われました。また「私は学校入学した時、一緒に入学した友人と二人で学校近くの清水町の民家に六年間卒業するまで下宿し、学校に通っていました」と言われました。私は「先生とゆつくりお話をしたいと思いますが、他の患者さんにご迷惑をお掛けしてはいけませんので、今日はこれで失礼します」と挨拶し、受付で薬をもらい、治療費を支払って、診療所を後にしました。

(二〇〇五年「ぶどうの木」第三二号)

十四 台湾編 (二)

一 わが部隊の赴任先

私が入隊した当時(昭和十八年)、日本から満州国に派遣の陸軍部隊は、その通称を関東軍と呼んでいました。

そして、私の配属された隊は、満州二二二部隊(師団名)と呼ばれ、総兵力数は約一四〇〇〇名で、その内訳は、歩兵連隊員約六〇〇〇名、砲兵連隊員約四〇〇〇名、工兵連隊員約二〇〇〇名、輜重(しゅちよう)連隊員約二〇〇〇名で、これらの各連隊は、台湾到着と同時に、兵士の居場所(兵舎等)や各兵器・弾薬の収納場所として、当該地で製糖会社を経営していた台南市大林にあった台湾製糖(株)の未使用中の工場や倉庫を、また空き宅宅を陸軍が同社から借り受け、使用させてもらっていました。

私の所属は、この砲兵連隊の第二中隊(前田中隊)で、兵数は約二〇〇〇名でした。従って、各中隊毎に現地大林地区の台湾製糖工場の敷地内の割り当ての場所に配置されました。

前田中隊組織

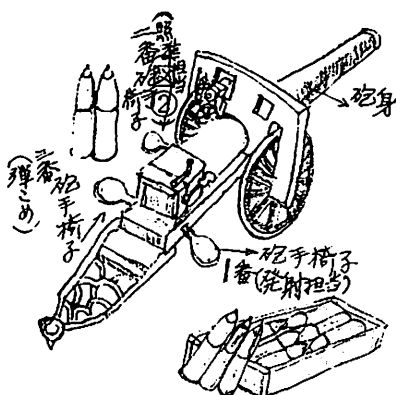
	第一分隊	四〇名	砲二門
	第二分隊	四〇名	砲二門
	第三分隊	四〇名	砲二門
	第四分隊	四〇名	砲二門
その他	四〇名	………	観測・通信
計	二〇〇名		砲八門

二 大砲は旧式の改造品

わが隊の砲は、その名称を「改造三八式野砲」と言われ、明治三八年製で、当時は日露戦争に使用されたものを、近年改造したものとのこと、

砲筒の口径（直径）は十センチのものとは十センチのものとの二種類あり、十五センチのものは野戦重砲と言われている。当中隊分は八門全部が口径十センチの普通の野砲でした。

改造三八式野砲 (明治三八年製)



三 武器、弾薬の引取・運搬

佐藤班長殿より、夜の点呼時「明日は朝八時から当隊を出発して、高雄港に武器・弾薬を受け取りに行くので、留守番兵を残して全員出発する。今回の到着便は内地からで、武器は小銃・機銃・弾薬類で、小倉の陸軍補給廠から送ってきたものだ」とのことでした。私も兵員一二〇名の中に含められ、明朝、高雄港に向け大林を出発することになりました。

四 事務室勤務を命ぜらる

翌早朝、事務室の山崎曹長殿に呼ばれ、「君は、今日は事務室勤務をして欲しい。事務処理が溜まっているので、加勢を頼む。皆と高雄には行かなくてよい。連隊本部に提出のための文書整理のためだ。佐藤班長や中隊長殿にも承認を得ているので、君が一段落したら、事務室に来てくれ、よいな」と言われました。従って、今日の重作業には参加しなくてよいことになりました。

中隊長殿以下全員が高雄港目指して出発し、留守の兵約十名が中隊に残っていました。私は皆と別れ事務室に行くこと、山崎曹長殿が「先程、連隊本部の大塚准尉殿から君に電話があり、鈴木が来たら電話させます」と答えてある。これからすぐに電話しなさい」とのことでした。准尉殿は、「おお、鈴木

か。実は事務処理で分らぬ事が可なり出てきたので、また君に習いたいと思ひ電話した。君の手のすいた時に連隊本部事務室に来て欲しいが、よいか」。私は「よく分かりました。今から相談し、今すぐにご返事します」と答え、直ちに相談し、「午前十時までにお伺いします」と答えました。さらに山崎曹長殿は、「大塚准尉殿の用件が終わったら、帰りに、先日君が歯科治療に行った歯医者者に治療に寄ってくるがよからう」と、私にご配慮をいただきました。「また、連隊本部まで可なりの距離もあり、馬に乗って行きなさい」と言われました。往復の時間的にも助かると思つたので、乗って行くことにしました。

また、「君の短靴では乗馬は無理だから、おれの長靴を履いて行きなさい。ちようど、そこに脱いで置いてあるので、合わせてみる」と言われました。私は早速履いて見たら、丁度合つたので、「明日は、これをお借りします」と答えました。山崎曹長殿は、「君が連隊本部に着いたら、大塚准尉殿にくれぐれもよろしくお伝えください」と言われました。

五 乗馬での外出

次の日、朝食後九時から中隊員約一二〇名は、各小隊長の引率のもと、高雄港目指し出発しました。残留兵は約十名ほどで、留守の中隊の警備に当りました。私も九時三〇分頃、

乗馬にて中隊を出発し、連隊本部に向かいました。

大林を目指し国道を進んで行くと、前方から歩兵隊の一個分隊約十名ほどが伍長殿の引率により、こちらに向かつて歩いて来ました。私は馬上から、すれ違い時に、私が先に敬礼をしようと思つていましたら、引率の伍長殿が「一同、歩調を取れ！」と号令を掛けられました。そして、いよいよ近づいたとき、今度は「かしら右！」と号令を発し、馬上の私に先敬礼をされました。並んで足並みを揃えていた兵達も皆、私の顔に一斉に注目

しました。私は仕方なく貫禄をつけて答礼し、急いでその場を通過しました。歩兵を引率の伍長殿が、馬で行く私が、まさか二等兵だとは思わなかつたのでしよう。しかも、乗馬用の長靴を



履いているので、将校と見間違えたのではないかと思ひ、馬上で苦笑しました。

連隊本部に到着し、正門衛兵所で用件を述べ、馬を預け、本部事務室に大塚准尉殿を訪ねました。准尉殿は「やあよく来てくれたね。ありがとう。君もお元氣そうで何よりだったね」。

「さて、今度の人事異動で、当連隊からは将校を含め、約五十名が内地の各部隊に転属することになり、これらの兵の功績名簿と戦時名簿を整理して、転任先の部隊に送らねばならなくなつた。従つて、君にまた記載方法を習いたいと思うので、よろしく頼む」とのこと。私は「兩名簿の整理は何日頃まで出来ればよいのですか」と尋ねました。大塚准尉殿は、「今日を入れて、あと十日くらいしかないが」とのこと。私は、「それでは、その五十名分の名簿を私がお預かりして、少なくとも今日から七日後位までにお届けしましょう」と言いました。准尉殿は、「いつも君に助けてもらつて申し訳ない。君の帰りに五十名分の名簿を揃えて革鞆に入れて預けるので、よろしく頼む」と言われました。そして当番兵に、「二名分の昼食を用意してくれ」と言われ、「何もないが、昼食を一緒に食べてから帰ってくれ」と言われました。私は遠慮なくよばれました。食事中に准尉殿は、私に「今度、来る三月三日に当連隊本部で、今年度の幹部候補生の試験があることになつてゐる。受験生

名簿に君の名前もあつた。とにかく、頑張つて是非合格するように」との励ましの言葉をいただきました。

六 歯科治療

昼食後、大塚准尉殿に挨拶して、名簿入りの革鞆を預かり退室し、台南市大林の王歯科医院に向かいました。玄関横の八ツ手の木に馬を縛り付け、受付で受診手続きを終えました。受診患者はすでに約二十名くらいに見えました。軍人優先の取り扱いから間もなく名を呼ばれ、診察室に入りました。

早速、先生から前回の治療後の状況を聞かれた後、「鈴木さん、先日私が診療終了後自宅に帰つて、小倉時代の歯科医専の同窓会名簿を見つけました。早速、同級生欄を調べて、やつと見つけ出しました。その方は行橋町（現在は市）の魚町で、現在も歯科医院を開業している田中一郎君で、数日前に彼に手紙を書き、その際鈴木さんの事を書いておりますので、その内、私の所に返事がくると思ひます」とのこと。

私は「田中先生には私共一家が歯科治療で大変お世話になり、特に私は入隊前まで治療でお世話になりました。また祖父が当時、謡曲をやつていまして、田中先生は友人の方数人と一緒に来られ、家で謡曲の練習をされておられました。従つて、祖父とは特に実懇の間柄だったようです」と話しました。

さて、私の治療も終り、まだ患者さんも残っておられるので、今日はこれで失礼しました。午後四時ごろ帰隊し、山崎曹長殿に帰着の挨拶をしました。山崎曹長殿は、「それはご苦労でした。功績名簿等の整理は大丈夫か？」と心配されていましたので、私は「大丈夫です」と答えました。

七 武器類運搬中の被爆

中隊帰着後、山崎曹長殿に帰着の挨拶と連隊本部でのことを報告しました。山崎曹長殿は、「それはご苦労でした。大塚准尉殿にはわが中隊は大変お世話になっているので、できる限りの手助けをしてやって欲しい」と言われました。さらに山崎曹長殿は、「今日は君が居なかつた間に、大変な事があつた。それは午前十一時頃、高雄港に武器や弾薬を受け取りに行つた兵達が帰路、屏東(へいとう)の山路に差し掛かつたところ、米軍機の空爆を受け、大砲その他弾薬等が被爆し、その時、運搬中の兵の内約三十名が被爆し、負傷者が出る有様でした。直ちに被爆者を台南陸軍病院に緊急入院させ、残りの武器・弾薬は各隊でそれぞれ整理搬出したが、大変だつた」との事でした。

「明日は入院中の負傷兵の手術後の輸血のため、各中隊から輸血要員が病院に向くことになっている。午前九時頃、

台南陸軍病院に輸血のため約五十名行くことになっている。A型の者を優先している」とのことでした。私は「自分もA型ですから、病院に行く時には、私も参加させて下さい」と伝えました。「君も班に帰つたら話があるだろう。では今から帰るがよからう」と言われ、早速退室しました。

八 台南陸軍病院での被爆

翌朝(三月二日)九時頃、連隊本部に各中隊より、輸血要員が集合し、私も第二中隊の一員として、その中に参加しました。各中隊からも、引率してきた下士官一人と衛生兵一人が付いて来ていました。一同は直ちに出発し、やっと台南陸軍病院に到着しました。

昨日被爆、入院した兵が收容されている病棟に案内を受けました。病棟はほとんどが木造スレート葺の平屋建で、一間幅廊下の横に大部屋(十六ベッド)一部屋と小部屋(四ベッド)二部屋、診察兼治療室一部屋、その他の小部屋(医療材料等収納)二部屋で、以上が一病棟一棟の内容でした。

負傷兵の様子は思っていたよりひどく、ほとんどの人が腹部に弾を受け、内臓の手術を受けた者、足を負傷し、左足の切断手術を受けた者等、大部分の者が輸血を受けていました。

一番廊下に近いベッドに寝ていた患者は、私と同班の同兵の高林満州(みつくに)君(二等兵)でした。

彼は下腹部を負傷し、大腸の手術を受けたと言っていました。

目下輸血中で、

「昨夜は一晚中痛んで、ほとんど眠れなかったよ」と

言っていました。

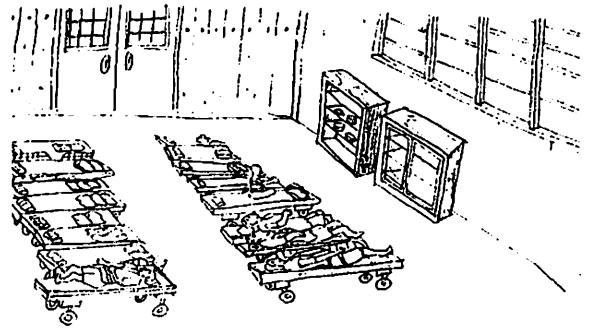
午前十一時頃、やっと

第一回の採血が行われることになり、我々の

中からA型の者を後回しにして、二十名が採血室に呼ばれました。残りの者は、私を含め午後からの採血になるとのことでした。

十二時近くになり、我々輸血要員に対し、病院より昼食の弁当が配られました。皆は廊下の椅子等に腰掛けて弁当を戴きました。

十二時三十分頃でした。病棟の外庭の方向から大声で、「空襲警報！」と数回叫ぶ声が聞こえました。と、しばらくして、今度は「退避！退避！」の大声がしました。食事中の我々は、この病院の防空壕がどこにあるかも分からず、廊下の椅子に



木造スリヤ 16名收容病棟

腰掛けたままでいました。

爆音がほぼ頭上に差し掛かった時、上空で「シャー・シウルシウル」という音が聞こえてきました。私は満州で大砲の実弾射撃訓練をした時を思い出し、大砲を発射させた時に砲口から弾丸が飛び出し、遠くへ飛び去る時の「シウルシウル」という音とそっくりの音だったので、これは爆弾落下の音だと気づき、私はとっ

さに「伏せろ！」

と大声を出し、

一番近い高林君の寝台の下の蚊

帳の中に伏せて

潜り込みました。

と同時に、無数

の爆弾が落ちて

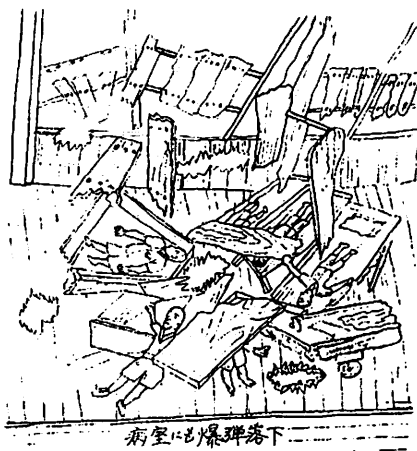
来ました。

私はしばらく

伏せたまま、無意識の

内に過ごしていました。しばらくして、ひよっと気づくと、

病室の天井や横壁が破れて私の頭や体の上にかぶさっていました。これらを手で払い除き、私がかぶっていた高林君の寝



病室にも爆弾落下

ていた寝台のないのに気づきました。高林君は寝台ごと一緒に飛ばされた様子で、姿は全くありませんでした。

さらに、今まで昼食を共にし、廊下の椅子に腰掛けていた輸血要員もほとんど被爆し、死亡しました。私は左足の付け根(腰骨)に弾の破片が当り、かなり出血し始めていました。

すると、左横から声がして、「鈴木、助けてくれ!」と言われ、左横を振り向くと、何と中隊から我々を引率して連れてこられた第三分隊長の高良伍長殿でした。よく見ると、両腕が肘の付近からちぎれ、出血がひどく、さらに後頭部にも弾が当たり、かなりの出血をしている様子でした。私は止血する材料はないものと周囲を見回すと、横の廊下側の右隣の小部屋が医療品収納部屋で、ガラス戸が破れて、小型の木箱が廊下に数個転がり落ち、その内の一箱の蓋が開いて、中からガーゼや包帯が飛び出ていました。私は左足が被弾のため全く動かず、右足のみで四つんばいに這って行き、木箱からガーゼと包帯を取ってきて、高良伍長殿の両腕に止血しました。しかし、それから五く六分過ぎた頃、急に意識がなくなり、遂に絶命されました。誠に残念でした。

それからしばらくして、病院の衛生兵や看護婦さん方がそれぞれ担架を持参し、死傷者共々運び出し、病棟横の空き地に急ごしらえのテント張り収容所に、私も一緒に運び込まれ

ました。

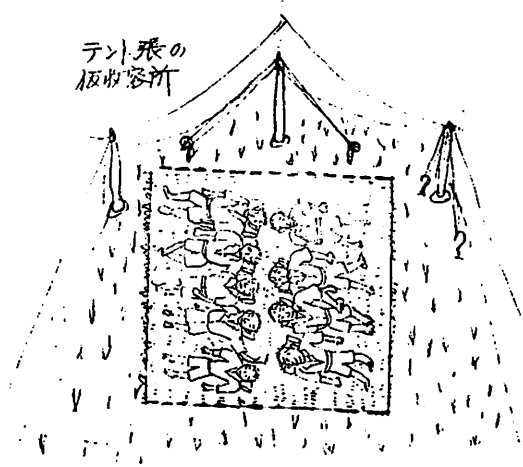
九 麻酔薬無し で手術

しばらくして軍医殿の回診があり、私の左足も診察され、左足の付け根(大腿骨付近)に爆弾の破片が入っている

ので、摘出手術を行なう必要があるとのこと。私の手術の番が来たのは、午後三時ごろでした。

軍医殿は、「今から始めるが、残念ながら薬品庫も被爆し、薬品類、特に麻酔薬がほとんど被弾破壊したため、使用できなくなりました。従って、麻酔薬なしの手術で少々痛いと思うが、我慢してくれ。なるべく早く終わらせるよう努力するので、頑張ってくれ」と言われました。そして、衛生兵四人が来られ、動かぬように足や腰、手などを押さえつけられ、軍医殿がメスで切開し始めました。

メスで切つては、ピンセットで中に入っている破片をつまみ出していました。その内、軍医殿が「今まで全部で破片七



個を摘出したので、今日はこれで止めることにしよう。

もし先で万一

残っている破片

でも見つければ、

その時はまた摘出

手術もできるので、

今日はこれで終わ

ることにしよう」

と言われました。

その間、約二時間

位かかったと思わ

れました。

私は顔から脂汗を流し、痛みをこらえて来ましたが、これで手術は終わったと思い、一応ほっとしましたが、

夕方になり、各中隊から、各隊長殿外幹部がそれぞれ来院され、状況調査と被爆者の見舞いと遺体の引き取りに来られました。私の第二中隊からも、前田中隊長殿をはじめ幹部が来院されました。中隊長殿より、「今、軍医殿から君の手術の事をお聞きしたが、麻酔なしでの手術をよく頑張ったな。完



全に弾を取り除いたとのことで、あと十日くらいで退院できるだろうとのこと。まあご苦労だったと思うが、これからも十分に療養してくれ」と言われました。

当第四中隊の死亡者は、高良伍長殿を含めて十三名で、遺体は直ちに中隊に運び、明日、中隊葬を行なう予定とのことでした。私達負傷兵は、テント張りの仮設病床に收容され、動きもままならず、従って、明日の中隊葬にも出席不可能でした。

「わたしは常に主をわたしの前に置く。

主がわたしの右にいますゆえ、

わたしは動かされることはない」(詩篇十六・八)

翌朝九時過ぎ、中隊から山崎曹長殿が、連隊本部事務室の大塚准尉殿を案内して、わざわざ私のお見舞いに来られました。大塚准尉殿は、「君が病院で空爆に会い、負傷したと聞いて驚いた。早速顔を見に来たが、命の別状なく、比較的元気そうで安心した。中隊に行った時に山崎曹長に頼んで連れて来てもらったが、ほんとはよかったです。これからは十分治療に専念してくれ」と言われました。

次に、「先日君に預けた五十人分の書類だが、療養中の君にこれ以上迷惑はかけられぬと思うので、今日、山崎曹長とも相談し、私がいったん持ち帰りたいたいと思ってる」と言われ

ました。私は大塚准尉殿に、「これはここに置いて行って下さい。私が治療の合間に整理記入して、期限内には必ずお届けします。ご心配はいりませんので、ここに置いて行って下さい」と申し上げました。大塚准尉殿は、「そうか、それでは君の言葉に甘えて置いて帰ろう。そうしてもらおうと、私は大変助かるからなあ。君は途中であまり無理しないように」と言われ、名簿の入った革鞆を私の枕元に置いて帰られました。

翌朝の回診時、軍医殿は負傷部の治療をしながら、「この傷は、おそらくあと十日位でよくなると思うので、次の回診時に退院日を決めよう」と言われました。

十 弾を受け止めたベルトと油布缶

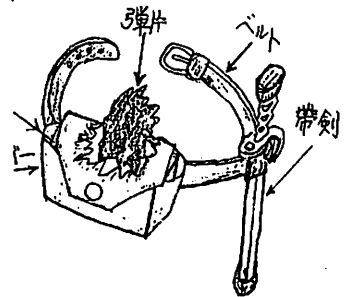
軍医殿は私の診療が終わり、隣の病床の患者さんの所に移動しようとされた時、私の病床横の柱に掛けてある私の帯剣の付いたベルトをご覧になり、このベルトにはめてあった油布缶に断片(かなり太いもの)が当たり、缶の中にめり込んで缶が押しつぶされているのを見つけられ、「君が負傷した時に、別の破片が油布缶に当たり、缶が破れ変形したが、これはおそらく、缶とベルトがクッションとなり、破片が缶やベルトを貫通できなかったために、君の腹部はこれで守られたのではなからうか。貫通していれば、おそらく君は即死していた

だろう」と言われ、その変形した油布缶を何度も指先で触られていました。

「主の恵み深きことを
味わい知れ。」

主により頼む人は幸いである(詩篇三四・八)

防弾になった油布缶&ベルト



十一 幹部候補生試験受験の欠席

三月三日となり、今日は連隊本部で行なわれる幹部候補生の試験日だと思いましたが、入院療養中のため、行くことはできませんでした。過去に、私が中学四年から陸士に受験し、合格した時、入学二日目の健康診断で、軍医殿からレントゲン写真の前で、「君は現在肺結核に罹っているので、このまま学校に置く訳には行かない。早く郷里に帰って、速やかに結核療養をするように。後で事務室に手続きさせるので、帰郷の旅費を貰って、明日帰郷するように」と言われ、さすが郷里に帰ったことを思い出しました。母に連れられ、小倉記念

病院の内科医師に受診の結果、レントゲン上からも全く異常を認めないとのことで、学校での診断ミスだろうとのことでした。従って、当時は中学五年に再度入学を許されたものでした。今回も受験に縁がないのかなあ、と諦めざるを得ませんでした。

しかし、療養中の暇を利用し、大塚准尉殿から頼まれ預かっている功績名簿と戦時名簿の記入整理ができました。また、数日後の退院も許されました。従って、早速大塚准尉殿に電話で名簿整理完了の旨を報告し、その結果、近日、中隊事務室に受け取りに来られるとのことでした。

毎日の治療のお陰で、腰の痛みもほとんどなくなり、歩行も杖なしで、ビッコも引かずに歩けるようになりました。

数日後、連隊本部から大塚准尉殿がわが中隊に私を訪ねて来られました。私は直ちに預かっていた革鞆の中から五十名分の功績名簿と戦時名簿を出し、整理記載の内容をそれぞれ説明し、ご理解をいただき、一式お渡ししました。

大塚准尉殿は、「今度は君の療養中にもかかわらず、大変なご苦労をお掛けした。有難う。先でまた何かあったら相談に乗って欲しい」と言われました。そして、一緒に連れてきた連隊事務室の上等兵に指示し、用意して持参されていた私への見舞品と土産品を渡してくれました。私は早速お礼を申し上げ

げ、有難く戴きました。それから准尉殿は、「もう一つ、伝言をお伝えしたい。それは、私がここに出発時に、村上大隊長からの依頼で、『前田隊の鈴木二等兵に、明日の午前中に私の所に来て欲しいが、何時頃来れるか、聞いて欲しい』と依頼を受けた」と言われました。私は早速山崎曹長殿にその旨を伝え、十時頃までにお伺いする旨を伝えました。

十二 幹部候補生試験問題用紙の提出

翌朝点呼・朝食後、山崎曹長殿に馬を借用して出発する旨の挨拶をし、連隊本部に向かいました。そして、事務室の大塚准尉殿に早速来た旨の挨拶をして、十時ごろ大隊長室を訪ねました。

村上大隊長殿は、「ああよく来た。ここに掛けなさい」と言っ、自分の机の前側に椅子を持ってこられ、私に掛けさせました。「実は先日(過る三月三日)試験当日、君が欠席していたので不審に思い、前田中隊長に尋ねたところ、君が台南病院で被爆し、そのまま入院していると聞いて驚いた。また先日は退院したようだ聞いたので、もし今日、私と逢えるならと思い、聞いてもらった」。今日は久しぶりに君の比較的に元気そうな顔を見て安心した。ところで、今日来てもらったのはほかでもない。君が先日の試験に欠席したのは業務上

の負傷のためで、私事からではない。従って、この用紙に私が言うとおりに記載して欲しい」と言つて、机の引き出しから三種類の試験問題用紙を取り出し、私の前の机の上に並べられました。

私は早速置かれた試験問題用紙をそつと見ました。一枚目の第一問を読みました。第一問は、軍人勅諭の第一項、「一つ軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」について、その全文を記載せよ、など以下七問がありました。今からこの問題を書くとなれば、相当の時間がかかり、しかも三枚あるので大変だ、と思つてみると、村上大隊長殿は、「君は、この問題を今こゝで回答しなくてよろしい。用紙三枚の、それぞれ右下の氏名欄に君の名前だけ書いてくれ」と言われました。

そして、名前を書き終わった三枚の用紙を受け取られると、「これでよい。私はこれでホツとした。前にも君に話したとおり、君の受験については、君が入隊した時から、安藤利吉師団長閣下より、前田隊の鈴木二等兵の面倒を見てやつてくれ、幹部候補生試験も受けることになつていたので、よろしく頼むと依頼されている。幸い今回の試験は、自分(村上大隊長)が試験の総司令を命ぜられてるので、君に来てもらつて、答案用紙にサインをしてもらつた。後十日もすれば合否が出る。以上だ」とのことでした。

私は、「安藤師団長閣下が私のことを世話されるのは、どうしてですか？」と質問しました。村上大隊長殿は、「それには私にも分からぬが、師団長閣下は君のことには相当力を入れておられるようで、その事を、私がどういふご関係ですか等と細かくお尋ねする訳にはいかんからな」と言われました。

「それから、君のことを確認しておきたいが、受験者の願書に添付されている書類を見せてもらったが、君の出身地は福岡県の行橋町(現在は市)で、中学は地元の豊津中学校卒業となつていた。実は私も地元の豊津町出身で、学校も豊津中学に行き、それから陸士に行った。私は中学の同級生には行橋から来ていた生徒が多かつたが、特に行橋町の行事では田原・白川・細野君などが来ていたが、君は知らぬかね」。私は、「はい、よく知っています。私共は通学には、豊津駅まで行橋から田川線で列車通学をしていまして、田原・白川・細野先輩ほか可成りの生徒と一緒に並んで通つていました」。『そうすると、大隊長殿は、私より四歳年上になりますね』。村上大隊長殿は、「そうなるかなあ。同級生だった連中はみな、成績優秀だったね！白川君は第一高等学校から京大に行ったし、田原君は父・姉が医者のため、阪大医学部に行った。また細野君は戸畑の明治専門学校に行った」。『君とは先輩後輩の仲であるから、とにかく体に注意して頑張つてくれ。これから何でも

困ったことがあったら、俺に言ってくれ、よいな」と、身に余るお言葉を戴きました。

十三 幹部候補生試験結果発表

その後、十一日位経過した日の朝礼時、前田中隊長殿から、「過日行なわれた幹部候補生試験の結果発表が連隊本部で行なわれたので発表する。わが中隊分は次の通り、まず甲種に合格した者は、第四班の鈴木二等兵と同班の山川二等兵の二名である。なお、山川二等兵は経理部のため、内地の陸軍経理学校に入学することになる。また、鈴木二等兵は台北の予備士官学校に入学することになる。次に、乙種に合格した者は、第一班の小田二等兵ほか六名(氏名省略)である。乙種の六名は連隊本部で合同教育が行なわれる。以上!」と発表されました。

この時、私は思いました。規律に厳しい軍隊で、私のように特別扱いを受けるとは、前代未聞ではなからうかと。私と一緒に合格した川上君は入隊以来の戦友で、彼は長崎高商卒業後、三菱重工長崎造船所の経理部に勤務していた方で、私より四歳年上で、将来は主計将校になられる方だと思いました。

朝礼終了後、皆はそれぞれ分散し、各班に帰りました。私

も四班に帰ってくると、皆が私に、「鈴木二等兵、おめでどう」と言われ、本当に合格したのだなど、やっと実感を味わいました。また、今までに時々私をいじめていた上野上等兵殿や数人の古参兵などが近寄ってきて、「今後よろしく頼むよ。過去には君を殴ったこともあったが、こらえてくれ。君が憎くて殴ったのではない。君に気合を入れ、立派になってくれるよう願うてのことだ。今後は、おれ達のことを本当によろしく頼むよ」等と言われ、私に何度も頭を下げられました。

そのうち消灯時間となり、皆がそれぞれ就寝しました。私は今日一日を無事に終えたことへの感謝のために、讚美歌を唄い、聖句を奉じ、お祈りをしました。

○ 讚美歌四〇五番

「神共にいまして、行く道を守り、

天の御糧もて、力を与えませ……」

○ 聖句 詩篇三編

「主は私の牧者であつて、私には乏しいことがない。……」

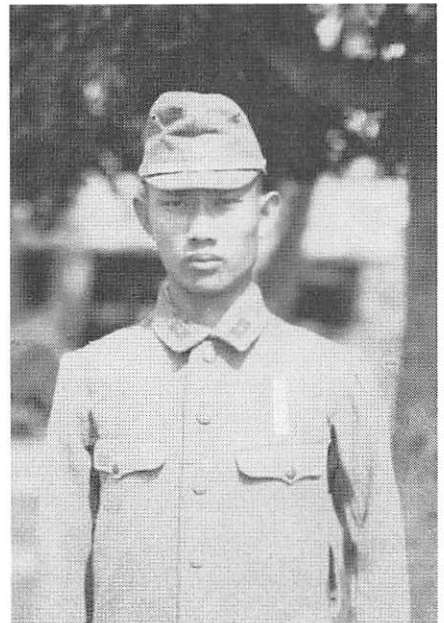
○ お祈り

「わが敬愛する天のお父様、常に私を見守り、勇気を付けていただきまして感謝いたします。過日の台南陸軍病院での被爆の時にも、多くの死傷者が出ましたが、私は

奇跡的に助けられました。これも貴方が常にお守りいただいている賜物だと感謝いたします。これからも困難が続くと思いますが、どうぞ貴方の御力により、お守りくださいませよう、お願い申し上げます。この願いと感謝を、尊き主の御名により、感謝してお願い致します。アーメン」

(二〇〇七年「ぶどうの木」第三二号)

※ 兄の軍隊中の写真は、次の一枚しかありません。写真の裏には「十九年十月三日、西部第五一部隊明治神宮社前にて写す」と註書きしてありました。



「我が思い出」は、その後も続く予定でした。台湾時代もまだまだ書く事は沢山あり、本人もそのつもりであったと思いますが、残念ながら兄の病気によって、第十四編をもって終了し、貴重な体験は歴史の中に埋没してしまうことになりました。

しかし、このまま中途半端に終わるのも惜しいと思い、内地復員後の歩みについて、奥さんや娘さんの記憶を頼りに、編集者においてまとめさせていただきました。

四 台湾から復員後の歩み

(一) 復員

第二次世界大戦は日本の敗北によって昭和二十年八月十五日に終戦となり、戦地の兵隊は逐次内地に帰還することになった。兄は一足遅れた昭和二十一年三月に、台湾から無事日本に復員することができた。遅れた事情は残務整理があつたのではないかと思われるが、はっきりは分からない。

しかし今思うに、もしあの時、台湾に行くことなく、そのまま満州に残っていたら、ソ連軍の急襲により多くの戦死者が出、あるいは生き残っていたとしても、多くがソ連に抑留されたことを思うとき、神様の不思議なお取り扱いがあつたとしか思えない。

三年ぶりに郷里行橋の自宅に帰った時、ほとんど寝たきり状態だった祖母が、起き上がって抱きついたという。兄にとっても、家族にとっても、どんなに大きな喜びだったことだろう。留守家族として一日とて無事を祈らない日はなく、その祈りに答えられて、息子が、孫が元気に帰ってきたことに、どんなに神に感謝したことだろう。(祖母はまもなく召されたとのことである。)

(二) 就職と結婚

復員後、早速、就職問題となったが、安川電機行橋工場の工場長が父と同郷(久留米市松崎)だった事から、同工場に就職した。昭和二十一年三月二五日の事である。

これと併せて結婚話も進み、同年七月十五日に千恵子姉と結婚した。新郎二一歳、新婦二十歳の若さである。

そもそも二人の出会い、千恵子姉が女学校卒業後、挺身隊で一幹兄と同じ小倉造兵廠の、しかも同じ庶務課に属していたということがあつた。しかし、二人は部屋も別ということもあつて、顔を会わせた時に挨拶する程度で、付き合いということは全くなかった。

まもなく一幹兄は招集され、千恵子姉も戦況が悪くなるとともに小倉造兵廠の中樞部が米軍の攻撃を避けて日田市に移転したことに伴い、一家は日田市に疎開していた。

終戦後も、功績班ということで残務整理に従事していた時に、小倉の上役からいきなり手紙が来て、一幹兄との結婚話を言ってきた。一幹兄の復員を知って、お嫁さんの世話を引き受けたのだろう。手紙には鈴木家の事が書かれていたが、とても自分の家と釣り合いが取れないと、母(父は姉が女学校に入学した年に召天)と相談してお断りしていた。

ところが、それから間もないある日、その上役が予告もな

く来宅し、今日は娘さんを連れて帰ると強引な話に断ることもできず、結局承諾し、二、三日後に、文字通り裸一貫何も持たずに、行橋へ嫁いだのであった。

披露宴は自宅で、ごくごく身内だけで行われた。その時の着物も義母美保のものを借りたという。



新婚時のお二人

新家庭は祖父と母との同居であった。そして家族揃って行橋教会へ行き、礼拝を守ったが、新婦は初めての経験であった。しかし、新婦は以前から一度行ってみたいという思いがあったので、すぐに馴染むことができたそうである。

昭和二三年四月に長女はつえが誕生し、二四年に次女ともえが生まれたが、無念にも二歳で召された。二六年十二月に三女ひろみが、二八年六月に四女えみが生まれた。



衛生管理者免状の写真

(昭和 23 年 4 月)

(三) 仕事

仕事の方は、昭和二六年に安川電機黒崎本社へ転勤になり、母と共に小鷺田社宅に移転した。(祖父は昭和二五年十一月十九日に召天している。)

以来、主として職員の厚生業務を担当しながら、仕事一筋に打ち込んだ。ほとんど土曜、日曜がないほどで、家にいることが少なかったとは、千恵子夫人の回想である。それでも子供と遊んでいる写真が残されている。子煩悩だったのであ

る。何事も一生懸命な兄の性格がうかがわれる。子供を怒ったことはほとんどなかったそうであるが、一度大声を出したことがあり、その時、子供達が「お父さんが大きな声を出した」と笑ったというエピソードが残っている。

昭和四十一年に遠賀郡岡垣町に土地を購入して自宅を建て、一家は移転した。母美保はここから八幡前田教会の礼拝に通っていたが、昭和四十三年から正野サカエ姉宅で海老津集会が開かれることになり、そこに出席するようになった。

兄は仕事の忙しさから教会に出ることはほとんどなかったが、お母さんがこのために祈っておられた。兄が礼拝に出席するようになったのは、平成三年六月二十八日に母美保が召されてからである。

昭和四十七年に不動産事業部課長となり、宅地建物取引主任者の資格を得、以来、不動産業務に関わるようになった。

そして昭和五十六年三月二十日、五六歳で定年退職し、同年五月二十八日から関連会社の同業ハウジングの取締役役に就任した。この会社は安川電機の不動産部門を受け持っており、不動産売買の資格を持った兄は大いに用いられた。本社の指示に従い必要な土地の買収、あるいは資金調達のための土地の売却をほとんど一人で担当し、兄はその一つ一つを折って、難しい案件の解決に奔走した。期限が迫り、八方塞の時に、

不思議なように買い手がついたことなどが、信徒会でよくお証がされていた。神様は兄の単純率直な、そして真実な祈りに答えてくださったのである。

このため本社の信任は厚く、兄は何度か高齢を理由に勇退を申し出たが、余人をもって代え難し、その都度慰留され、あるいは勤務日数が減ってもよいからと説得されて、結局八十歳まで勤め上げた。兄はこの事も祈り、あるいは牧師と相談しながら、その使命を全うしたのである。

(四) 病気

さて、兄の健康面であるが、私達の印象では病気の事は聞いたことがなく、いつも健康そのものと言った感じで、私達には、さすがにあの厳しい戦地を生き抜いた頑強な体の持ち主という印象だった。しかし奥さんの話では、若い時は痩せていて、ガンジーみたいだと言っていたとのこと。大きな病気はしたことはないが、親の家系でもともと血圧が高く、定年前に軽い脳血栓を起こした事があったとのことである。

それがひよんな事から、胃癌の発症が判明する。血圧の主治医の所に行ったとき、ついでに検診をしてみませんかと医者から勧められて調べたところ、胃癌が見つかった。平成十年、七三歳の時のことである。早期に発見できて、神様の導

きを感謝していたことを思い出す。胃切除手術は、県立遠賀病院で行なわれた。

胃の半分は取ったと聞いているが、手術後の回復は目覚しく、通常食べる量が減ったとか、体力がなくなったとか聞くことが多い中、兄の場合は、本当に手術をしたのだろうかと思うくらい、以前と変わらぬ食欲と体力で仕事も通常通りこなしていた。仕事の関係で外回りが多く、兄の家用車の走行距離は四、五年で十キロをオーバーするというハードさであったが、兄はそれを何の苦もなく、クリアーしていた(そのように見えた)。神様が守ってくださったのである。

しかし、手術から一年半後の平成十二年、肝臓癌が発見された。転移が疑われたが、別な癌であることが判明、すぐに県立遠賀病院で肝臓摘出術が行われた。

手術後も経過は良く、早い時期に職場復帰を果たし、仕事を続けることができたが、この頃から、高齢も加わって非常勤という形で五年ほど経過した。

その後、物忘れがひどくなり、車の運転中も方向を間違えるという事が起こるようになった。そこで平成十七年十月に、頭の状況を調べるために済生会八幡病院で検査をしたところ、脳腫瘍が見つかった。これも肝臓癌とは別な癌で、病名も多発性脳腫瘍という厄介な腫瘍であった。この時期になると、

病室を間違えるということもあり、私達がお見舞いに行っても、誰だか認識できないという状態であった。手術は困難ということ、平成十七年十一月に戸畑共立病院に転院し、サイバ

ーナインという先進的な放射線治療を受けることになった。

ピンポイントで照射するこの治療はかなりの効果があり、主治医からこれまでの最高の優等生と言われていたとの事。

私達はさすがに鈴木さん、すごいなあと感心していた。しかし、できた癌をやっつけても、多発性ゆえに、また別な所に発症するといった具合で、イタチごっこの状態が続いた。発症の度に入院せねばならず、奥さんも看病のために岡垣から戸畑まで通う事も大変であり、思い切って自宅を処分することにして、不思議なように良い買い手が与えられて平成十八年一月に売却し、同時に病院に近い高齢者向け住宅に引っ越した。その間、兄は入院中で、そのほとんどを娘さん達が協力して処理をしてくれた。また、会社の方も正式に退社した。

脳腫瘍との戦いも、終わりが近づいてきた。サイバーナイフの治療を七回も続けたのは、兄が初めてだったとの主治医の話であるが、家族の皆さんはこれ以上の治療は意味のないのではないかと感じていた。そういう時に、主治医から今後は本人が最後まで楽に過ごせることだけを考えましようとの話があり、家族も了解した。

治療を始めて二年が経過していた。それまで痛みも、苦しみもなく、いつお伺いしてもにこやかな笑顔があった。奥さんの話では、決して気の強い方ではないが、きつい仕事の時も、病氣してからも、くよくよしたり、悔やみ事を聞いたことがないという。ここまで良き牧者なる主によって守られ、導かれて来たのである。兄もまた、その御方に信頼し、平安を得ておられたのであろう。

(五) 召天

そして、神の時が来た。平成十九年十二月六日(木曜日)、容態が急変し、家族が呼ばれた。

教会にも連絡が入り、金生伝道師と私が夕方、病院にお伺いした時は小康を得た状態で、意識があるのかどうかはつきりしていなかったが、穏やかな表情をしておられた。そこで共に賛美歌を歌い、祈りを捧げ、全てを主の手にお委ねした。

この状態であれば、今夜は大丈夫でしょうという医師の意見もあり、私達は心を残しながらも、家へ帰った。私自身は、これまで何度も困難を乗り越えてきた鈴木さんだから、きつと回復するに違いないと思っていた。

しかし、主のご計画は人間の計画とは異なり、天が地よりも高いように高く、その思いは計り難い。その夜、状態が悪

くなり、遂に翌七日(金曜日)早朝、平安のうちに天に召された。享年八二歳だった。

八幡前田教会において、十二月七日(金曜日)夜に前夜式、八日(土曜日)十一時から告別式が、金生伝道師の司式によってしめやかに執り行われた。

講壇には一ヶ月前に家で撮ったという、いつものにこやかな表情の写真が飾られていた。



告別式

五 思い出

(一) 『父』

福原 はつえ (長女)

父は厳格な私の曾祖父に厳しく育てられたようですが、お話し好きで、多趣味で、誰でも友達にし、皆を笑わせていました。テニス・社交ダンス・囲碁・将棋・マンドリン・ギター・バイオリン・ピアノ・カラー魚拓……中でも魚釣りは曾祖父と幼い時から行っていたようです。その多趣味なお陰で、私は小さい時からピアノを習い、今も仕事として続けています。父母は七十歳前後に、よく外国旅行に行きました。オーストラリアとニュージーランドには、夫と私も同行し、良い思い出となっています。父は帰国後に作詞をすると、私に作曲をして欲しいと、よく頼みました。いつも友人達との旅行でしたので、その中の踊りの先生に振り付けを頼み、皆で楽しんでることもありました。

(今だから言えるエピソード)

戦後のある日、遠くに買出しに行った父は、帰るために駅に行くとき、駅は人で溢れていたそうです。父はどうしても次の汽車に乗りたくて、ある事を思いつきました。自分で番号札を作りました。そして溢れている人達に番号札を配りました。皆はその番号札のおかげで、整然と乗れたようです。もちろん、一番の札は自分用でした。

こんな話を沢山聞きましたが、今にして思えば、書き留めておけばよかった……と。

脳腫瘍で入院する八十歳まで(病気にならなければ、今も現役でしょう)会社勤めをし、よく働き、何でも楽しむ父でした。冗談好きの父だったから、今もどこかから「冗談、冗談」と言っただけ、出てきそうです。



はつえさんと箱根で
(2002年10月)

カナダ音頭

作詞 鈴木 一幹
作曲 福原はつえ

(くりかえし)

アアアアー アアアアー

アアアアー

一 山はロッキー

レイクルイズの水に

映す氷河の 山の陰

森は 森は生えて

葉も伸びて

リスやウサギが

手で招く

それ 手で招く

(くりかえし)

サッサ踊れよ

カナダの音頭

みんな揃って

シャシャントナ

ソレ シャシャントナ



鈴木一幹画



1994年カナダ・レイクルイズにて

二 滝はナイヤガラ

爆風(ばくふう)昇り

掛けた情けの 虹の橋

川は 川は渦巻き

気もはやり

船で行きたや 滝壺へ

それ 滝壺へ

三 花は万花(ばんか)

の国際色に

揃えしガーデン

ブッチャード

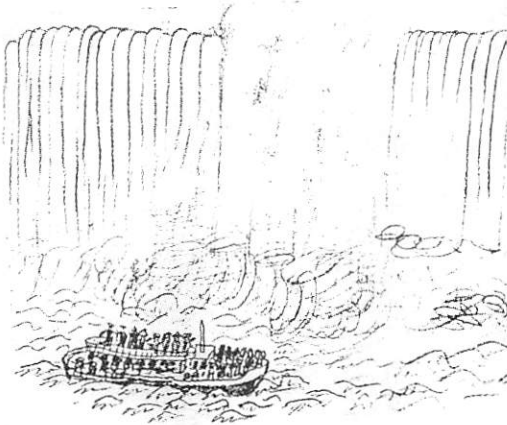
歩く 歩く小道も

二人連れ

休むベンチは

花の陰

それ 花の陰



(二) 父の思い出

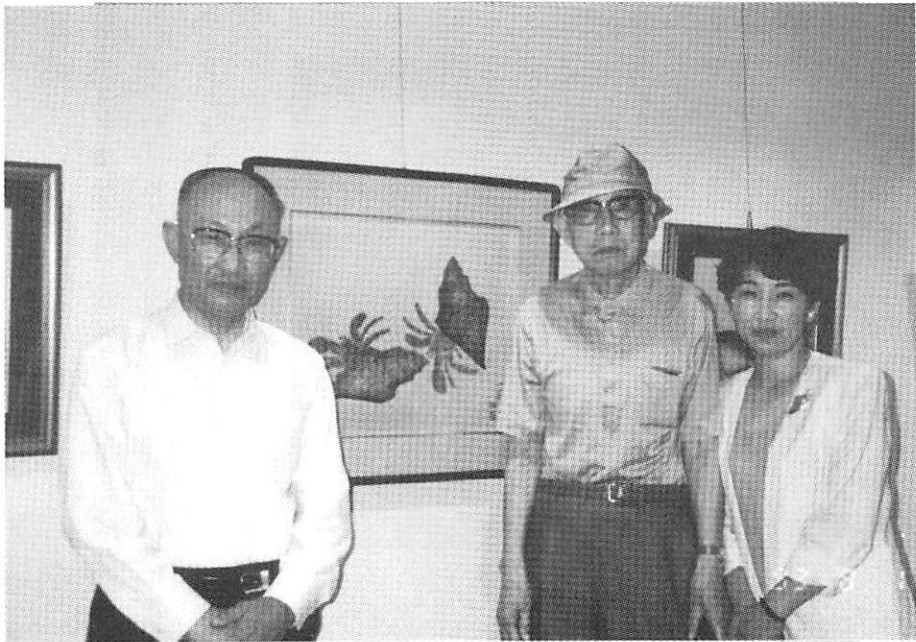
奥　　ひろみ(次女)

私が五歳頃だったと思います。家族でトランプをしていて、私がおすねで、父からげんこつ(愛の鞭)をもらったことがあります。今でも鮮明に覚えています。(唯一、私だけの宝物です。) 五年間、安川電機に勤め、父は本社、私は八幡工場でしたが、「父にそっくり!」と言われるのが、とてもうれしかったです。時々、電車で一緒になりましたが、父の周りにはいつも誰かがいて、いつも笑い声が絶えませんでした。

父は何事にも一生懸命で、前向きで、明るい人でした。父に母に守られながら今に至っておりますが、そろそろバトンタッチの時が来たんですね。最期の二年余りは、家族のあり方を、人の一生を考えさせられ、いろいろな経験をさせてもらいました。身をもって教えてくれました。とても感謝しています。

生まれ変わっても、父と母の娘でいたいと思っています。大好きです。

ありがとうございます。



カラー魚拓の個展会場にて、ひろみさんと

(三) お父さんへ

大庭 えみ (三女)

もしも今、あなたが私の質問に答えてくれるのならば、あの時どう思っていたのか教えてください。

- ① 私が生まれた時、四女目の私をどう思いましたか。
- ② 小三の頃、朝早く起きて、一緒に魚釣りに行きましたね。あの日は雨が降って寒かったですね。
- ③ 会社から自宅へ大事な電話をしてきた時、小五の私がある電話口でふざけてしまった時、……ごめんなさい。
- ④ 自分自身の進路を決めかねて、頼ってばかりの私でした。結婚生活のいろいろな問題で、困らせてしまいました。
- ⑤ 私達が嫁いでしまっって、お母さんと二人になった老後を、どう考えましたか。
- ⑦ 病気になるって、娘三人が思いつくままに世話したこと、行き届かなかったけど……ごめんなさい。
- ⑧ 仕事をしていて、悩む事を相談したかったなあ……。

こうして筆を運んでいると、あなたがいなくなった寂しさ

が込み上げてきます。忙しさに追われて、心の奥に潜んでいた感情が止め処もなく溢れて、紙面を濡らします。

私達が息子だったら、お父さんともっと語り合っていたことでしょうか。あれだけ団欒のあった家族も、今考えると、お父さんの本心を何も聞いていなかったように思います。

あなたの娘に生まれて、本当に幸せでした。ありがとうございます。



宮崎のはつえさん家族、えみさんと
(1996年冬)

(四) 鈴木一幹兄の思い出

八幡前田教会 伝道師

金 生 一 郎

私が鈴木兄とお会いしたのは、私が八幡に遣わされてからの十年ほどです。その間の鈴木兄の思い出として、思い起こされるのは、やはりいつも堂々とされていたこと、そしていつも笑顔であったということであります。お話をしても、力強く話されていた様子が思い浮かびます。

しかしそれは楽で何の困難もない生涯であったからではなく、むしろその反対で、兄はいろいろな困難や問題の中を通られていました。例えば、戦争での体験をお伺いすると、「我が思い出」にあるように、生きておられるのが不思議と思えるような中を何度も通られています。目の前で舟が撃沈したり、爆撃にあい、命を落とすような危険の中におかれたいしておられます。また、お仕事の上でも不動産関係の仕事で、ご苦労が絶えなかったと聞いています。

そのような中で、どうしてあのように力強く、堂々として

おられたのか、またいつもあのように笑顔でおられたのか、どうしてだったのだろうかと思いますが、それは兄が聖書の御言葉を通して、主が共にいて下さることを深く味わっておられたからだと思います。

兄の愛唱聖句は詩篇三三篇「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」であり、愛唱された賛美歌は四〇五番、「かみともにもいまして」でした。

最後になった「我が思い出」(三二号)の終わりにもお祈りが記されていますが、そのお祈りの中で、「わが敬愛する天のお父様、常にわたしを見守り、勇気を付けていただきまして感謝いたします。」と祈られています。その祈りがいつも心のうちにあつたのだと思います。主がいつも共にいてくださり、見守っていて下さる、このことを確信しておられた故に、動じない、力強い生涯をおくられたのでしよう。

最後の二年間ほどの闘病生活においても、お話を聞くと、放射線治療をされるときも、神様が共にいて下さって、わたしの時は不思議なように先生がその患部にちゃんと放射線を当てて下さるとおっしゃっておられました。

昨年十二月にお召されになるとき、前日の夕方、急にお

電話いただき、容態が悪くなったとお聞きしましたので、急いで病院にかけつけました。お祈りしたところ、少し落ち着かれましたので、私も一安心して、家に戻りました。

しかし、次の日の朝、急変され、「先ほど召されました」とのお電話に驚き、あわてて病院にかけつけました。その時のお顔も本当に晴れやかで、平安のうちに召されたことが見て取るように分かりました。この地上の最期の時まで、主が兄と共にいて下さり、見守っていて下さったことを確信しました。

私も鈴木兄のように、主と共にいて下さることを実感し、またその主の見守りのうちにあることを確信し、どんな中にあつても力強く歩むことができるよう、信仰に立って歩んでいきたいと思えます。

(五) 神と人にとに愛されし一幹兄

八幡前田教会 信徒

正 野 眞 宏 (友人)

鈴木一幹兄とは、同じ岡垣町に住んでいるということ、そして私の母が自宅で家庭集会をしていた時、お母さんの美保さんが出席してくださっていたということもあつて、いわば家族ぐるみの主にあるお付き合いをさせていただいておりました。

一幹さんは、「我が思い出」にも書かれているように、お母さんの信仰の良き薫陶を受けられ、戦場の中にあつて主の不思議な守りを体験され(陰にあつてお母さんの日夜の祈りがあつたことを思われます)、しっかりと信仰を持っておられました。終戦による帰還後、安川電機に就職され、お仕事の忙しさもあつて、教会からしばらく離れておられました。しかし、結婚後もお母さんと同居されて、奥さんと共に孝養を尽くしておられました。集会后のお茶の時間に一幹さんの優しさを嬉しそうに語っておられたことを思い出します。

一幹さんが再び教会に出席されるようになったのは、お母

さんが亡くなられてからと記憶しています。お母さんがこのために祈っておられた祈りに、主がこのように答えてくださったのでした。

それからの一幹さんはほとんど休まれることはなく、奥さんとご一緒に礼拝を守られるようになりました。

その内に教会の信徒会にも出席されるようになり、数年後には会長まで引き受けてくださって、お世話を戴きました。またクリスマスにはよくサンタクロースになって、子供達を喜ばせてくれました。にこやかな円満な顔はサンタクロースそのままです。機転の利いたアドリブや口上は、会場を盛り上げました。

信徒会でよくお証し下さったのは、会社での事です。不動産部門の責任を負っておられた関係で、会社の資金繰り等で難しい土地の売買をしなければならなくなった時、祈っている内に不思議なように良い買い手に巡り会ったというような内容でした。それが一度や二度ではありません。土地売買の関係で暴力団とも渡り合うこともあったようです。一幹さんはそれまでの祈りの経験から、神様は祈れば必ず良いようにしてくださるという、単純率直な信仰を持っておられました。信頼しての祈りですから、神様もその信頼に答えられるという風です。ですから、何でも事ごとくに祈られました。

一幹さんの一番の印象は、丸顔でいつもニコニコされて人の心を和ませる円満なお顔です。それは生来の穏やかな性格と、戦争で生死を乗り越えてきた強い精神力から来ていると思っていましたら、ある時、奥様から気の細い所があるのですよと言われ、親近感を覚えると共に、笑顔の奥にあるのは信仰による平安であると教えられた次第です。

一幹さんはまた、才能豊かな方でした。その記憶力の良さは、「我が思い出」での細やかな描写でも分かります。文章力も秀でていました。また菊作りや野菜作りにも才能を発揮され、カラー魚拓は公民館講座の講師をされるほどの腕前で、教会にも描いた鯛が今にも飛び出すのではないかと思うほど生き生きとした素晴らしい作品が展示されています。私も責任を持っている福祉施設に寄贈をお願いして展示し、子供達に説明しております。

一幹さんのご生涯を一言で言うなら、愛された方であったのではないかと思えます。一人息子としてお母さんから愛され、祈られ、戦争中は戦友や上官から目をかけられ、会社からは八十歳を超えるまで用いられ、家庭にあつては奥さんや娘さん達に愛され、そして何よりも神様に愛され、導かれたご生涯であつたと思えます。



信徒会の皆さんと(2006年)

編集後記

- ◎ 鈴木兄が召されて、はや八ヶ月が経ちました。時には兄のこやかな顔を思い出すことはありますが、それも徐々に少なくなってきました。「去る者は日々に疎し」でしょうか。何だか寂しくなります。
- ◎ 兄は八幡前田教会誌「ぶどうの木」に、平成五年から平成十九年まで、「我が思い出」と題して十五年十四回に亘って、今では貴重な戦争体験を綴ってくれました。これは勿論、単なる戦記ではありません。兄の上になされた、神様の不思議な守りと導きの記録であります。
- ◎ 残念ながら、兄の病によりその全てを書き残すことはできませんでしたが、このままにしておくには惜しく、生前から一冊にまとめるとよいですねと話していたので、記念誌という形で遺すことになったものです。
- ◎ 記念誌の題を、「主は我が牧者」とさせて頂きました。それは手記の最後に記された御言であると同時に、兄の生涯を顧みる時、文字通り良き牧者に導かれた歩みであると思っただけです。
- ◎ 兄が書かれたカットや新たに挿入する写真を、尼田兄がパソコンに取り込んで貼り付けてくださいました。(S)

「主は我が牧者」

—鈴木一幹兄召天記念誌—

発行 二〇〇八年八月

発行者 北九州市小倉北区

日明二丁目十三番四号

リンデンバーム四〇二号

鈴木千恵子